テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン2
工藤 治
イラスト／松竹徳幸
スーパーダッシュ

主要登場人物

フリオ……いたずら好きで熱血漢。早く大人になりたい15歳。なりきりの修行中。

キャロ……まじめでしっかり者。幼なじみのフリオに口やかましい。なりきり修行中。

クレス……ダオスを倒した時空の勇者の一人。明るくさわやかな剣術士。

ミント……時空の勇者、癒しの法術師。控えめでやさしい聖女。

クラース……時空の勇者、召喚術士。最年長でクレスたちのまとめ役。

チェスター……時空の勇者、妖精弓の射手。クールだが妹アミィへの愛情は強い。

アーチェ……時空の勇者、ハーフエルフの少女。活発な性格の魔法使い。

すず……時空の勇者、幼いくの一。厳しい修行を乗り越えた忍者少女。

ダオス……母星を救う悲願を背負った孤高の魔人。世界樹ユグドラシルの世界に出現する。

装丁／小松　昇（Pencil Studio）

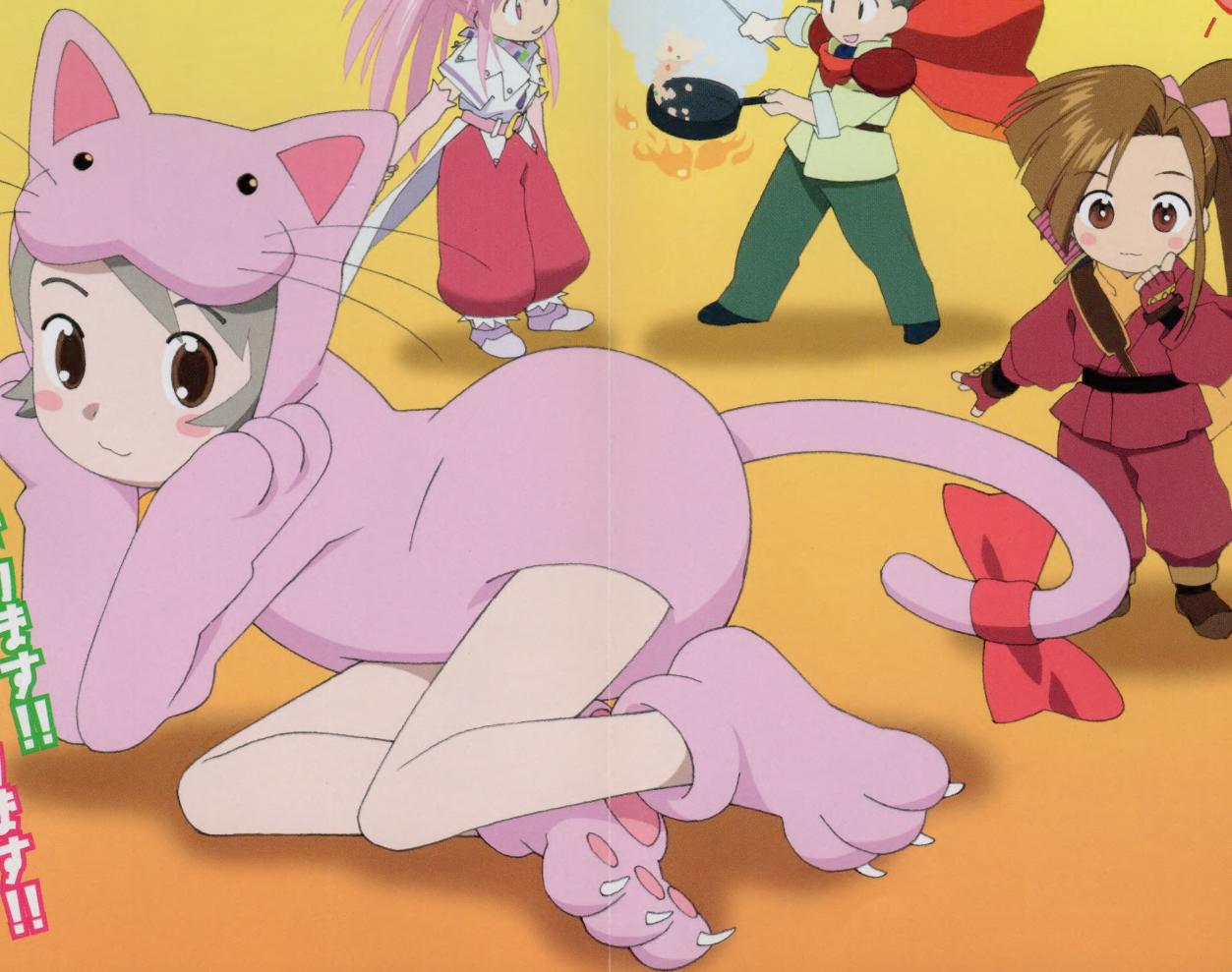
テイルズ オブ ザ ワールド

なりきりダンジョン2

工藤 治

集英社スーパーダッシュ文庫

テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン2
クレス
チェスター
クラース
ミント
フリオ
キャロ
アーチェ
すず
イラスト／松竹徳幸
©いのまたむつみ ©藤島康介 ©2000 2002 NAMCO LTD.

はりきります!!
なりきります!!

テイルズ オブ ザ ワールド

なりきりダンジョン2

工藤　治

集英社スーパーダッシュ文庫

テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン2

CONTENTS

序　章　ダオスの復活……………………………………10

第一章　魔人の記憶……………………………………27

第二章　悪魔の挑戦……………………………………108

第三章　ダオスの城……………………………………177

あとがき…………………………………………………221

イラスト／松竹徳幸

テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン2

序章　ダオスの復活

世界樹がそびえる異世界ユグドラース。
かつては繁栄(はんえい)を欲しいままにしていたこの世界も、いにしえの大戦により、そのほとんどが消滅していた。
だが残された大陸には生命の活力となるエネルギーがあふれている。
雄大(ゆうだい)な大地は緑に覆(おお)われ、地を流れる水は河となり、やがて世界の果てから流れ落ちていく。
そこで暮らす人や動物たちに最低限の自然の恵みが与えられていた。
すべてに平等な恵みを与える『大樹』が健在(けんざい)であったからだ。
——世界樹。
それはすべての生命の源(みなもと)であった。
あえて言えば、かつての大戦でこの大陸がかろうじて生き残れたのも、そこに世界樹が存在していたからといえよう。

世界樹には不思議な力がある。
枝のひとつひとつに実る『実』の中に、世界を形づくるいろんな要素が詰まっている。
そこから大地が生まれ、生命が生まれ、人の心が生まれ……。
だが、世界樹が生み出す実には『毒の実』も存在していた。
その毒の実は魔物や災厄を生み出し、放置しておくと、そこから生み出された災厄はやがて強大な力へと育ち、ユグドラースの崩壊を招きかねない脅威にもなる。
ゆえに世界樹を見守る精霊たちは、ユグドラースでの勇者を育てるのと同時に、別の時空からも勇者を呼び寄せようとしていた。

「フゥ……」
時空転移を終えた彼は、安堵の息をついた。
身長一七〇センチ、金髪に赤いバンダナ。
やさしそうな顔だちに反して、体には荒々しい戦歴を乗り越えて来たような、使い込まれた鎧が凄みを放っている。
そんなアンバランスないでたちの彼は、隣にたたずむ白い法服をまとった女性——一緒に時空転移してきた彼女に向かって、やさしく気遣いの言葉をかける。
「大丈夫かい？　ミント」

「ええ、私は平気です」
「そう……久しぶりの冒険だから、ちょっと心配になって」
と言って、鎧の彼は照れたように頭をかく。
やや照れ屋の熱血漢。
——クレス・アルベイン。
アルベイン流剣術の継承者。そして以前に魔人ダオスを倒した、勇者のひとりである。
「クレスさん、ほかのみなさんは？」
白い法服に長いブロンドの彼女が、薄暗い空間の中を見渡す。
——ミント・アドネード。
彼女もまた、勇者のひとり——癒しの法術師である。
「あれ、おかしいな？　チェスターは？」
言われてクレスも周囲を見回す。
純粋に仲間を心配する口調は急に緊張し、慌てている。勇者といえど、普段のそれはあどけなく、また少年のようなそそっかしさも残していた。
「ど、どうしたんだろ？　変だな、さっきまで一緒だったのに。もしかして間違えて別の世界に行っちゃったのかな……」
クレスはひとり、そわそわしだした。そんな彼の様子を見ていると、放っておけなくなる。

守ってあげたくなる――。ミントは後ろから、クレスの赤いマントを軽く引っぱった。
「クレスさん、後ろです」
「えっ」
きょとんとした顔でクレスが振り返る。
ミントの横で、笑いをこらえていたのはチェスターとアーチェだった。
「なんだ、そこにいたのか！」
「そこにいたのかじゃないぜ。クレス、少しは落ち着けよ」
「はっ？」
「俺たちは女神さまから頼みがあるって、ここに呼ばれたんだぜ。もっと堂々としてろよ」
クレスの親友は、諭すようにクールな笑みを浮かべる。
――チェスター・バークライト。
妖精弓の射手。後ろで結った青みがかった長い銀髪。白い肌に浮かぶ、皮肉めいた微笑み。
クレスとは幼なじみだが、両親を早くに亡くし、妹とふたりで生活してきた辛い環境が、彼の精神年齢をクレス以上にさせているのかもしれない。
もちろん彼も――勇者のひとりである。
「まあまあ、いいじゃん。そんなお堅いこと抜きで、いつもどおりってことでさ！」
ふいにチェスターの隣で、ピンク色のあざやかな髪をポニーテールにした女の子が快活な笑

顔を輝かせて言った。
――アーチェ・クライン。
精霊の森の魔女。童顔のハーフエルフでありながら天地を揺るがす強大な魔法を唱え、幾多の魔物を震えあがらせてきた――が、その性格は童顔のそれと同じ、いつまでも少女のように明るくおおらかで、しかし時折口にすることは、さすが数百年も生きるエルフの血がまざっていると思わせるほど、鋭く深いものがあったりする……。
「お前なぁ、遊びに来てるんじゃないぞ？」
横から口を挟まれたチェスターは、たしなめるように言い返す。だが、当のアーチェは動じず、あまり大きくない胸をドンと叩いた。
「大丈夫、大丈夫！　いつものように、何とかなるって！」
「……やれやれ、気楽なもんだな。ちっとも変わってねぇぜ」
「何よ、チェスターこそ堅くなりすぎじゃん。そんなことじゃ女の子にモテないよ？」
「なっ!?　関係ないだろ、それとこれとは！」
「ふぅーん、そうねえ……ありそうな、なさそうな……」
「ど、どっちなんだ！」
さっきまでのクールな表情はどこへ行ったのか。早くもチェスターは、アーチェの言動ひとつひとつに対して熱くなりかけていた。

そんなふたりの様子をクレスとミントは、あっけに取られて眺めていたが――やがて互いに顔を見合わせるとクスッと笑った。
……やっぱり、ふたりは相変わらず仲がいい。
これでアーチェも含め、勇者六人のうち四人がそろった。その時空を超えてきた勇者の四人は、あらためてまわりの様子を確認した。
薄暗い『神殿』の地下であった。
石壁に囲まれた先には一段高くなった祭壇があり、さらに先の巨大な縦穴には――この世界を司る『大樹』の太い幹が、地中深くに向かって根を下ろす。
やがて勇者の四人は神妙な面持ちとなって、祭壇へ歩み寄った。
「大樹の根元が、途中から地中に埋まってる……どういうことだ？」
「まるで大地が以前の高さより、いくぶん盛り上がってるような感じですね……」
目をしばたたくクレスの隣で、ミントが素朴な感想を口にする。
神殿は、地中に埋まりかけた大樹を掘り起こして建てられた構造になっていた。ゆえに大樹の根元を望む祭壇は、地下に位置しているらしい。
「ミントの言うとおりだな――」
突然、四人の後ろから声がした。
四人が振り返ると、鍔広の帽子をかぶった召喚術士が立っていた。

ひょうとして、どこか捉えどころのない彼は、時折ふと見せる学者ふうな顔つきになって語りだす。
端正な顔だちに隈取りのペイント。両腕には障壁用の紋様を刺青している。いつもはひょう
「この世界は——我々の世界の歴史と同じく《大消失》による、魔法素の大量消失があったと見るべきだろう。その勢いが予想以上に凄かったせいか、大樹を中心にしてこの世界には地殻変動が起こり、大地のほとんどが失われているようだ……」
召喚術士はそう言って、クレスたちのほうに歩み寄ってきた。
——クラース・F・レスター。
勇者六人の中で最年長であり、若者たちの考えをまとめる影のリーダー的存在でもある。
「ク、クラースさん、どこ行ってたんですか⁉」
「うん？　いや、お前たちより先に着いてしまったんでな……暇だったんで、ちょっとこの世界のまわりを見物してきたんだ」
クレスの問いに、クラースは呑気に答えた。
「見物ぅ？」
「そう……すずも一緒にな」
クラースがそう言って後ろを向くと、一陣の旋風が巻き起こり、ひとりの少女の影が現れた。その風がやむと、ほとんど子供と言っていい十歳前後の女の子が、赤い忍びの装束をまと

った姿をさらす。
「お久しぶりです、道中ご無事で何より――」
彼女は勇者五人に向かってひざまずき、うやうやしく挨拶する。
――藤林すず。
勇者六人の中で最年少。幼き『くの一』。忍びの里で生まれたすずは、幼少の頃から血も凍るような厳しい掟の中で暮らしてきた。そのためか、彼女が笑ったところを見た者はまだ誰もいない。
「すずちゃん！」
まるで妹に再会したかのように、クレスは満面の笑みですずに駆け寄った。
「久しぶりだね？　元気そうじゃないか！」
「……はい」
「うん！　それはよかった！」
相変わらず笑みひとつ見せず、必要最低限の答えしかしないすず――だが、それでもクレスのほうは大喜びだった。
いや、すず本人も実は喜んでいた。本当は笑顔を見せて返事をしたつもりなのだが、それが表情になって表れていないだけである――すずが笑顔という『表現』に慣れるまでには、まだ時間を要するのだろう。

「……さて」
六人全員そろったところで、クラースがみんなの前に歩み出て振り返る。
「困ったことになったな……」
クラースは腕を組んで考え込む。
すると、ほかのみんなも神妙な顔つきになった。
そのクラースに続いて、ぽつりと、クレスが唇をかみしめるようにつぶやいた。
「……ダオスが、この世界に現れたなんて」
クレスのつぶやきを聞いたとたん、勇者たちの間を重苦しい空気が覆った。
そう、彼らにとって一生忘れられぬ名……。
——魔人ダオス。
滅びかけた母星デリス・カーラーンを復活させるため、大いなる実りを求めて世界樹ユグドラシルのもとに降り立ったダオス。
彼は最後まで自分の使命を語らず、ユグドラシルに害を与えようとする人間たちを徹底して攻撃した。そのダオスに、クレスたちは戦いを挑んでいった。
長き激闘の末、それはアセリア暦四三五四年——クレスたちは、ようやくダオスを倒した。
彼の目的を完全に把握したのは、そのときになってからだった。
ダオスは人間を滅ぼしにきたのではない。母星を蘇生させる力を持つ世界樹ユグドラシルを

護ろうとしたのだ。
世界樹から生まれる《魔法素》を、兵器に利用しようとした人間たちの無謀な計画から――。
真実を知って、クレスたちの心境は複雑になった。
本当に憎むべきは、何だったのか……。
そうした中、魔人ダオスが別の世界で復活したという。
女神によって知らされた六人は、ダオスを倒した過去の経験を認められ、この異世界ユグドラースに招かれたのだった。
「問題は……なぜ、ダオスがこの世界に現れたか、だな……」
みんなの前でクラースがつぶやいたときだった。
《それを調べていただきたいのです――》
透き通るような女性の声がした。
とたんにクラースたち六人は、大樹のほうに視線を向けた。祭壇の上に空間の歪みともいうべき揺らめきが立ち昇り、やがてそれがカーテンのごとく開かれると、二人の女神が降臨した。
美しき女神だった。
薄物の衣をまとい、繊細な水晶細工をほどこした冠をかぶった、輝かしく近寄りがたい高貴な存在の登場に、クラースたちは緊張し、うやうやしく一礼した。

「私はエイダ……時空の勇者たちよ、よくぞここに来てくれました」
　女神エイダは微笑みを見せた。
「私はステラ……お姉さまとともに、みなさんの到着を心から喜んでおります」
　隣の女神ステラも、続いて微笑みを見せた。
　エイダの妹のステラは同じ女神の装いでありながら、どこか親しみの持てる雰囲気を持っていた。黄金の髪に超然とした顔だちのエイダに比べ、ステラは黒髪に丸みのある顔だちをしており、女神としての神々しさよりも現在を生きる人々の平均的な美しさに近かった。それゆえ親しみが感じられたのだろう。姉妹でありながら姉のエイダは超然とした《未来》を感じさせ、妹のステラは《現在》の親和を予感させた。
　やがてかしこまっていた六人の中から、代表のように年長者のクラースが祭壇へと歩み出た。
「まず、お伺いしたい。さっき『なぜダオスが、この世界に現れたか——を調べて欲しい』とおっしゃられていたようだが……」
「はい。しかし正確に言うと『何者か』が、になりましょう」
「何者かが？」
　クラースの質問に、女神エイダがうなずき返す。
「つまりそれは、ダオスが何者かに操られているということですか？」

一同はびっくりしたかのように顔を見合わせる。誰もが信じられないといった顔をしていた。
六人の代表で話にのぞんだクラースはつぶやきをもらす。
「正直言って、信じられない。あのダオスが操られているとは……」
「本当にダオスが、操られているのですか？」
考え込んだクラースの後ろから、法術師のミントが前に出た。
続いて、妖精弓の射手チェスターも問いかける。
「その何者かが、ダオスを操ってるという根拠は？」
すると、意外な答えが返ってきた。
「それは——ダオスが記憶を失っているからです」
「!!」
全員が言葉にならない声を上げた。
——あのダオスが、記憶喪失（そうしつ）!?
衝撃的な話だった。神殿の地下がとたんに冷え込んだ気がする。
「これで、自（みずか）らの意志でこの世界にやってきたのではないことが考えられます……」
女神ステラが根拠を述べた。
わざわざ記憶を失うために、ダオスは別次元に跳（と）ぶ必要はない。となれば——何者かが、強

制的に連れてきた可能性が高い。
——その何者かは、それだけの力を秘めているということになるのか。
ひとり考え込むクラースに対して、その疑問に答えるかのように女神エイダが口を開いた。
「おそらくその者は、あなた方が倒した直後のダオスの残留思念だけを、こちらの世界に運んで再生を試みたのでしょう。そうでないと、生きている完全な状態のダオスでは操れない、その力が強大すぎて不可能だと判断したのではないかと思います」
なるほど、そういうことか。
不完全だからこそ、操れる——と、その何者かは考えたというわけか。
クラースがうなずきかけたときである。
「ふ、不完全って……」
クレスが声を上げた。その口調はあきらかに戸惑っている。
「つまり、以前の自分が何者であったかを知らないために——あの強大な魔力も封印されている状態なのです」
「そんな……」
クレスの戸惑いが強まった。アルベイン流剣術士の誇りが、抵抗感をもたらす。記憶も失い、魔術さえ忘却の彼方にあるダオスに、自分は何をどうしろと——。クレスの顔が、困惑の色に染まったときである。

「それって、意味ないじゃん！　そんなのがダオスだって言えるの？」
いきなりアーチェの呆れたような声が、地下の神殿に響き渡った。
その瞬間、考え込んでいたクラースがはっと顔を上げる。
――そう、それだ！
何者かは、ダオスの何を利用したかったというのだ？　クラースは女神たちに向き直って、重ねて質問した。
「そんな状態のダオスを操って、どうしようと――？」
「はっきりとした目的は、まだわかりません」
「そのことについて、調べていただきたいのです」
エイダに続いてステラが願い出る。
勇者たちは、さらに呆然とした。壇の上から六人を見下ろす姉妹の女神は、彼らの答えを静かに待った。
クラースは、その何者かの意図するものが見当もつかずに困り果てた。
まるで後先のことも考えず、勢いで突っ走ってしまったような子供っぽい策略にも思える。
目的は何なのか。それは現在、成功しているのか。それともダオスが中途半端にしか蘇生しなかった事実に失敗を感じて、放置したままの状態なのか……。
女神エイダが深刻そうな表情で述べた。

「しかし、どんな状態であれ――ダオスはダオス。その恐ろしさに変わりはありません」
「お姉さまの言うとおりです。ダオスの魔力は封じられているのと同じ状態で、決して消えてはいないのです」
「ということは、もしダオスが以前の記憶を取り戻し、再び魔力を使えるようになったら――」
クラースの問いに女神たちがうなずき返す。
この世界は、危険な状態になりかねない――。
今のうちに、まだ弱いうちに――ダオスを叩くしかない。そういうことなのか。
「なーんかそれって、卑怯っぽくない？」
たまりかねたようにアーチェが言う。
「だって、無力のダオスを倒すなら何もあたしたちの力じゃなくったって――」
そのとおりだった。
全員、同じことを考えていたのか――誰もアーチェの言葉に反論しなかった。
自分の星『デリス・カーラーン』の民を救うために戦っていた、ダオスの孤独な意志。それをみんな知っている。今ではダオスに対して同情の念さえもめばえている――。
もちろんダオスと戦う覚悟はしてきたつもりだ。しかし――。
考え込んでいたクラースは、みんなを代表して女神のふたりに言った。

「この世界での問題は、この世界での《勇者》に解決させるのが、本来の筋道なのでは……」
祭壇の上に立つエイダとステラは、納得した表情でクラースを見下ろす。
「おっしゃるとおりです。我々はすでに、この世界で〝なりきり師〟という、ふたりの勇者を育てているところです。ですが——」
そこで、女神エイダは言葉をいったん切った。自分たちが選んだ勇者たちのことを、心配しているような表情を浮かべている。
「勇者のふたりは、まだ力も浅く、いきなりダオスというレベルの存在と遭遇したら、ひとたまりもありません」
「…………」
女神エイダの言葉に、クラースは黙り込んだ。
「お願いです、まだ経験の浅い勇者ふたりを、あなたがたの力で育てていただきたいのです。そして導いていただきたいのです。フリオとキャロの心と力を——」
女神ステラが勇者たちの名をあきらかにした。
なりきり師、フリオとキャロ——。自分たちではなく、その彼らにダオスを倒す使命を託し、その力を得られるように導き、見守っていく……それが今回の使命。
確かに、この世界の勇者が育つ前に、ダオスが本来の力を取り戻したとしたら、ひとたまりもないだろう。かろうじてあの強大な魔力に抵抗できる力と経験を積んでいたとしても、その

戦いは長く過酷なものになる。かつてのダオスと戦ってきた自分たちのように――。
続いて女神エイダも、あらためてクラースたちに願い出た。
「この世界で――ダオスを強制的に復活させた者の正体と、その目的を確かめて欲しいのです。なりきり師のフリオとキャロのふたりでは、まだこの使命を全うするには荷が重すぎます」
六人は無言で女神たちを見上げていた。
その視線に拒否の色はない。
できれば、今のダオスとの戦いは避けたい――。そう思っていた勇者たち六人であったが、この世界での勇者〝なりきり師〟のふたりを導くためにも、女神エイダとステラの願いを受け容れようと決心していた。

第一章　魔人の記憶

ユグドラースの中心地、大樹の神殿の近くには、唯一人間たちの住む町『レグニア』が、今も健在のままであった。
その町の教会には、女神から〝なりきり師〟に選ばれたフリオとキャロが暮らしている。
彼らの生活は、にぎやかそのものだ。
「もう、またかよ！　これで何度目だっていうんだよ！」
教会の裏に建てられた孤児院の厨房で、銀髪をちょっと逆立てた威勢のいい少年が、露骨に呆れ声をはり上げる。
フリオ・スヴェーン、十五歳。
魔物の襲来で両親を失い、教会の孤児院で暮らす鍛冶屋見習いの男の子だ。
一方、その厨房で鍋やフライパンなどの調理器具を並べ、
「仕方ないでしょ、エレインは今度こそ本気だって言うんだもの！」
と、フリオに反発する、短い銀色の髪に目のくりっと大きな女の子がいた。

キャロ・オランジェ、十五歳。
フリオと同じ境遇にあり、そのフリオと幼なじみのキャロは、とにかく負けん気が強い。同じ孤児院で暮らす年下の子供たちの面倒見がよく、親代わりとなっているシスターの言いつけもよく守るのだが、フリオだけに対しては、なぜか態度が違う。
いつもケンカ腰で、言い争いが絶えないのだ。
「彼女が本気？　へっ、どうだか。エレインはいつもそう言って、好きな相手をコロコロ替えてるじゃないか。ちょっと信じられないな」
「ひどい、あれでも私の親友なのよ！」
「あ、お前、今――あれでもって、言ったな？」
「へ？」
「つまりキャロも、実は心の中でエレインのことをあきれてるってわけだ。へへっ！」
「な、何よ、それ？」
「ウンウン、わかるぜ。なんせエレインは惚れっぽいもんな。でもよ、そのたんびに『お願～い、私の王子さまに渡すお弁当を作ってェ～』って……それ、何回くり返してんだよ？」
「い、いいでしょ！　エレインはあれでも悩みやすい子なんだから。ちょっとくらいお弁当を作るの手伝ってあげても――」
「ちょっとかよ！　ここんとこ、毎日たのまれてるじゃないか！」

「仕方ないでしょ、これも〝なりきり〟の仕事なんだから！」
キャロにそう言われて、フリオはむくれた。
「はあ～、お弁当作りなんて、そんなちっぽけな仕事じゃなくて、もっとこう、でっかい魔物を倒すような勇ましいことがしたいぜ～」
ため息まじりに、フリオは窓の外を眺める。すると、
「フリオみたいな単細胞には無理ね！」
キャロは厨房に食材を並べながら、あっさり言い捨てた。
「んだとォ！　だからお前は、胸ベタで可愛くねえんだよ！」
「な、何よ！　それ！　関係ないじゃない！　あんたこそ短足のくせして！」
「おい、それこそ関係ねえだろ!?」
「あんたが先に言ってきたんでしょ！」
ふたりは額が衝突しそうなほど、急接近でにらみ合った。
そのときである。
「こら！　あなたたち、台所で何を騒いでるの！」
いきなり女性の怒声が飛んできた。
ふたりが振り向くと、厨房の入口に修道服に身を包んだ二十代前半の若いシスターが、ウサギのぬいぐるみを抱いた五歳ぐらいの女の子を連れて立っていた。

彼らの親代わりであるシスター・ミルと、この孤児院で暮らす幼いルシアのふたりだ。
「うわ！　ミ、ミル姉さん、ごめんなさい！」
バネを戻すように姿勢をピンッと正す。いたずら好きの少年は、つい先日も近所の家で飼われているネコのひげを抜いて、シスター・ミルからこっぴどく叱られたばかり。遠慮なくホウキでお尻を叩かれたときの痛さは、いまだに覚えている。
「あなたたちがあんまりうるさいから、ルシアもお昼寝ができないって困ってるでしょ！」
シスター・ミルが怒った。ミルが手を引いている幼いルシアは、ウサギのぬいぐるみをその小さい胸に大事そうに抱え、今にも泣きだしそうな顔をしていた。
「ごめんなさい、ミル姉さん……フリオがワガママばっかり言うから」
さっそくキャロが先手を切って、シスター・ミルに謝る。しかも、しっかりフリオに責任をなすりつけて。
「おいっ！　どうして俺のせいにするんだよ！」
たまらずフリオが、隣のキャロに詰め寄る。
すると、待ってましたと言わんばかりに、
「だって、フリオがエレインから頼まれた〝なりきり〟の仕事を面倒くさがるから！」
キャロは容赦なくフリオの非を責めてきた。
「面倒くさがってない！　俺はただ、でっかい仕事もやれたらいいなって――」

「ほら、そう言ってエレインから頼まれた仕事面倒くさがってる！　だいたいフリオは、女神さまから授かった言葉を忘れたの？」
「えっ、あ……」
「町のいろんな悩みを抱えた人たちの手助けをしていれば、それがいつか『世界を救う力』につながるって――そう言われたでしょ⁉」
「うっ――」
　フリオは何も言い返せなくなっていく。
「そうね、キャロ……あなたの言うとおり。人の悩みに大きいも小さいもないわ……手助けをしようとするときはそんなことを考えないで、ただその人の役に立つことだけを願って、奉仕するものよ」
　シスター・ミルまで、キャロの側についた。
「ほら、ごらんなさい。ミル姉さんだってそう言ってるわ！」
　キャロは胸を張ってフリオを見下ろす。ふたりの身長差はさほどない。一六五センチと一六三センチのわずか二センチ差なので、がっくりうなだれたフリオは、見事にキャロから見下ろされてるような格好となった。
「わ、わかったよ――やるよ、やればいいんだろ！」
　負けた悔しさを呑み込み、

「よーし、ワンダーシェフに着替えるぞ！」

フリオはやる気になった。すると、腰のポーチからビー玉ぐらいの大きさの、きれいに丸まった白い布の塊を取り出す。それは高度に圧縮されたコスチュームのひとつである。

女神から〝なりきり〟の力を授かったときに追加されたこの能力は、たくさんの衣装を同時に持ち運ぶときに便利な術だった。

剣士、魔術師、格闘家、学者、商人、医者、盗賊、音楽家……それぞれの衣装の玉が、区別できるよう微妙な色違いで小さく丸まっており、それらの玉を詰め込んだポーチの中はさながら宝石箱のように色とりどりに輝く。

この能力のおかげで、必要なときに必要な衣装の玉を取り出し、その圧縮魔法を解凍することができるのだ――。

「タアッ！」

「ヤアッ！」

フリオとキャロは、同時に《衣装の玉》を自分たちの頭上に放り投げた。それらは宙空で傘のようにバサッと一枚の布となって広がり、そしてふたりの体に舞い降りてくる。

フリオとキャロは舞い下りてきた白い布をそれぞれつかみ取ると、マントのごとく羽織って、くるりと身を回転させる。その瞬間、時空のゆらめきが立ち昇り、光のカーテンがふたりの姿を覆い隠した。

そして再び、光のカーテンが解かれると——。
そこには白いコック帽をかぶり、シェフコートのユニフォームに赤いマントをまとい、フライパンを片手に持ったふたりの『ワンダーシェフ』が華麗に登場していた。
「へへっ、料理の神様になった気分だぜ！」
フリオは自慢げに手にしたフライパンを掲げる。
「さあ、エレインのために、とびっきり美味しいお弁当を作ってあげましょう！」
「おう！　好きな男の舌とハートがとろけちゃうほど、メチャうまな弁当をな！」
ふたりはさっそく調理に取りかかった。なりきりの衣装に着替えたら、もうその能力の虜。料理がしたくってしたくって、ウズウズしてくる——。
「あらよっと！」
ワンダーシェフのフリオはフライパンの上に卵を落とし、フライ返しで形を整えながら玉子焼きをジュッと素早く作る。
一方のキャロ・シェフはホクホクのごはんを握り、海苔を巻いておにぎりを作った。続いてつけ合わせの軽いデザート用のクリームを泡立て器でホイップする。
レグニアの人々からの寄付で建てられた孤児院の質素な厨房は、たちまちふたりのシェフによって輝き出した。
「次はナポリタンだ！」

フリオ・シェフも次のレシピに取りかかった。

　パスタ鍋でゆでた柔らかいパスタをスパゲッティ・トングでつかみ取り、それを水切りざるに移したのち、フライパンでトマトソースにからめながら炒めていく。

「メインはハンバーグね！」

　キャロ・シェフが隣で、お肉たっぷりのジューシーなミートを表裏ひっくり返しながら丁寧に焼き上げる。

「火加減、注意しろよ！」

「わかってるって！」

　ジュッと焼き上がったハンバーグを、お弁当箱の中のレタスを敷いた上に載せる。

「こっちは盛りつけ、できたわよ！」

　キャロ・シェフが呼びかける。シチュー鍋でコトコトと煮込んでいた贅沢な特製ハンバーグソースの味見をしていたフリオ・シェフがうなずく。

　うまい！　さすがプロと同レベルの味！

　これだけでもシチューとして食えるほどだ。

「よし！　あとは、この特製ソースをかけるだけだ！」

　玉杓子で掬ったトロトロのうまみソースを、キャロ・シェフが焼いたハンバーグの上にこぼさないよう慎重にかけていく。

おにぎりを並べた横で、食欲をそそるハンバーグソースの香りが引き立つ。キャロ・シェフは銀紙の小皿にフリオ・シェフが炒めたナポリタンを盛って、最後にハンバーグとおにぎりの間にそっと置いた。
あっという間に、ふたりのコラボレーションによるハンバーグ弁当が完成した。
「わぁー、おいしそうね～」
脇で見物していたシスター・ミルは、そのあざやかな腕前に目を見張る。
「ルシアも食べたぁ～い」
ウサギのぬいぐるみを抱えたルシアも指をくわえて、うらやましそうに眺める。
「ねえ、あまった食材で、ほかのお弁当も作っちゃおうか？」
「そうだな。腕によりをかけて、ミル姉さんとルシアにごちそうするか！」
ワンダーシェフのフリオは、頼もしく胸を叩いた。
「まあ！　それは楽しみね、ルシア？」
「うんっ！」
シスター・ミルと一緒にルシアは喜んだ。
と、そのときである。
「おい、フリオっ！」
男の子の声がして、ふたりの少年が厨房の中に駆け込んできた。

どちらもフリオの友達である。ひとりは、レグニアの町で一番の情報通として有名なルッツ。もうひとりは、雑貨屋を営む『フンダクル商店』のひとり息子のガメルであった。
「おお、どうしたんだ？　そんなに慌てて――」
料理に取りかかろうとしたフリオ・シェフは、中華鍋を持つ手を止めた。
ふたりとも息を切らせ、シスター・ミルを押し退けるようにして奥に進んでくる。そして茶色い髪に青い瞳をしたルッツは、緊迫した表情でフリオに叫んだ。
「大変だ、魔物が現れたっ！」
「そうや！　魔物や、魔物が出たんでっせ！」
商売人の息子らしい口調のガメルも、ルッツの後ろから身を震わせて叫ぶ。
「えっ？　魔物？　どこに――」
「町の中にだよ！」
「なっ！　ホントか⁉」
いきなりフリオの表情が変わった。
「嘘つきますかいな！　フリオはんを騙しても、わてはもうかりまへんで！」
ガメルはこんなときまで商売人口調である。
「そ、それで、今どこに⁉」
「町の中央広場だよ！　今、レグニア騎士団が戦ってる――」

フリオの問いに、ルッツが即座に答える。
「中央広場か！　おい、キャロ！」
「え？」
フリオに見つめられて、キャロがドキッとする。
「剣士の服に着替えて行くぞ！」
「！」
とたんにキャロの顔にも緊張感が走った。

＊＊＊

俺たちが町を守ってやる——意気込んだフリオは、『ワンダーシェフ』から『剣士の服』に衣装替えをした。そしてキャロと、ルッツたちを伴って中央広場へと駆けつける。
レグニアの中央広場は、噴水のある池を中心にした町の人々の憩いの空間であった。
普段は散歩をする人をまばらに見かける程度だが、今は、突如起こった事件のせいで町中の人々がまわりに集まり、異様なムードに包まれていた。
「どいて！　ちょっと通してくれよ！」
フリオは人垣をかきわけて、その最前列へと躍り出る。

いきなり目の前に飛び込んできたのは、紅(あか)い鎧(よろい)をまとったレグニア騎士団の隊長レオニスが剣を抜き放ち、目の前の黒ずくめの長身の男に向かって身構えているところであった。

「貴様っ！　自分がどこからきたのかわからんとは、やはり魔物だったのだな⁉」

レオニスが叫ぶ。眉庇(まびさし)の下に覗(のぞ)いた目だけの部分で瞳を大きく見開き、兜(かぶと)の顎(あご)当てに開けられた細かい通気孔(こう)からは、レオニスの少しビクついているような怒声が聞こえてくる。

そのレオニスの背後では、

「兄貴、気をつけろ！　負けたら、今夜の晩ご飯が食べられなくなるからな！」

「ま、魔物……に、兄さん……だ、大丈夫かな……ぶるぶるぶるっ」

同じ形状の深緑の鎧をまとうグライド、蒼(あお)い鎧のメンデルが、長男レオニスの陰(かげ)に隠れるようにして声援を飛ばしている。

レグニア騎士団の三兄弟はそれぞれ剣を抜いて構えているものの、目の前に立つ黒ずくめの男の威圧(いあつ)感に押されて、完全におびえているように見えた。

フリオは興味を抱いた。レグニア騎士団がおびえている、相手の男に——。もっとよく見てみようと、フリオはその男の顔が見える位置までゆっくりと移動した。後ろから剣士の鎧をまとったキャロとルッツ、ガメルもおそるおそるついてくる。

男は何もせず、ただそこにたたずんでいた。

ゆるやかなウェーブを描いた黄金の髪は肩より下まで伸び、猛者(もさ)というよりも気品を漂(ただよ)わせ

ている。さらに全身を覆う漆黒の衣、二重のマント、金糸を使って装飾されたブロケードの模様、手首を飾る金の腕輪など、どれをとって見ても宮廷に属する高貴な存在か、あるいはどこかの王国の君主を思わせるような、威風に満ちた装いをしている。

　しかし、その顔は透き通るような真っ白い能面であり――まるで悪魔に見つめられているような、心が凍てつくほどの鋭い眼が光っていた。確かに、魔の匂いがそこにはあった。妖しく誘い込まれてしまいそうな藍色の双眸。それに見つめ続けられると、心から降伏してしまいそうな、危険な匂いがする。

　なるほど、魔物に間違えられそうな雰囲気は強い――レグニア騎士団が警戒したのも、無理からぬことだろう。

　しかし、まだ十五歳のフリオにはその男が放っている空気が何であるのか、またその意味することが何なのかについてもわからずにいた。それよりも、

「……あ、あれは魔物じゃなくて、人間じゃないのか？」

　想像とはまるで違った男の流麗な姿に、フリオは違和感を覚えた。

　むしろフリオには――その彼が、どこか〝かわいそうな存在〟に見えていた。

　恐ろしく孤独な世界に生きる人。

　二十代半ばぐらいと思われるその男の人から漂ってくる、生きざまのようなものを、第一印象のときから感じ取っていた。胸を衝かれる思いがした。

孤児院で育ってきた環境だからこそ、その男の人が背負っている孤独感のようなものに、心が反応したのだろうか。いや、共感していたのだ。

——あれは、自分の未来の姿ではないか、と。

それは憧れに近いものだった。男として決して捨てられぬ冒険心がくすぐられていた。こんな大人の男になりたい。孤高の旅人——夢に見た理想の姿が、そこにあったのだ。

「おい、レオニス！　この人のどこが魔物だっていうんだよ⁉」

フリオは考えるより先に身を乗り出していた。

レグニア騎士団三兄弟のそばに歩み寄り、彼らの怒りを鎮めようと声をかける。

「どこから見たって、人間そのものじゃないか！」

「う、うるさい！　子供は黙ってろ！」

剣を構えたまま、身動きできずに固まっていたレオニスが震える声でどなり返す。

「こ、こいつは……私の質問に何も答えられなかったんだぞ！　ただでさえ、怪しい身なりをしているくせに！」

「そうだ、兄貴の言うとおりだ！」

「ぼ、僕……ぶるぶるっ」

弟のグライドとメンデルが、兄の後ろで続く。

「それに決定的なのは、私が『お前は魔物ではあるまいな』と尋問したら、なんとそいつは

『そうかもしれぬ』と答えたのだぞ！　自ら正体を明かすとは、なんとも大胆不敵な魔物ではないか！　しかも町の中に堂々と入ってくるとは——このレグニア騎士団が成敗してくれるわ！」

　言葉だけは威勢よくレオニスが叫んでいる。しかし、その剣を持つ腕はガタガタと震えっぱなしだ。

　対する魔物呼ばわりされている男は、動じる気配もなく、ただレオニスたちを哀れむような表情で見つめ返している。

　フリオはその男の様子に注目した。剣を向けられてうろたえず、あれだけ冷静にいられるとは——やはりどこか只者じゃない気がする。

「フ、フリオ……ど、どうなっちゃうの？」

　後ろに、おそるおそる近づいたキャロが聞いてくる。フリオがちらりと振り返ると、キャロもその男の人のほうに視線が釘づけだった。

「安心しろ、レオニスはきっと何もできないから——」

　フリオは確信しきったかのようにキャロに言った。

　いつも威張り散らしているレオニスだが、本当は気が弱い小心者だということを知っている。現に今だって、剣を抜いてしまった自分に戸惑って、どうしたらいいかわからなくなってしまっている。おそらくこのまま膠着状態が続くのだろう——フリオがそう思ったときだっ

た。
「愚かな……」
いきなり黒ずくめの男の口から、つぶやきがもれた。なんという繊細で、深みのある声なのだろう。心に響くような透明感のある声だ。
「私には、お前たちと戦う理由はない……」
男はそう言って、レオニスに歩みだす。とたんに、レオニスの兜の顎当てから「ひっ」という短い悲鳴がもれた。
「く、来るな！　魔物め、貴様は自分で『魔物だ』と、さっき認めたではないか！」
レオニスの問いに、黒ずくめの男が答える。
「……わからぬのだ……自分が何者か、どこから来たのか……ただ、確かなことは……我が名は〝ダオス〟……それだけだ」
と、自らの名を語った。
「ダ、ダオス……」
「……ダオス……さん」
フリオに続いて、男の話に聞き入っていたキャロもその名をつぶやく。
目の前のレグニア騎士団三兄弟に向かって、そのダオスは近づいていく。ますます三兄弟の震えが高まる。

「く、くそっ、魔物め!!」
突然、震えが最高潮に達したレオニスが、その反動で剣を勢いよく振り上げてしまう。
その瞬間、固唾を呑んで見守っていた中央広場を取り囲む町の人々から、驚きと悲鳴のざわめきが一気に上がった。そしてそれが、合図になったかのように——。
「こ、これでも食らえーっ！」
勢いづいたレオニスは、我を忘れたかのようにダオスに向かって飛びかかる。
「——危ないっ!!」
フリオとキャロは、同時に叫んでいた。
だが、目前まで迫っていたレオニスの剣を、そのダオスはさっとたやすくかわしてしまった。
「お、おのれっ！」
剣をかわされたレオニスが振り返り、次こそは懲らしめてやろうと本気になって、ダオスの背後に襲いかかる。再び大勢の人々から声が上がった。
「覚悟っ！」
レオニスの剣が、ダオスの背を包むマントに迫る。
今度こそやられる！
誰もがそう直感したときだ——。

フッ！

突如にして、ダオスの姿が消えた。いや、そのくらいの素早さで、彼は宙空に跳躍したのだ。目にも止まらぬ瞬発力に、中央広場に集まっていた人々から喚声がわきたつ。

そして目標を見失ったレオニスは——。

「ぬわあああああああーっ！」

絶叫しながら、勢い余って中央広場の噴水に転落した。水飛沫が高く飛び散る。

「あ、兄貴！」

「兄さん！」

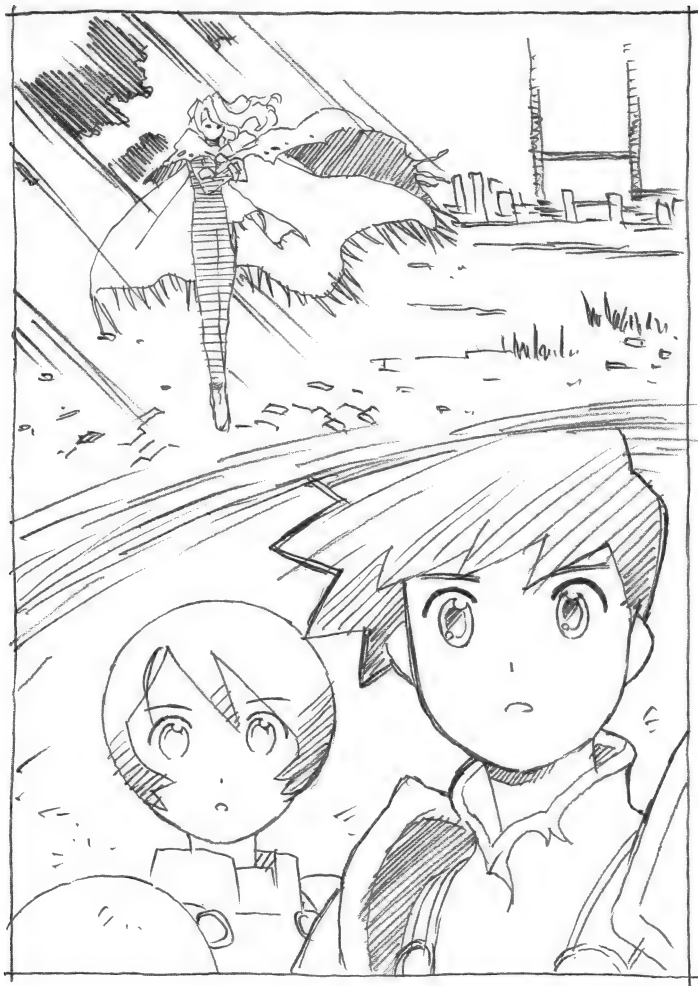
弟のグライドとメンデルが、池のほとりに駆け寄る。その後ろで、ダオスがマントをふわりと舞い上がらせて着地した。勝負はあっけなく片づいていた。

「す、すげえ……」

フリオは、あざやかなダオスの身のこなしに感激した。

やはり只者じゃない。それも、相当の手練だと見た。フリオの心はカッと熱くなった。

——こんな人を待っていた！　逢いたかった！　強くて、カッコよくて、どこか寂しさを背負っている……まさに自分の憧れ！　フリオは誰よりも先に、その人と親しくなりたい気持ちを抑えきれなくなって駆けだしていた。

「あ、待ってよ！」

それは、あとに続くキャロも同じだった。
「――あ、あの!?」
いきなり駆け寄って、フリオはダオスに声をかけた。
「……………」
すぐに返事は返ってこなかった。彼は、レオニスをあっけなく片づけてしまった自分の行動に反省したかのように、神妙な顔でたたずんでいた。そしてフリオのほうに藍色の瞳を向けてくる。フリオは即座に、ぺこりと頭を下げた。
「すみませんでした！　いきなり魔物だなんて、ヘンなこと言う奴がいて！」
「……………」
「本当にごめんなさい！　あの人たち、悪気はないんです。最近、町の外で魔物が増えてきたから――それでピリピリしていたんです。どうか、失礼を許してあげてください！」
フリオの隣で、キャロも懸命に詫びている。
しばしの沈黙があった。
やがてダオスが、ふたりの格好を見つめて静かに訊いてきた。
「……君らも、騎士というものなのか？」
「えっ？　いや、これは……あの、なりきりっていう……」
見つめられたキャロが、ドキマギしながら答えようとする。

「いいんだよキャロ。そんな細かいことはあとにしろ！　それより、あの——ダ、ダオス、さん！　お詫びに、ごちそうさせてください。この町一番の料理——俺、おごりますから！」
「フ、フリオ、そんなお金あるの？」
「もちろん、お前の貯金からも出してくれるよな？」
「えっ」
「嫌なのか？」
「そ、そんなことないわよ——あ、行きましょうダオスさん！　私が案内しますから」
さっそくキャロは、ダオスの手を引いて歩きだした。
「あっ、おい！」
フリオも、慌ててあとを追いかける。
「フ、フリオ！　待ってくれよ！」
「わても、連れてってぇなぁ〜」
乗り遅れたルッツとガメルも、追ってくる。ダオスの移動に従って、町の見物人たちもぞろぞろと動きだした。みんな、ダオスに興味を引かれたかのように——。
「……まずいな」
その人の流れを見送る一行の中で、ひとりの男がつぶやいた。クラースである。勇者六人

が、立ち去っていく人の群れを呆然と眺めていたのである。
「ダ、ダオスが……」
クラースの隣に立つクレスが、信じられないような驚きの声をもらす。
するとさらに隣では、
「すっかり、町の人と馴染んでいますね……」
「これは、何かの間違いだろ？」
ミントに続いて、チェスターが我が目を疑っているようにつぶやく。
「どうやら、一歩出遅れたな……」
言ったあと、クラースは後悔したように唇をかみしめた。
それは勇者六人にとって、夢でも見ているような光景だった。女神に話を聞いて大樹の神殿からレグニアの町まで移動してきたが、その間に事態は思わぬ方向に進みだしていた。この中央広場にたどり着いたときは、すでにダオスが町の人たちと接触したあとだったのだ。
そんな拍子抜けしたような一同に、アーチェが訊ね回る。
「ねぇねぇ、さっきの子たちが〝なりきり師〟の、フリオとキャロでしょ？　いいの、なんかダオスと仲良くなっちゃってるよ？　あれでホントに、いいの？　ねえってば。みんなあたしの話、聞いてる？」
「……わ、私に聞かれても、何も申しあげられません……」

みんなに無視されて、半ばムッとしかけたアーチェに、すずだけが答えていた。
しばらくして、
「ふぅ……何ともやっかいなことになったな……」
クラースは腕を組んだまま、困ったように空を見上げた。

＊　＊　＊

パブ・ローズに案内されたダオスは、そこでも歓迎ムードだった。
こぢんまりした店内は、中央に座ったダオスを囲むようにフリオとキャロ、そしてルッツやガメルが両脇を陣取り、さらに広場からぞろぞろついてきた見物人たちでごった返していた。
そんな賑わいの中で、フリオたちに無理やり連れてこられた黒ずくめの男は、あいかわらず無表情のままだった。ダオスは名前以外、自分がどこから来たのか、今まで何をしていたのか、その過去についての記憶がすっぽりと抜け落ちていたのだ。
「もしかしたら、どこか遠くの国の王様だったんじゃないかしら？　だって、身なりがすごくいいもの！」
「いや、さっきのレオニスの剣をかわした動きを見たかよ！　この人は、きっと伝説の剣士なんだぜ！　魔王とかに呪いをかけられて、記憶を失ってるんだよ！　きっとそうだよ！」

フリオは興奮しながら、自分の予想を自信たっぷりに語る。
子供たち特有の想像力のたくましさか。フリオとキャロは、勝手にダオスの過去を想像し、そして彼の力になってあげようと盛り上がっていく。
その様子を離れた場所のテーブルから見ていたクレスたちは、もはや頭を抱えていた。
(ク、クラースさん、どうするんですか?)
小声でクレスが訊いた。
彼らは、ほかの客にまぎれて店の中に入ると、ダオスの席から二つほど離れた丸テーブルに着き、できるだけ目立たないようにしていた。といっても、彼らとダオスとの間には立ったままダオスを囲む人垣が出来ていて、それによってうまく隠れてしまっている。おかげで肝心のダオスの姿も、こちらに背を向けた人の壁の隙間からわずかに見える程度だ。
そしてここに、すずの姿はない。くの一として隠密行動を専門とする彼女は、人ごみに身をさらすことを避け、おそらく天井裏にでも潜んでダオスのことを監視しているのだろう。
(……しかし、不思議なもんだな……)
(何がです?)
(あのダオスが、普通の人に囲まれている……これはめったに見られない光景だぞ)
(感心してる場合ですか、クラースさん)
(うん、そうなんだが……あまりにダオスらしくない感じがするんでな。ちょっと珍しくて)

小声でクレスに答えたクラースだったが、ふとそこで否定の意識がめばえてきた。
いや、これが本当の姿なのかもしれない。
ダオスが望んでいたもの——。故郷の星デリス・カーラーンで、彼は多くの民に感謝され、慕（した）われ、たくさんの笑顔に囲まれて……きっと、それが本人の望んでいたものではないか。
故郷では、彼はどんな生活をし、どんな人だったのだろう。そのことへの興味をクラースは抱き始めていた。
「俺さ、ダオスさんに剣技を教えてもらいたいな！」
ダオスの脇に立ったフリオが、大きな声で言った。
「もう、フリオったら。ダオスさんは剣士かどうか、まだわからないのよ！」
フリオと反対側の、ダオスの左脇に立つキャロが言い返す。
「でも、さっきのあれは凄（すご）かったな！　レグニア騎士団よりも、この人のほうが絶対に頼りになると思う！」
フリオの後ろに立つルッツが言った。
「うんうん、そうだよな！　ねえ、ダオスさん。これから行くところはあるの？」
何気なくフリオは、ダオスの横顔を覗き込む。
その長身を持て余（あま）すかのように足を組んで座っていた彼は、笑顔もなく、ずっと何かを考え込んでいた表情で、ゆっくりと首を振る。

「……いや」
「だったら、この町に住めばいいぜ！」
「フ、フリオったら、また勝手に決めて！　……あの、でもダオスさんが、もしいいと思われたら私たち、歓迎しますから！」
左隣に立つキャロも、ダオスの反応をうかがうように覗き込んでくる。
「…………」
ちらりと視線を合わせただけで、ダオスは何も答えなかった。
「ねえ、ライエル長老に相談してみたらどう？　長老さまなら、お許しくださるはずよ」
みんなに笑顔で提案すると、右隣に立つガメルが吹き出しそうな顔で言った。
「キャロはんこそ、勝手に話を進めてはりますなぁ」
「えっ」
「アハハハ、確かに！　俺よりも積極的だぜ！」
歯をニッと輝かせてフリオが笑う。
（……何だか、ダオスがこの町に住むことになりそうですよ？）
（いや、それは……ど、どうなんだ？）
（いつまでこうしてるつもりなんですか？）
（うーん、困ったな……実をいうと、どうしたらいいのかわからないんだ）

（ク、クラースさん――）
（みんなは、どうしたらいいと思う？）
（僕は……）
クレスは考え込んだ。すると、みんなが名案を出すのかと注目する。しかし、クレスは懸命に考え込んだあげくに、ため息をつく。
（ど、どうしよう――わからないや）
（……）
期待したことを、みんなは後悔してガックリとうつむいた。
やがて、ミントが何か思いついたように顔を上げる。
（あの、ダオスと話し合ってみるのはどうでしょう？）
（何を話すんだよ？　あいつは魔人なんだぜ）
チェスターが小声で返した。
（でも、今は記憶ないっていうじゃん。あの様子だと、本当にそうみたいだよ？）
ダオスのほうに視線を向けながら、アーチェが言った。
（あんなに平和そうなところを見てると、何だかあたし……あのままダオスの記憶が戻らなければいいなって思えてきた。そうすればダオスだって、ここで幸せに暮らせるのに）
（おいおい、本気で言ってんのかよ？）

チェスターが顔をしかめる。
しかし、クレスが神妙な顔でうなずき返した。
（いや、アーチェの言いたいことはわかるよ……僕も、この世界で何も悪いことをしていないダオスとは戦いにくいよ）
（クレスさん……）
困惑（こんわく）した表情を浮かべるクレスを、ミントが横からいたわるように見つめる。だが、チェスターはそれに黙っていなかった。
（おい、クレス。お前までどうしちゃったんだよ？　忘れたのか、俺たちの村は誰のおかげであんなふうになったのか――）
チェスターは、あの惨劇（さんげき）を思い出してクレスをにらんだ。
ダオスが、自らの復活のために操（あやつ）っていた黒騎士団の長、マルス・ウルドールなる者の手によって、クレスとチェスターの故郷――トーティス村は壊滅（かいめつ）したのだ。ダオスがいなければ、あの悲劇は起こらなかったといってもいい。
（わ、わかってる……わかってるけど……）
クレスは苦い顔をしてうつむく。忘れようとしていたことを謝るかのように……。
（とにかく、あのダオスに普通の生活なんて無理に決まってるぜ）
（へ？　なんでよ）

アーチェが目を丸くさせて、チェスターを見つめる。
(魔人は魔人……その本性は捨てられないからな。ダオスは一時的に記憶がなくなってるだけで、あの恐ろしい魔力が消えたわけじゃないんだぞ)
(それはそうだけどさ……)
(こいつらだって、ダオスの正体を知ったら驚くに決まってるぜ――)
(あのさ、そういうのやめようよ。みんなの夢を壊すのは)
(夢？)
怒りにまかせて熱くなっていたチェスターが、目をしばたたかせる。アーチェは怒ったような顔で答えた。
(だって、あんなにみんなから喜ばれてるんだよ？　今さら『ダオスは魔人です、危ないから近寄るな』って言ったら、みんなの夢を壊すようなもんじゃん――)
そう言ってアーチェがまた、みんなに囲まれているダオスのほうに視線を向けたときである。
「お待たせ！　急だったから、このくらいしか作れなかったけど」
店主のローズが、大きな皿に盛ったオードブルをダオスたちのテーブルに運んできた。皿の上にはカナッペ、ソーセージ、卵料理、魚料理などが約十人分以上載っている。
「うわぁー、ローズさん、ありがとう！」

「いいえ、こちらこそありがとうね。こんな素敵な方をお店に連れて来てくれて！」
礼を言ったキャロに、ローズはウインクする。ひとりでパブを営む彼女は、フリオとキャロの理解者であり、シスター・ミルと並ぶお姉さん的な立場だった。
「へへっ、いやー、ホントは『カフェ・ベック』と、どっちにしようかって迷ったんだけど、あそこはときどき、タランチュラ・パフェとか変なスペシャル料理が出てくるからなぁー」
「ちょっとフリオ、そんな言い方はベックさんに失礼でしょ！」
「へっ、そ、そうか？」
「そうよ。ベックさんだって、一生懸命なんだから！」
「へー、じゃあキャロは、あのタランチュラ・パフェを、ダオスさんと一緒に食べてみたかったって言うんだな？」
「うっ……そ、それは……」
思い出したキャロが青ざめる。カフェ・ベックとは、レグニアの町で一番の創作料理好きのシェフがいる喫茶店だ。キャロは以前、新作の試食を頼まれて、とんでもない料理を食べさせられた経験があるらしい。
そのことをちょっと思い出して苦笑いしていると、
「キャロ！」
突然、女の子の声がした。

賑やかだった一同が何事かと、声がしたほうに視線を向ける。すると、店内の人垣をかきわけて、ダオスのいるテーブルへとひとりの女の子が寄ってきた。肩までの金髪に、おしゃれなブラウスを着たキャロと同年代の女の子である。
「あ、エレイン――」
彼女を見たとたん、キャロは思い出したように声を上げた。
「ああっ、いけない！　さっき作ったお弁当、まだ渡してなかったわ！」
フリオとふたりで『ワンダーシェフ』になりきり、一緒に作ったハンバーグ弁当はまだ教会の裏手にある孤児院の厨房に置きっぱなしだったのだ。
約束のお昼なんて、とっくに過ぎている。広場の騒ぎで頭からすっかりそのことが飛んでしまったことを後悔したが、すでに遅い。キャロと違ってお嬢様のような上品な感じのするエレインは、もう怒りがおさまらないといった様子だ。
「ひどい、ひどいじゃないの！　勝手に約束をやぶって！　かわいそうなこの私ったら、ずっとあなたのことを探してき……あっ」
キャロに近寄ろうとしたとたん、急にエレインは足をとめた。彼女の視線はキャロではなく、その脇に座っているひとりの男性へと向けられていた。
「ど、どうしたの？　エレイン！」
カルチャーショックを受けたような表情のまま、その場に立ち尽くすエレインに、キャロは

心配して声をかける。しかし彼女はぴくりともしない。息を呑み込んだような驚いたまなざしは、あきらかにダオスへと向けられていたのだ。
「………」
ダオスは無表情のまま、エレインを見上げる。何だろう、このまなざしは……彼女は、私に何か文句があるのだろうか、とダオスは少しだけ眉を寄せる。すると、
「あらまあ……どうしましょ？　あ、あの……はじめまして……私、エレインと申します」
いきなり清楚な微笑みと口調になって、エレインはダオスに挨拶をした。
ズルッ。
その見事な態度の変わりように、フリオたちはコケそうになった。
「こんなに素敵な方に……お会いできて光栄ですわ」
もう目の前の彼のことしか見えていない。それは恋する乙女の〝はにかんだ笑顔〟であり、いわゆるひと目惚れっていうやつらしい。
「なんだなんだ、急にしおらしくなっちゃって」
フリオは目をぱちくりさせる。
しかしエレインには、そんなフリオのつぶやきも耳に届いていない。じっとダオスのことを見つめて、そして何を思ったのか、いきなり勝負に出た。もうこの瞬間を見逃すまいと言わんばかりの素早さで――。

「あの、私でよければお弁当を作りましょうか⁉　ぜひ一度、召し上がっていただきたいんです！　私の作ったお弁当は、みんなから美味しいって大絶賛なんですっ！」

唐突にそこへ持っていくか——フリオは呆れたように声を上げる。

「私の作ったぁ？」

「フリオ！」

「イッテェ、何するんだよ？」

フリオは横からキャロに腕をつねられた。にらみ返すと、キャロが顔を寄せて小声で言う。

(……もう、少しは黙っててあげなさいよね！)

(なんでだよ！)

つられてフリオも小声で言い返す。

(みんなの前で恥をかかせたら、エレインがかわいそうでしょ！)

(恥をかく？　あんな心臓に毛が生えたようなエレインがぁ？)

(また！　なんてこと言うのよ！)

再び、フリオは腕をぎゅーっとつねられた。

「ふぎっ！　イテテテテ‼」

「アハハハ、何やってんだよ、ふたりして！」

いきなりルッツが声をかけてくる。ふと気づくと、まわりのガメルやローズたちもニタ〜ッ

とした意味ありげな笑みで、こちらを見ているところだった。
「え？　い、いえ別に何でもないのよ！」
あわててキャロがごまかそうとするが、
「ハハハ、隠さなくったっていいぞぉ～、ヒューヒュー」
「ま、よう言いますさかいなぁ～、『夫婦ゲンカは犬も食わない』って～」
ルッツとガメルにはやし立てられて、キャロの顔はたちまち真っ赤になった。
「ちょ、ちょっとぉ！　誰が夫婦なのよ！　ご、誤解しないでよ！」
そのムキになった顔に、どっと笑いが起きた。店内はさらに賑やかになった。
（アーチェの言うとおりだな……この平和な光景を、できれば壊したくないものだ）
フリオたちの様子を眺めたあと、クラースは小声で言いながらクレスたちに向き直る。
（じゃあ、どうするんですか？）
クレスが訊いてくる。クラースは自分の考えを整理するように、みんなに小さい声で伝えた。
（ここで重要なことは、ダオスはどういう目的で、ここに連れて来られたかだ――）
（どういう目的で？）
（ああ、そうだ――女神エイダが言っていた〝何者か〟は、この世界でダオスを復活させることに成功しているのか、それとも失敗しているのか……）

（だけど……あれは、どう見ても成功しているとは言えないぜ？）
チェスターが言った。
（うん、私も最初はそう思った……しかし……）
そこでクラースは、言葉を切った。言うべきかどうか迷っていた。その確証はまだないのだが、とつぶやいたあとだった。先にアーチェのほうがピンときた。
（へ？　もしかして……わざと？）
（——その可能性はないとは言いきれない。わざとダオスの記憶を封印（ふういん）したまま、町の人々と接触させる。そして充分に信用させたうえで、何か別の罠（わな）を仕掛ける……）
するとミントが、声を震わせて訊（たず）ねてきた。
（そ、その罠って……何ですか？）
（そこまではわからん）
（……………）
またみんな、無言になった。
確証のない話はこれ以上、進めようがない。みんなが黙り込んだ中で、ここで我々のやるべきことはただひとつ——と、クラースが小声で切り出した。
（とにかく、ダオスの記憶が封印されている今しかない——騒ぎにならないようダオスを連れ出し、女神エイダのもとへ連れていくしかない）

（そうですね、もしものことがあってからじゃ遅いから……）
（私も、町の人たちを巻き込みたくはありません……）
クレスに続いて、ミントもうなずき返す。
（うむ……となれば問題は、どうやってダオスをここからうまく連れ出すかだ）
と、クラースは四人を見回す。
何か案を求めたが、とくに出て来なかった。あの案を除いては——。
（だったら私は、ミントが提案した〝ダオスとの話し合い〟を、今から試みてみたいと思う）
（ク、クラースさん——）
（大丈夫だ。あれは自分たちの知る魔人ダオスだと思うから、あのときの恐怖がよみがえるんだ。だから私たちも、ダオスと同じように、いったん昔の記憶を忘れて、普通の人だと思ってのぞめばいい。そうすれば案外、簡単に決着するかもしれん——）
それに何事も試してみないと結果はわからないからな、と言ってクラースは席を立った。

＊　＊　＊

テーブルのまわりを囲んだ人々を眺めながら、ダオスは不思議な感じがしていた。
自分は気がつくとこの世界で目覚め、あてもなくさまよい、レグニアというこの町にたどり

着いた。それからというもの、フリオとキャロと名乗るふたりに慕われ、さらに大勢の人が自分を取り囲むようになった。いろいろなことを聞かれるたびに答えられないもどかしさを感じるが、しかし、この明るい彼らの中にいると、記憶がないという不安がいくぶん和らいでくる。

それも、どこか懐かしいという気もしてくる。

おそらく自分は、過去にこれと似たような経験をしているのではないだろうか。大勢の笑顔……それを眺める自分は、どこか喜びを感じている。このときを待ち望んでいたようにも感じている。その理由はわからない。だが、こうして彼らの中に溶け込んでいると、次第に、闇に閉ざされた《自分の過去》もよみがえってくるかのように思える。

ダオスがくつろいだ状態で、まわりのはしゃいでる人々を心地よく眺めていたときだった。

「お兄ちゃん！」

ふいに、幼い少女の声がした。それは今にも泣き出しそうな声だった。

気になってダオスが目を向けると、おかっぱの髪を赤いリボンで結んだ五歳くらいの女の子が人垣の中から出てきて、こちらに歩み寄ってくるところだった。

「ルシア⁉」

フリオがその女の子の名を呼んだ。予想したとおり、そのルシアという子は泣いている。

「どうしたんだ、ルシア？」

「あのね……ぐすん……ジャンが、あたちのぬいぐるみを隠しちゃったの。どこにあるか、わかんないの……お兄ちゃんたちなら、わかるかなって……」
「またジャンが⁉」
フリオが呆れた声を上げる。
ダオスは、自分のそばまで近づいてきたルシアの泣いて訴える横顔を、じっと見つめた。
「お願い、お兄ちゃん……あたちの〝ウサちゃん〟を探してきて！」
「う、うーん……」
とたんにフリオは、困った顔をした。
「ご、ごめんな、ルシア。今それどころじゃなくて――」
フリオが前屈みになって、ルシアの頼みごとを断ろうとしたときである。
「私が、探しに行こう――」
「えっ？」
びっくりした顔で、フリオが見上げる。驚いたことに、ダオスは自らの意志で立ち上がっていたのだ。それは、本人でさえ予期しない行為であった。
この世界に来て、初めてダオスが能動的になった瞬間である。なぜ急にそんなことを思ったのか、自分でもわからなかった。しかし、幼い子が泣いている姿に過剰に反応する自分がいた。おそらくそれは《自分の過去》と何か関係していることなのだろう。

「心配しなくていい」
「えっ……」
幼いルシアは、不思議そうな顔でダオスを見上げている。そんな彼女にダオスは、
「私が見つけ出して、必ず戻ってくる——」
と、同じ目線の高さまで腰を下ろし、やさしく言い伝えた。
この瞬間、以前にも同じことがあったような気がした。泣いている子たちを前にして、自分は必ず戻ってくるから、と約束したような記憶がある……しかし、それがなんの約束だったのかは思い出せなかった。そこまで記憶をたぐろうとすると、とたんに霞がかかったように思い出せなくなる。ダオスの中に、再びもどかしさが込み上げた。そのもどかしさを払うためにも自分は、今のこの約束を必ず守りたい——そう思って、自分に誓ったときである。
ふいに、それは訪れた。警戒すべき気配が人垣を割って、ダオスの前に出てきたのだ。
「！」
ダオスは、その人物を見たことがあると思った。

＊　＊　＊

店の中が静まり返った。今まで誰も気がつかなかったのが不思議なくらい、いきなり好奇の

目にさらされていた。
　やっと、まわりが勇者たちのほうに注目し始めた。その先頭に立つ召喚術士(しょうかんじゅつし)の異質な装いを目に止めて、フリオとキャロも、呆然とした表情をこちらに向けている。
　まずは、彼らに挨拶したほうがいい――クラースはそう思った。
「お邪魔するよ。君たちが女神エイダとステラに選ばれた〝なりきり師〟だね？」
「……あ、あなたはどなたですか？」
　フリオのそばに寄って、警戒した表情のキャロが訊いてくる。
「私の名はクラース。そして後ろにいるのは、私の仲間だ……私たちは女神のエイダとステラに招かれ、別の時空からやって来た」
「め、女神さまに？」
「別の時空から……？」
「そう、そこのダオスを元の世界に連れ戻すためにね」
「え！」
「ちょっといいかな」
　間髪(かんはつ)を入れずに、クラースは幼いルシアに話しかけていたダオスに歩み寄る。その後ろにはクレスたちが続き、店の中は忽然(こつぜん)として異様な空気に包まれた。ダオスも緊迫した空気を察(さっ)して立ち上がる。瞬(またた)く間に両者は、にらみ合うような格好になった。

「話したいことがあるんだ――」
「……私にか？」
「ああ、まずは座らないか？」
緊迫感を解こうとするかのように、クラースはさっきまでダオスが座っていた席の向かい側へと移動する。そこに群がっていた町の人々は、クラースに席を譲ろうとして、逃げるように散っていく。ふたりは向かい合うように席に着いた。同時にクラースの後ろには勇者の四人が立った。
「……それで、私に話とは？」
落ち着いた表情で、ダオスがクラースに訊いた。
その瞬間、くっと息を呑んだ。クラースは身震いする自分を知った。
……さすがに圧倒的な迫力が漂ってくる。間近に見るとあらためてそれを感じる。これほどの存在感を持っていれば、町の人々が自分たちのほうに気づかなかったのがうなずける。
ダオスは、ほかの存在がまったく気にならなくなるほどの強い魅力――たくさんの人々の心を捕らえて放さないカリスマ性に満ちているのだ。
「……どうした、私に話があったのではないのか？」
「あ、いや……」
さすがに圧倒されていたクラースが、大きく深呼吸をして口を開いた。

「悪いが、お前にここに居てもらっては何かと都合が悪い」
やっと冷静になって、話すことができた。クラースの中に無駄話をする余裕などなかった。ゆえに、ずばり本題から切り出そうとしていた。
「お前の中で眠っている記憶と力が蘇れば、この町の人たちに危険が及ぶ……」
クラースは、続けて厳しい言葉を投げかける。その間、ダオスはぴくりとも動かず聞いていた。すべての感情を殺したような彼の表情からはどんな反応が返ってくるのか、予想すらつかない。やがて、静かな口調でダオスが答えた。
「危険……私は……危険なのか？」
ダオスが、そうつぶやいたときである。
「ふざけるな！　お前が、以前にどんなひどいことをしたか、忘れたとは言わせないぜ！」
チェスターが、今にも殴りかかりそうな勢いで叫んだ。
その瞬間、ダオスの両脇で心配そうに見守っていたフリオたちの顔が凍りつく。
「よせ、チェスター」
クラースは後ろを振り返って、興奮気味のチェスターをたしなめるように見つめた。その視線を受けて、チェスターは唇をかみしめるように言葉を呑み込んだ。
憎しみを抑えようとして、辛そうな表情だった……。
無理もない、とクラースは思った。チェスターはダオス復活に取り憑かれた黒騎士マルス・

ウルドールたちの手によって故郷のトーティス村を焼かれ、そしてそのときに、大事な妹――アミィを失っているのだ。その喪失感と怒りは簡単に消えるものではない。

チェスターのそうした心情と葛藤を和らげるためにも、早くダオスを説得しなければならない。クラースは、黙り込んでいるダオスに向き直った。

「どうだろう、私たちと一緒に大樹の神殿まで来てもらえないか？」

と、言ったときだった。

「なっ！　ちょっと待ってよ、ダオスさんをそこへ連れてって、どうしようって言うんだ!?」

たまらなくなったのか、フリオがとうとう口を挟んできた。

「もちろん、女神に会わせるためだ」

つとめて冷静にクラースは答えた。だが、そのとたんチェスターが、吐き捨てるように言う。

「ダオスの処理は、女神に任せたほうがいいからな――」

「処理って……」

ダオスの後ろで、黙って聞いていたキャロの声が震える。

「そ、そんな言い方ないだろ！　かわいそうじゃないか、何もしてないのに！」

ついに、フリオが爆発した。

「お前、本当のダオスを知らないくせに！」

チェスターが応戦するかのように身を乗り出す。横からクレスが止めに入った。
「やめろ！　チェスター」
「け、けどよ……」
親友のクレスに見つめられて、ようやくチェスターは我に返る。そのチェスターの隣に歩み寄ってきたアーチェは、厳しく彼をにらみつける。
「チェスター、相手は子供なんだよ。何をそんな熱くなってんのさ？」
「そうだ。礼儀を欠くのはどうかな……たとえ年下でも、この世界の勇者なんだからな」
クラースも続いた。
ふたりから諭されてチェスターもため息をつき、落ち着きを取り戻した。
「わかった……すまなかったな」
チェスターが、フリオに詫びた。
だが、ダオスの後ろに立つフリオは、チェスターから顔をプイッとそらす。
「くっ……こ、この……」
小生意気なフリオの態度に、チェスターが歯ぎしりをしたときだった。
悠然とした構えで話を聞いていたダオスが、静かに口を開いた。
「……私が何者であったのか、わかるのか？」
「えっ」

「貴様たちのあとについて行けば、それがわかるというのだな？」
なんと、ダオスから返ってきたのはクラースの説得に応じるような言葉であった。
クラースは緊張した面持ちで、うなずき返す。
「あ、ああ……おそらくな。以前の自分が何者だったのか、自覚できるようになる可能性は、高い……はずだ」
そう答えながら、クラースは考えた。
ダオスが記憶を取り戻した瞬間、どうなるのか？
そこで自動的に戦闘に突入してしまう可能性は高い……だが、それも六人全員が覚悟しなければいけないことであった。
クレスたちに対する怒りも憎しみもまったくあらわにしない記憶喪失のダオスは、クラースの説得にあっさり同意したあとに言った。
「お前たちと一緒についていっても構わない……だが、その前に……」
淡々と語っていたダオスが、突如にして顔つきを変えた。
「私には、果たさねばならぬ約束がある――」
「約束？」
クラースが眉を寄せると、目の前のダオスはゆっくりとうなずき返し、その脇にいる泣きやんだばかりの幼いルシアを片手でひょいっと抱えて、椅子から立ち上がった。

「あっ……」
ルシアが短く声を上げた。しかし彼女は怖がったりはせず、ダオスの肩におとなしく乗せられた。ダオスは驚いた一同を見下ろし、そして自分の決意を宣言するかのように言った。
「この子が探している〝ぬいぐるみ〟というものを見つけ出して、持ち帰ってやろうと思う」
「……え？」
テーブルに着いたままのクラースは、目をぱちくりさせながらダオスを見上げる。
一瞬、ダオスが何を言ったのかわからなかった。今、ダオスは、なんて言ったんだ？　ぬいぐるみを探す？　ダオス自身が？　しかも今、その肩に抱え上げた幼い少女のために……？
クラースは夢でも見ているのかと思った。しかし、ダオスのほうは真剣そのものだった。
「私は今、この子と約束した……だからお前たちとの約束は、それが完了してからだ」
なんと、ダオスは〝おつかい〟をひとつ、引き受けてしまっていたらしい。
「……」
唖然（あぜん）として、言葉を失うクラース。振り返ると、クラースの後ろに立っているクレスたちもあっけにとられている。
やがてダオスは、肩に担（かつ）いだルシアのびっくりした顔をちらりと見やったあと、クラースのほうに念を押した。
「それが終わってからで、よいか？」

「………」

クラースはうなずくしかなかった。ダオスの決意は決して揺らぐものではないと、その真剣なる表情を見て判断したからだ。

「あ、ああ……わ、わかった。それなら、私たちも手伝おう――」

そう言って、クラースも立ち上がった。そのひと言に驚いたのは、クレスたちだった。

＊＊＊

「なんで俺たちが、あいつなんかと一緒に……」

チェスターは口をへの字に曲げながら、レグニアの町を出発した一行の後列に続いていた。

時刻は昼下がり。町の外はおだやかな風が流れ、草原の香りを運んできてくれる。そんな中を、彼らは『狩人（かりゅうど）の森』をめざして歩んでいた。

「ねえ、チェスター。あんた、まだむくれてんの？」

魔法のホウキの柄（え）にまたがり、ふわふわ宙を浮かんで進むアーチェが、チェスターに近づいてきた。

「お前は、よく平気でいられるな」

「何が？」

「だから、あいつと一緒にいてだよ」
と、チェスターは前方にちらりと目をやる。前を進む一行の先頭を歩いていたのは、道案内を務めるフリオとキャロ、そしてダオスだった。そのあとをクレスやミント、クラースとすずが続く。一番後ろのアーチェは、それらを呆然と眺めた。
「……ほんとだ……何かちょっと、ヘンな感じがするね……」
「だろ？　本来敵同士だってェのに、一緒に冒険するなんて、絶対におかしいぜ！」
「うーん、でも……慣れれば、きっと平気だよ！」
「……そういう問題じゃねえだろ」
チェスターはため息をついて、悔しそうに歩きだす。

「ごめんな、ダオスさん……こんなことに付き合わせちゃって」
「本当にすみません、ダオスさん……」
フリオとキャロは歩きながら、ダオスに詫びていた。
出発前に、ルシアのぬいぐるみを隠した孤児院の男の子、ジャンを問いつめたところ、そのウサギのぬいぐるみは『狩人の森』に隠したということだった。
異世界ユグドラースは大陸の一部を残して、そのほとんどが消滅している。人間が暮らしているのはレグニアの町のみだったが、その周囲には繁栄を究めた人間たちの文明の跡がいくつ

か残されていた。
　空高く浮かぶのは『浮遊死都』、遺跡のように地上にそびえる『水の古城』や『試練の塔』、そして今でも発掘調査が行われている『万年氷洞』や『漆黒の坑道』など、今なお町に資源をもたらす場所も多かったのだが、そこにはいつしか魔物が棲みつくようになり、訪れた人々を襲うことが増えてきていた。今ダオスたちが向かっている『狩人の森』も、そんな危険な地域のひとつである。
　狩人の森には——猛禽類や毒虫などが徘徊し、子供にとってはとても危険な獣たちの棲み処なのだ。ジャンもよくそんなところまでウサギのぬいぐるみを隠しに行ったなと感心したが、やってしまったことをあとで責め立てても何も解決しない。また、そんな危険な場所にジャンを向かわせるわけにもいかない。結局はフリオたち〝なりきり〟の力を使える者や大人たちで取りに行くしかない。
　フリオは、ジャンをきつく叱ったあと、そのウサギのぬいぐるみを隠したおおよその場所を聞き出し、ダオスやクレスたちと一緒に『狩人の森』を目指していたのだった。
「でも……俺たちだけでも、よかったのに……」
　ボヤくように、フリオはつぶやいた。しかし当のダオスはそのことに返答せず、めざす森の方角をじっと見つめて歩みを進めているだけだった。
「…………」

フリオとキャロは、それぞれに不安を感じていた。
出発前にパブ・ローズでクラースが言ったことは、本当なのだろうか。
ダオスは元いた世界では悪人で、クラースたち六人と敵対関係にあった。そして彼はかなりひどいことをしてきたという……今は過去の記憶を失っているから、本人も忘れているだけだというが……。それは本当なのだろうか。できれば信じたくない気持ちが強い。
こうして颯爽と『狩人の森』をめざすダオスの流麗な横顔を見上げていると、この人が悪人だとは思いたくなくなってくる。
もっと別の、どこか近しい存在のように見えてくる。
すこやかで、誠実で、やさしい兄のようにも思えてくる——。
「ちょっと、かわいそうな気がしますね……」
ダオスと並んで歩くフリオとキャロの後ろ姿を眺めながら、ミントが言った。
「仕方あるまい。思春期には、必ず誰もが乗り越えるべき壁にぶち当たるというものだ」
「ク、クラースさん……」
横からクレスが、そういう問題じゃないでしょ——という困ったような顔をする。
「ああ、すまんすまん……まあ冗談はこのくらいにして、あのダオスが我々の言うことに従ってくれたのは、ありがたい展開だったな——」
真剣な顔に戻ったクラースのつぶやきに、クレスはそれは同感だと言わんばかりにうなずい

た。とはいえ、それで心配ごとが消えたわけではない。
「なんだか、あっさりすぎるから——却って不気味なくらいですよ」
「ええ。私も……このまま何も起こらずに、うまく運ぶといいですね……」
クレスもミントも、まだ不安を隠しきれない様子だった。
できればダオスとは一戦も交えず、無事に終わらせたい。そのためにはダオスが幼いルシアのためにやりたいと言ったことなど無視して、すぐさま女神エイダたちの許へ連れていくのが正解なのだろう。しかし、それはできなかった。
ダオスへの慈悲だろうか。彼が、最後にどうしてもしたいこと——他人のために尽くしたいと言ったこと、それを無下にすることができなかったのだ。
できればこの世界に想いを残さずに、もとの眠りにつかせてやりたかった。
永遠の眠りに……。

＊＊＊

陽が少しだけ西に傾きかけたころ、一行は『狩人の森』の入り口に到着した。
「えっと、森の北側が狩場で、東が採取場……ジャンがぬいぐるみを隠したのは北の奥の……あっ、ダオスさん！」

フリオの説明を最後まで聞かずして、ダオスは森の中へと足を踏み入れていく。慌てて追いかけるように、クラースたちも続いた。乗り遅れまいとフリオとキャロも林道を急ぐ。
だがフリオは、先を急ごうとしたキャロを呼び止めた。
「おい、キャロ！　ちょっと待てよ。ふたりとも剣士の格好のままじゃ、まずいだろ？」
「えっ、そうかしら」
「そうだろ、ふたりとも剣士の服を着たまんまなんてさ」
「……そうね。同じ服だと、つまんないもんね」
「いや、だからそういう意味じゃないってば」
「へ？　違うの」
キャロが目を丸くさせる。
「同じ服着て、同じような攻撃をしていたら、いざというときにダオスさんを守りきれないかもしれないだろ？」
「ああ、そうか。違う服で、能力の種類を多くしておいたほうが、もしものときに役立つわね」
フリオの言葉に納得するキャロ。
なりきり師の服には、それぞれ服の能力というものが備わっている。剣士の服には剣の技を高める能力と、さらに剣技を究めた特殊能力としての『魔神剣』や『秋沙雨』『虎牙破斬』と

いった特技が、その経験値に応じて追加されていく。つまり、服を着こなしていくのと同じように服の能力を育て、なおかつ技を使いこなしていくのだ。
「わかったわ。そうね、私はウィンドメイジと、ナースの服が少しだけ育ててあるんだけど、フリオのほうはどう？」
「俺は……ワンダーシェフと、ひさめ剣士か……それが今のところ、能力値が高かったかなぁ。んっ……いや、そういえば俺、『忍者の服』も自主トレで育てていたんだっけ！」
フリオは腰のポーチを開けて、中を覗き込みながら《衣装の玉》を確認していく。
「じゃあ、フリオはその忍者の服ね？」
キャロが確認してくる。
「だったら私は、ナースの服で回復役に回るから――」
「ちょっと待て！　キャロはむしろ、ウィンドメイジの服にしたほうがいいんじゃないか？」
「どうして」
「だって、この森――奥に行くと、結構強い魔物がいるって話だぜ。そういうのとぶつかったとき、俺が接近戦するから、その間にキャロは呪文を唱えて一気に叩くんだよ！　そうすれば楽勝だぜ！」
「うん、わかった――そうする」
フリオの提案にキャロは素直にうなずく。もともと戦闘が苦手なキャロは、そういう場面に

おいて自分の考えより、フリオの意見に従ってくれることが多かった。
「よし、だったら森の奥に入っちまう前に着替えちゃおうぜ！」
「うん！」
ふたりは、それぞれ腰のポーチから衣装の玉を取り出した。瞬く間に光のカーテンがふたりを包み込み、選んだコスチュームへと自動変化させる。
こうした衣装チェンジの魔法は、魔物たちの潜む場所では使えなかった。なぜなら魔物たちの放つ魔力に妨害されて、うまく作用しないからである。
それを回避するためには別の道具〝変身ステッキ〟なるものが必要なのだが、それは持ち運べる数に限りがあるため、ふたりとも本当にいざというときまで、なるべくその変身ステッキを使わないようにしていた。
「ほっ、ハアッ！」
真っ白い忍び装束の忍者が現れ、忍刀を振りかざす。着替え終わったフリオの姿である。
その横でウィッチ帽をかぶり、ホウキの柄にまたがった深緑の法衣のキャロが、指を二本立てて、ブイサインを決める。ウィンドメイジの衣装である。
「へぇー、可愛いじゃない！」
振り返ったアーチェが、すぐさま歓声を上げた。
「ほぅ……これは！」

アーチェの声に振り返ったクラースも感心する。クレスもミントも立ち止まって、振り返る。
なりきり師の衣装替えを初めて見た勇者たちには、珍しく見えたらしい。
「ねぇねぇー、それって面白いね？」
ひょいっ、とホウキを方向転換させて、アーチェがウィンドメイジの格好をしたキャロのほうに飛んでくる。
「いいよねー、これ。オシャレだよぉー。特に、この魔法使いの帽子が可愛くて似合ってる！」
「は、はあ……」
アーチェにオシャレだなんて褒められて、キャロは恥ずかしくて顔を赤くする。
まるで妹ができたみたいに、アーチェは似たような格好をしたキャロのまわりを、はしゃぎながらぐるぐると飛び回る。
「ほかの服にも着替えられるの？　いろいろ持ってそうだよね？　見たいなぁー、ねえ、着てみせてよぉー」
「えっ……いや、あの、これは……」
「おい、キャロばっかり褒めてないで、俺のほうも見てくれよ！」
忍びの装いをしたフリオは、ちょっと面白くなさそうに唇を尖らせる。すると、

「ふむ、この装束……なかなか良い仕立てです」
「えっ」
　フリオが振り返ると、いつの間にかすずが近づいて、その格好を後ろから眺めていた。
「しかも、先ほどの軽やかな身のこなし――お見事でした。失礼ですが、どちらの里のご出身で？」
「はあ？　里？」
　今まであまり目立たなくて気づかなかったが、フリオの目の前には、赤い忍びの装束を身にまとった十歳くらいの女の子が立っていた。彼女はフリオと視線を合わせるなり、はっと気づいたように深々とお辞儀をした。その挨拶は、とても十歳くらいの女の子がするとは思えないほど堂に入ったものだった。
「隠密の行動ゆえ、今まで気配を消していて、すっかり申し遅れました……。私、ふじばやしすずと申します。このような場所で、お仲間に出会えるとは思いもよりませんでした」
「えっ？　な、仲間って……」
「そのお姿、先ほどの身のこなし……同じ忍者と、お見受けしましたが」
「ああ、これね……これは、なりきってるだけだよ。へへっ」
　照れながらフリオは、すずの誤解を解こうとした。
　しかし、すずの真顔は緩まなかった。

「私は『伊賀栗流(いがぐり)』の忍者……そちらは？」
「へっ？　だ、だから、あの……なりきり、流っていうか……そうだ、あの、『女神流』って言えばいいのかな？　へへっ」
「めがみ流ですか……世界は広いものです。私が存じ上げない流派もたくさんあるのですね」
「ま、まあ、そういうことになるのかな……ハハ」
ダメだこりゃ。フリオは仕方なく、すずのほうに話を合わせることにした。
と、みんなが立ち止まって、フリオとキャロのなりきりした姿に注目していたときだった。
いきなり、チェスターが叫んだ。
「おい！　あいつがいなくなってるぞ！」
「えっ――」
急にみんなが、森の奥に続く林道の先に目を向けた。
チェスターはわざと、彼のことを〝あいつ〟と呼んだ。それは呼び方を変えることで、あの忌(い)まわしい過去や憎しみを抑えようとしていたのかもしれない。
「なんてことだ……ひとりで先に行ってしまったのか？」
クラースが、気の緩みを後悔した。
その〝あいつ〟――ダオスの姿が消えていたのだ。
「もう、ダオスちゃんたら仕事熱心なんだからぁ！」

「アーチェ!!　あいつに〝ちゃん付け〟なんかするなっ！」
烈火のごとく、チェスターが怒りだす。だが、その怒りはクラースの次の言葉でかき消されてしまった。
「とにかく、すぐ追いかけよう！　魔物に襲われたダオスが、もしも条件反射で魔術なんかを使ってしまったら――」
「つ、使ってしまったら？」
クラースの言葉に、ミントが反応した。
「ダオスの記憶の一部が、そのとき甦るかもしれない。魔力を甦らせるということは――つまり、本来のダオスに戻ってしまう可能性が高い――ということだ！」
「！」
クラースの話を聞いて、クレスたちの中に緊張が走った。
「みんな、急ごう！　ダオスに魔力を使わせたらダメだ！」
すぐさまクレスが一同に叫んだ。
「あ、あいつに魔力を使わせない？　それって、まさか……俺たちが、あいつの代わりに戦うっていうのか？　あいつを〝守ってやる〟ってことかよ！」
チェスターは、信じられないような顔をして叫ぶ。憎しみの対象であったダオスを戦わせないようにする――すなわちそれは、チェスターたちがダオスの盾になるということだ。

――そんなこと、なんで俺たちがしなきゃいけないんだ!!

チェスターは踵を返して、今すぐここで使命を放棄したい心境にかられた。だが、彼の仲間を思う気持ちがそれを押しとどめた。しかし、ふと気づくと、すでにみんなは森の中へと駆けていったあとだった。

「くそっ、なんでこうなってしまうんだよ!」

チェスターは苛立ちを爆発させるかのように、全速力でクレスたちのあとを追った。

＊　＊　＊

澱んだ雲が覆う、薄暗い空の下だった。ダオスは森の奥地へと歩みを進めていた。

次第に魔の気配が濃くなり、樹木の陰から羆のような巨体のエッグベア、狼のダイアーウルフが姿を現し、ダオスに向かって「ウルルッ」と、警告するような唸り声を上げた。

ダオスは足を止めた。そのとき、踏みしめた雑草がザクッと音を響かせた。

「………」

しばし、魔物たちとにらみ合った。

彼らは、じっと動かなかった。攻撃もして来なかった。いや、むしろ驚いたかのように身を固まらせていた。ダオスから発せられる不思議な波動に、下級の魔物たちはおびえだしていた

のだ。やがて、
《グルルルッ……》
牽制のための唸り声は、服従を示す信愛を込めた鳴き声へと変化していく。
ダオスは、魔物たちに敵意がないことを悟った。そして息をつくと、悠然たる態度で、彼らに告げた。
「……貴様らに聞きたいことがある」
低く透き通るような声が、魔物たちの耳に染み渡っていく。魔物たちは何でも訊ねて欲しいと言いたげな神妙な目つきになった。ダオスは言った。
「この森に来た少年が、ウサギのぬいぐるみというものを隠していったそうだ。私は、それを探しにきた。もし貴様たちがその場所を知っているのなら、私をそこまで案内してくれないか」
ダオスの口調は、そこにいたすべての魔物たちの王になりうるだけの重々しい響きがあった。
すると魔物たちは、ダオスに目で答えた。
――もちろん知っています、人間のたどった足跡、匂い、そして森の中に侵入したその少年が放置していった異物の所在など、教えることは雑作もありません……今すぐご案内してさしあげましょう――。

魔物たちはダオスに敬意を示すように低く吠え、ゆっくりと歩き出した。
「……すまんな、助かる」
うなずき返したダオスは、それに導かれて行くように歩き出す。とたんに空から猛禽のロッキーホークが舞い降り、毒虫のキラービーやテラーニードル、小型獣類のプローズヘアなどが現れ、ダオスの背後を守るかのように行列をなした。
すでにダオスは、その存在感だけで『狩人の森』の王として迎え入れられていたのだ。

しばらくしてダオスは、大きな樹木の下にたどり着いた。世界樹のような巨大さはないが、この森の中においては頂点を究めようかという規模であった。
「ここか……」
ダオスは取り囲む魔物たちに目線を配らせると、自分の前にそびえる樹木のほうに歩み寄った。その根元の幹にある窪みの穴の中に、それがあった。薄いピンクをしたウサギのぬいぐるみ——ダオスはそれを取り出し、じっと見つめた。
これに、どういう価値があるのかわからない。しかし、あのルシアという女の子が大事にしていたのだから、あの子にとってはかけがえのない意味が、これには込められてあるのだろう。
「よかった、あまり汚れてはなさそうだ……」

ダオスはウサギのぬいぐるみを傷つけないよう胸に優しく抱えると、踵を返して魔物たちに礼を告げようとした。と、そのときだった。複数の足音が近づき、例の男の声が響いた。
「ダオス！　離れていろ――」
「⁉」
ダオスは怪訝そうに振り返った。あのクラースと仲間たちが駆け寄ってくる。緊迫した表情をした彼らは、ダオスをここまで案内した魔物たちに向かって、一斉に襲いかかっていった。
「くらえっ、かまいたち！」
忍者の装いをしたフリオは素早く印を結び、服に備わった特殊能力を放った。めざす魔物の群れの一匹、狼のナイトレイドが《真空波》の高速回転によって斬り刻まれる。
そのフリオの隣では、キャロとアーチェとミントの三人が、それぞれに魔法の呪文を同時に唱えだす。さらにクラースも、懐から小さな魔術書を取り出し、それに記載された召喚魔法を詠唱し始めた。
それら後方支援四人の先では、魔物への接近戦を挑んで行ったクレス、チェスター、すずの三人がすでに激闘をくり広げていた。
「奥義、魔神双破斬っ！」
クレスが技の名を叫び、その抜き放った剣を振り下ろす。剣の切っ先から、光の刃ともいうべき衝撃波〝魔神剣〟が地を走り、迎え撃とうと巨体を揺らしたエッグベアの足を打ち砕く。

グワァッと悲鳴を上げて、エッグベアがその場にくずおれた。それと同時に、クレスの体は宙空に舞い上がり、倒れ込んだエッグベアの頭上を飛ぶ毒虫のテラーニードル、ロッキーホークに飛び蹴りを連続して喰らわす。そして、怯んだ連中をくり出した剣で突いた。

——す、すごいっ！

大技を見たフリオが、息を呑む。目にも止まらぬ勢いで、クレスは魔物に大技を浴びせ、その赤いマントをなびかせながら軽やかに着地した。続いてチェスターの声が響く。

「貴様らは、これで充分だ！　紅蓮っ！」

チェスターが弓を引いた。放たれた矢は炎に包まれ、空中を飛び回る毒虫キラービーの群れを次々に射止めていく。炎の矢が命中したキラービーたちは、たちまち紅蓮の炎に焼かれて、墜落していく。

「………」

フリオは呆然とした。格の違いを見せつけられて、戦うことよりも彼らの技の素晴らしさに見とれてしまっていた。さすが、女神エイダとステラが、別の時空から呼び寄せた勇者だけはある。技の威力、洗練された無駄のない動き、まさに一級品の鮮やかさだ——。

しかし、攻撃を受けていた魔物たちも黙ってはいなかった。魔神剣を受けて倒れ込んでいたエッグベアが巨体を起こし、反撃に転じた。

咆哮が響き、エッグベアは太い腕をクレスめがけて振り上げる。

「うっ！」
着地したばかりのクレスは不意を衝かれた。その鋭く尖った鉤爪の餌食にされそうになる！
「クレスさん、バリア！」
呪文を唱えていたミントが叫ぶ。彼女がかざした魔法杖のスターメイスから光が放たれる。
とたんに光の薄い膜に全身を包まれたクレスは、エッグベアがくり出した鉤爪の餌食になら
ず、その光の膜によって防ぎきった。バコン！　と、エッグベアの腕がはじき返される。その
直後である。
「シルフ！」
クラースが魔術書から顔を上げた。続いて、
「イラプション！」
宙に浮かぶホウキにまたがったアーチェが、大地に向かって呼びかける。ほぼ同時に、隣で
同じくホウキにまたがって浮かぶウィンドメイジのキャロが、片手を天にかざして叫んだ。
「ストームっ！」
それは、魔法の集中放火ともいうべき総攻撃だった。
魔物の群れが立つ地面が真っ赤に燃え上がり、たちまち溶岩の海となって、火炎弾を噴き上
がらせる。アーチェの唱えたイラプションだ。さらに宙空から、キャロの放ったストームの突
風が吹き荒れ、溶岩の炎を勢いよくあおる。

獣たちの咆哮が、悲鳴のようになって轟く。燃え立つ火柱に覆われた魔物たちは、火炎弾とストームにまざった石つぶてに撃たれ、のたうちまわる。とどめは、クラースが召喚した風の精霊シルフだった。
薄い羽衣をまとった六人の精霊が、燃え立つ炎の渦を囲みながら飛び回り、その勢いが衰えないよう風の力を調節していった。
魔物の群れはなす術もなく壊滅した。唯一、難を逃れた毒虫のキラービーが飛び回っていたが、その最後の一匹にすずが狙いを定めた。
「曼珠沙華っ！」
摩擦熱で発火する手裏剣を投げつけた。それは、空中で逃げ惑うキラービーに見事命中し、瞬時にして焼き払っていた。
ついに、魔物の群れを退治した。結局フリオは、勇者たちの力に圧倒され、途中から何もできずにたたずんでいた。真っ白い忍者の服も、その能力を活かせなかった。しかしフリオは大満足だった。クレスたちの大技を見られたのだから――。
「やったな……」
クラースが、焼け焦げた跡の地面を見下ろしてつぶやく。
全員に安堵の表情が訪れる。ほっと息をつき、呆然と立ち尽くしていたダオスのほうに一同が向き直ったときだった。

まだ危機は去ったわけではなかった。ダオスの立つ背後の藪の中から、また新たな魔物の群れが、ザザザァーッと飛び出してきたのだ。
「！」
再び、クレスたちに緊張が走る。
フリオは、忍者の服が持つ特技《はがくれ》を使い、ダオスをこの戦況から離脱させようかと考えた。ダオスの身を守るためには、それが一番だと思えたからだ。
「よしっ、やってやる！」
そう決意したフリオは印を結び、術を唱えだした。だが、そのとき、ダオスの口から意外な言葉が飛び出した。
「もういい――やめろ！」
あの無表情だったダオスが、いきなり怒ったような顔でクレスたちに叫んでいたのだ。
すると、身構えて戦闘に突入しようとしていたクレスたち全員の動きが、ぴたりと止まった。続いてダオスの背後に集結した魔物の群れも、同じくぴくりとも動かなくなった。
「……………」
フリオは呆気に取られた。何事が起こったのかわからず、術を唱えるのも中断してしまっていた。それだけダオスの怒りからくる波動を感じて怖くなったのだ。そしてフリオは、なぜか全身に怖気立つような震えが起きているのを感じた。

それは、ダオスを目の前にしたクラースも同様だった。戦慄していた。身が凍るような思いを感じていた。
——ついに、ダオスの記憶が復活したのか。そんな不安がよぎる。今ここで、ダオスと戦闘に突入したら勝てるのだろうか。その心の準備も、ましてや六人全員に戦う気力もまだ充分に高まってはいないというのに——。
ふと、まわりを見ると、クレスやミントたちも戸惑い、緊迫した表情をそれぞれに浮かべていた。硬直しきっている。そんな中でダオスは、落ち着きを取り戻したかのように言った。
「もう充分であろう。これ以上、無意味な争いをして何になる……」
「えっ」
クラースは、その言葉を耳にして目をしばたたく。
「見ろ。目的の品だ——」
ダオスは、胸に抱えていたウサギのぬいぐるみを掲げて見せた。なんと、彼は幼いルシアとの約束を忘れていたわけではなかった。
「もう、ここですべきことは何もない……」
と静かに言って、ダオスは背後に控える魔物たちに向き直って、彼らにも声をかける。
「お前たちも傷つけたりしない。私は今から、彼らとともにこの森を立ち去る。だから安心して、自分たちの棲み処に戻れ——」

驚いたことに、ダオスは魔物たちに話しかけていた。
無駄な行動のように思えたそれは、意外な展開を招いた。なんと魔物たちは、ダオスの言葉に従うかのように、茂みの中へぞろぞろと戻り始めたのである。
「………っ！」
その不可解な行動に、クレスたちは息を呑む。ダオスから発せられる魔力の強さが、連中を服従させたというのだろうか。誰もが言葉ひとつなく、藪の中へと立ち去っていく魔物たちを見送っていた。そして彼は、ウサギのぬいぐるみを大事そうに胸に抱え、クレスたちのほうにゆっくりと歩み寄ってきた。
「……待たせたな」
その顔は、覚悟を決めた表情で沈んでいた――。

＊　＊　＊

陽が沈んだころ、一行はレグニアの町に戻ってきた。
ダオスたちが帰ってきたことで、町の人たちが騒ぎだした。しかし一刻も早く、待ちわびるルシアにウサギのぬいぐるみを届けてやるつもりだった。
教会脇の細い路地から裏手に回ると、町の人たちの善意で建てられた漆喰(しっくい)の壁に赤い屋根の

孤児院が見えてきた。
入り口には騒ぎを聞きつけたのか、すでにシスター・ミルと幼いルシアが出迎えている。
「わーい、あたちのウサちゃんだぁ！」
ダオスの胸に抱えられたウサギのぬいぐるみをめざして、ルシアは小さな体で勢いよく駆けてきた。
「ルシア……」
持ち帰ったぬいぐるみをルシアに渡し、ダオスは訊ねた。
「これで、間違いはないか？」
受け取ったぬいぐるみをまじまじと見つめ、ルシアは、それとの再会を喜ぶ笑顔でいっぱいになった。
「うん！　これが、あたちのウサちゃんよ！　ありがとう、お兄ちゃん！」
満面の笑みで、ダオスを見上げてルシアは礼を言った。
なぜかダオスも喜びが込み上げ、彼女の小さな頭を自然に撫(な)でてやっていた。そんな行為が無意識のうちに出来てしまっていた。
「このたびは、この子のために……なんてお礼を申し上げたらよいか……」
ルシアのあとから歩み寄ってきたシスター・ミルが、ダオスに一礼して恐縮(きょうしゅく)する。
「いや、構わない。気にしないでくれ……これは、私が自(みずか)ら望んでしたことだ」

「そうですか……でも、本当にありがとうございます」
再びシスター・ミルは、丁寧（ていねい）に頭を下げた。
「お兄ちゃん、ありがとう！」
ルシアも続いて、もう一度礼を言った。ダオスはそこで、初めてうっすらと笑みを見せた。
「これで……ひとまず安心だな」
ダオスがルシアたちと話しているところを、ちょっと離れた位置から見守っていたクラースが、ほっと息をつく。
彼らもダオスに続いて、教会の裏手にある孤児院の建物の前に着いていた。
「あの女の子も、あんなに喜んで……不思議ですね。こうして見ていると、あのダオスとは別人のように見えてしまいます」
クラースの横で、ミントがつぶやいた。
ミントの言葉に、クラースもうなずく。
正確に言うと、ここにいるダオスは本質だけが同じであって、心や性格は以前のダオスとは異（こと）なる存在なのだ。ゆえに、別人のように思えても仕方ないところがある。
しかし、クラースもさっきまでは内心穏やかではいられなかった。『狩人の森』でダオスが魔物の群れを前にして見せた、あの表情が忘れられない――あれは仲間を守ろうとして、クラ

ースたちに敵意を剥き出しにした表情だった。
おそらく記憶の戻っていないダオスは、我々と戦う気はなかったのだろう――しかし無意識のうちに意思の疎通ができた魔物たちのために、戦う意欲が顔を覗かせていた。
彼が持って生まれた運命。民のためを思い、守るために立ち上がる。そのような振る舞いが、自然と出来てしまう。それは、彼自身も気づいていない宿命みたいなものなのであろう。
「さて、そろそろダオスを連れていくか――」
クラースは、感傷にひたるのを打ち切ろうとした。そろそろ夜の帳が下り始め、あたりは薄暗くなってきている。真っ暗になる前に、女神たちの待つ大樹の神殿に到着したかった。
クラースが、ダオスを呼び戻そうとしたときである。
「あの、クラースさん……」
クレスたちの後ろにいたフリオとキャロが、こちらに歩み寄ってきた。
「ああ、君たちもご苦労だったね。さすが女神が、この世界の勇者として選んだだけのことはあるよ。見事な〝なりきり〟だった。おかげで私たちも、ダオスを連れ帰る任務が思ったより早く済みそうだ」
と、クラースは彼らに礼を告げた。しかしフリオとキャロはなぜかそれを聞いても、少しも喜ばずに、むしろ沈んだ表情できりだした。
「そのことなんだけど……」

「ん？　何かな」
　クラースは優しく笑みを浮かべて、フリオに問い返す。すると、フリオの隣にいたキャロが顔を上げて、決心したかのように口を開いた。
「今日はもう遅いから——できれば今夜一晩だけでも、ダオスさんに教会に泊まってもらってもいいですか？」
「なっ——」
　いきなりのお願いに、言葉に詰まった。
「じょ、冗談だよね？」
「いいえ」
　キャロのまなざしは本気だった。
「いろんなことがあったから、ダオスさんもきっと疲れてると思うんです。それに、ルシアのために頑張ってくれたから、お礼もしたいんです」
「お礼？」
「はい。ふたりでワンダーシェフに〝なりきり〟して、美味(おい)しい夕食をごちそうしたいなって。さっき帰り道に、フリオとふたりで相談したんです。だから、どうかお願いします！」
「俺からも頼むよ、クラースさん！」
　キャロに続いて、フリオも頭を下げてくる。

「そ、それは……」
ダオスの願いを聞き入れた次は、フリオとキャロからもお願いされてしまった。
クラースは頭を抱えそうになった。
「お、お礼って、言葉だけじゃダメなのかな？　知ってると思うが、私たちは急いでいるんだ」
「わかっています、でも――」
「でも？」
言いづらそうにしていたキャロが、ついに――。
「悪人だからって、みんなが冷たくしていたら――ダオスさんが、かわいそうです」
「！」
「私たち、このままダオスさんと、別れるのはイヤです！」
その声に続いてフリオも訴えかけてくる。
「そうだよ！　女神のところへ連れていったら、もう会えなくなるんだろ？　それに悪人だか魔人だかよくわからないけど、ダオスさんは、そういう扱いを受けちゃうんだろ？」
「……」
「それなら、せめて私たちといる間だけでも、ダオスさんにやさしくしたい――」
クラースに願い出るキャロの瞳は、涙でうっすらと輝きだしている。

返答に困ったクラースは、まわりに立っているクレスたちのほうに、助け船を求めるような視線を向けた。しかし、彼らも困惑した表情でこちらを見ていた――だが。
「いいのか、そんなことまでして？」
ひとりだけ、けわしい表情をしていたチェスターが言った。
「結局、ズルズル先延ばしになるだけだぜ？」
そのとおりだった。チェスターは続ける。
「何度も言ってるけど、あいつは魔人なんだ――みんな、それを忘れてんじゃないのか？」
「………」
チェスターの忠告に、みんな黙っていた。
わかっている、忘れたわけではない、決して……ただ、フリオとキャロのおがむような目を見ていると、断りにくくなってしまうのだ。
彼らの夢を壊したくない。おそらくこれで一生の別れになるのに違いないのだから、せめて最後のひとときくらい与えてあげたい――そんな想いが、クレスたちの中に生まれてくる。
「あの……私たちも一緒に泊めてもらうという条件で、許可するのはいかがでしょうか？」
考え込んでいたミントが、ふと妥協案を申し出た。
「あ、なんだ、それでいいじゃないの！」
急にアーチェが、問題解決と言わんばかりに、あっさりそれに賛成する。

「うん、そうだね――僕も、ミントの提案に賛成だ！」
クレスも続いた。
「すずは……みなさんの意向に、従います……」
くの一のすずは、表情を変えることなくクラースたちに告げる。
「げっ！　まさか！　俺たちも、あいつと同じ、ひとつ屋根の下に泊まるっていうのかよ？」
チェスターは、露骨(ろこつ)に拒否反応を示した。
「仕方ないじゃん――」
「仕方ないって、お前！」
チェスターはアーチェをにらみつける。しかし彼女は、平然と言った。
「だってほら、一緒に泊まっちゃえば、ダオスを見張るのも楽だし。明日の朝、女神のもとへダオスを連れていけばいいだけの話でしょ？　それって、楽勝じゃん！」
「楽勝なもんか！」
そのひと言に、とうとうアーチェがムッとする。
「……もう、うっさいなぁー、何が言いたいワケ？　チェスターは！」
「だから、俺はな――」
「ハイ、わかった！　チェスターはみんなとは別に、外で野宿したいんだ？」
「お、おい！」

「あのねぇ、あんたおかしいんじゃない？」
　急にアーチェの顔が怖くなった。
「そもそもここは、あたしたちのいた世界とは別の世界なんだよ？　あんた、わかってんの？」
「わ、わかってるよ、そんなこと！」
「ノンノン、わかってないね。だいたい世界が変われば事情も変わるってことでしょ。ダオスがそのいい例じゃない――」
　アーチェはいつになくまじめな顔をして、チェスターに迫った。
「いい？　この世界でのダオスは、あたしたちの知ってる世界のダオスとは根本的に違うわけ。だから、今のあのダオスを慕ってくる子だっているわけよ。チェスターは、そういう子たちの夢を壊して平気だっていうの？」
「えっ」
「チェスターだけだよ、元の世界のことをこっちの世界にまで引きずって、自分の事情ばっかり言ってるの！　何でもかんでも自分の考えばっかり押しつけないで、たまにはこっちの世界の人たちに譲ってあげたらどうよ？」
「な、何をだよ？」
「だから自分の考えってものよ！　個人的な恨みや憎しみだけじゃなくて、ほかの人がダオス

に抱いてる感情も尊重してあげるってぐらいの、心の広さのこと！」
「お、俺は、心が狭いっていうのかよ！」
「……狭いねっ」
アーチェはきっぱりと言う。
「じゃ、おやすみ。外で寝るんでしょ？　あたしはこの教会で休ませてもらうから！」
「おい、勝手に決めるなよ！」
「風邪なんかひかないでよね。あとで世話するの、大変なんだから！」
と、アーチェはさっさと孤児院のほうに向かって歩きだした。
「……どうする、チェスター？」
横からクラースがうかがうように訊ねてくる。返事に迷ってると、クレスが近寄ってきた。
「チェスター、もう意地を張るのはやめたらどうだ。僕もアーチェの言うとおりだと思うよ」
「ク、クレス……お前まで」
「難しく考えるからいけないんだよ。交代で、ダオスを見張ればいいだけの話じゃないか」
「ま……まあ、それはそうだけど……」
「そうなると、人数が多いほうがいいと思うんだ。見張りの時間も短くて済むから――」
クレスがさわやかな笑顔で言う。
「………」

チェスターは次第にあきらめ顔になって、しぶしぶ了承した。
「くっ……わ、わかったよ。あいつを見張るためってことで、俺も特別に……泊まってやるよ」
「ありがとう！　チェスターなら、そう言ってくれると思ったよ！」
と、クレスが明るくチェスターの肩を叩く。
クラースはそれを受け、フリオとキャロのほうに向き直る。
「……ということで、だ。仕方ない……特別に許そう。でも本当に、今晩だけだからね？」
「うひょーっ、やったぁ！」
「あ、ありがとうございます！」
とたんに、ふたりは明るくなった。
「フリオ、やったね！　みなさんにすっごく美味しい料理をつくりましょうよ！」
「おう、やるぜ！」
フリオとキャロは、さっそく張りきりだす。そんなふたりに、クラースは問いかける。
「ところで……私たちも泊まれる部屋はあるのかな？」
「へへっ、任せときなよ！　ここは孤児院だから、空き部屋なんてちょろいちょろい！」
フリオが胸を張った。
「じゃあ、みなさん！　どうぞ、中のほうへ――」

キャロが、孤児院の入り口へとクレスたちを導く。
話の経過が聞こえていたのか、ルシアの隣に立っていたダオスは、驚いた顔でこちらを見ていた。その横のシスター・ミルも呆然としている。
「では、今夜一晩……お世話になりたいと思います」
年長のクラースが、シスター・ミルに一礼して挨拶する。
「どうぞ、歓迎いたしますわ」
と、シスター・ミルも笑顔になって、孤児院の中に一同を招き入れた。

しばらくして——。
教会の孤児院に入っていく一同を見送った影の存在が、ひそかに笑いだす。
《フフッ……アハハハ！　まったく……バカだなぁ、まんまとハマっちゃって！》
それは何か、たくらみを持つ怪しげな少年の声であった。
教会の孤児院の前は、すでに誰もいなくなっていた。ダオスもクレスたちも、孤児院の中に入り、つかの間の休息についていることだろう。
《ホント、人間ってバカだよね。他人に優しくしたいからって、どんどん弱みを見せるんだもんなァ……》
その影の存在は、ずっとダオスやクレスたちの行動を、こっそり監視し続けていたらしい。

それも、誰にも気づかれない時空の狭間（はざま）から――。
《ママ……もっともっと、あいつらのことをからかってあげようよ。そのほうが面白いよね？
アハハハハ、ワクワクしてきたよ、ボク……フフッ》
影の存在は、次のたくらみを思い浮かべて、また笑いだしていた――。

第二章　悪魔の挑戦

レグニアの町に、朝が訪れた。異世界ユグドラースの唯一の陸地に、まぶしい光が降り注ぐ。人々が動き出す時刻だった。
だが、クレスたち――肝心の勇者たちは、まだまどろみの中にいた。
意外に思われるかもしれないが、昨夜の宴はそれだけ盛り上がってしまっていたのだ。
ワンダーシェフに〝なりきり〟したフリオとキャロの腕をふるった料理は、クレスたちの舌をうならせるほどにうまかった。そしてクラースは酒がすすみ、その酒の力はクラースの緊張感をあっけなく解きほぐし、おとなしく宴の席に着いていたダオスを、アーチェとふたりして説教し、からかうほどにエスカレートしてしまったのである。
その内容は、とてもここに記録として残せないほどの、醜態ぶり――いや、楽しくて和やかすぎるものだった。
なにしろ、記憶のないダオスは何を言っても怒らない。怒らないどころか、黙って耳を傾けているだけなのだ。そんな反応を示されたら、酔っぱらってしまったクラースがどんどん調子

に乗って、あれやこれやと議論をふっかけていくのも無理からぬことだろう。
それまでずっと緊張感を持続していたのだから、それがフッと消えたときの反動は、とても凄まじいものがあるということだ。
同じ宴の席にいたクレスやミントがどんなに慌てて、クラースとアーチェの暴走を止めようとしたことか。
一方のチェスターはふてくされてヤケ食いをし、腹いっぱいになって食いだおれ。
すずにいたっては、フリオが出してきた特製激辛カレーの味に目を回していた。
……と、昨夜の宴の様子を報告できるのは、ここまでが限界である。
とにかく彼らは、異様に盛り上がった。重苦しい一夜になるだろうと予想されたことは、緊張感を持続させることの限界、お酒の力、幼い少女にやさしかった、ダオスの意外な一面を見たことの驚きと、感激……などなど。それらの要因が重なって、宴の席に〝摩訶不思議な空間〟を作り上げたことだけは事実のようであった。
そのために、彼らの寝起きは遅くなってしまっていた。
朝日が高く昇り、町のお店『フンダクル商店』『カフェ・ベック』や、フリオが鍛冶見習いとして働く『ポルポル工房』が、またフリオたちが衣装を買い求めによく通っている『ステビア服飾店』などが、開店の準備に追われる時刻になって――ようやく寝床から起きようかという状態であった。そして、そのときに彼らは、初めて〝事件〟を知ったのだ。

「な、何だって……ダオスが？」

三角クラウンのまわりにコインを何枚か貼りつけた鍔広の帽子をかぶり、二日酔いの頭を抱えながら、叩き起こされたクラースが信じられないような声を上げる。

クラースの泊まった部屋には、クレスとミント、フリオとキャロ、そしてシスター・ミルが訪れていた。全員、困惑した様子で寝床から起き上がったばかりのクラースを見つめている。

クラースは慌てて前袷の茶色い服をまとい、

「それで、出かけたのはいつなんだ？」

と、二日酔いの頭痛に顔をしかめながらも一同に問い返した。

すると、事情を知るシスター・ミルが一歩前に出た。彼女は、昨夜の騒ぎに動じることなくぐっすりと休み、朝早くから日課をこなしていたのだ。

「夜明け前のことだったと思います。レグニア騎士団のレオニスさんが、血相を変えて訪ねて来られたんです。ダオスさんに用があるって——」

「まさか、決闘の申し込みか？」

クラースは、あせって解答を先読みしようとした。しかしシスター・ミルは首を振った。

「いいえ。ダオスさんに、頼みたいことがあるとおっしゃっていました」

「頼みたいこと？」

「はい。みなさんをそこで起こすべきだったんでしょうけど——ダオスさんがその必要はない

と強く止められたので……」
　そう言って、申し訳なさそうにシスター・ミルがうつむく。クラースはそれは構わないから、と言って、話の続きを聞いた。
「レオニスさんの話によると……何でも弟のメンデルさんが、『試練の塔』に腕だめしに出かけたまま戻って来ないとのことでした。それで長男のレオニスさんはひどく心配されていたんです」
「試練の塔？」
「――修練の場所さ」
　シスター・ミルの横から、フリオが答えた。
「剣士や格闘家とか、とにかく腕を鍛(きた)えたい連中がこぞって出かける場所なんだ。でも塔の中には魔物がうじゃうじゃいて――」
「な、なんで、そんなところにひとりで……」
　クラースは呆(あき)れたようにつぶやいた。
　レグニア騎士団と言えば、昨日のダオスとの争いで剣を抜いたものの、何もできずに自滅(じめつ)した連中のことではないか。口ばっかり達者(たっしゃ)で、剣の腕前はほとんど疑ってしまうようなレベルだったはず。
　なぜ、それがいきなり『試練の塔』に挑(いど)むことになるのだ。クラースは、ややうつむきかげ

んになり、ひとさし指を眉間に当てて考え込んだ。
「……つまり、昨日ダオスに負けたことが、よっぽど悔しかったんだな？」
そのクラースのつぶやきに、シスター・ミルがうなずいた。
「はい、レオニスさんも後悔されていました。ダオスさんに負けたあと、弟のメンデルさんを弱虫だとか言って、きつく叱りすぎたと……」
「それで、『試練の塔』に出かけたまま、夜遅くになっても戻って来なかったと？」
「ええ」
「それなら、その兄のレオニスとやらが、自分で探しに行けばいいものを……」
なぜ、ダオスに頼んだりするのだ、とクラースは歯がゆい思いで言った。
「レオニスさんは、ダオスさんに『お前のせいで弟が戻って来なくなった、私には町の警備があるから留守にすることはできない』とおっしゃって、さらには『お前の腕を見込んで、頼みたい』と、土下座までされたりして……すっかり取り乱しておられるご様子でした」
シスター・ミルの話に、クラースはため息をつく。
なるほど、そういうことか――。弟を無事に連れ戻すだけの実力があるのは、ダオスのほうだと認めてしまったわけか。
「クラースさん、すぐに出かけましょう！」
鎧をまとい、もう支度を整え終えているクレスが言った。

「そうだな、こうしてはおれん――ダオスが魔物たちの巣窟に入って、以前の自分を取り戻したら大変なことになる。ミント、ほかの連中をすぐ叩き起こしてくれ！」
「は、はい――」
ミントがうなずいて、ほかの部屋に向かった。クラースもすぐさま出かける準備を始める。
「俺たちも行くよ！」
フリオが、クラースに訴えてきた。
「……………」
クラースはどうしようか、少し迷った表情を浮かべた。彼らは、ダオスに心を寄せすぎている。これ以上巻き込んで、果たしていいのだろうか――。
「なあ、『試練の塔』の場所を知らないんだろ？　だったら、俺たちが道案内するぜ！」
「もちろん、足手まといになったりしません！　私たち、これでも〝なりきり師〟ですから！」
「……………」
キャロの言った〝なりきり師〟という言葉に、クラースの心は動かされた。
「……そうだな」
召喚呪文の記載された魔術書を手に取りながら、クラースは仕方なくうなずいた。
彼らにとって、辛く苦しい結果が待ち受けているかもしれないが――ふたりは、女神が選ん

だ〝なりきり師〟である。彼らの成長を願うなら、厳しい試練を与え、それを乗り越えさせるのも必要なことなのだろう。
クラースがフリオとキャロの肩をかるく叩き、そして静かに言った。
「行こうか、『試練の塔』に――」
「はいっ！」
この世界の〝勇者のふたり〟は、明るい笑顔でうなずき返した。

＊　＊　＊

「な、なんだ、これは……」
塔の中に入ったとたん、クラースはびっくりしていた。
レグニアの町から、東の方角に向かった草原の真ん中に忽然とそびえ立つ塔は、挑戦する者を嘲笑う魔の巣窟――鉛のような鉛灰色をし、どっしりとした塔の頂上は、誰が灯したのかわからない炎の揺らめきが見えていた。その外観を見たときから、クラースは以前に見たことがあると思っていた。そしてそれは、中に足を踏み入れた瞬間、確信へと変わりつつあった。
塔の中は、赤で統一された壁に、唐草の模様を描いた銀フレームの装飾、そしていたるところに美しい女性や子供の肖像画が掛けられてある。

「こ、この壁に、絵画……まるでフレイランドにあった『炎の塔』と同じではないか！」
「そうですね。熱さも、あのときとそっくり……でも、どうして『炎の塔』がここに？」
クラースに続いて、クレスも首をかしげていた。
フレイランドの『炎の塔』は、侵入者を焼き払おうとする。上の階に登るに従って、床から、壁の隙間から、凄まじい勢いであふれ出る〝永遠に消えないであろう炎〟が、行く手をはばむかのごとく《灼熱の地獄》の世界に変わっていくのだ。
「あ！　ひょっとしたら――」
そのとき――何かを思い出したように、後方を歩いていたキャロが声を上げた。
「長老から聞いた話だと、この世界にあるものは、大樹さまの力によって生み出されたって！」
「何、大樹の？」
振り返ったクラースに、キャロはうなずき返す。
「ええ。大樹さまには外の世界を見通す力があって、あちこちで見たものを『実』の形にして、大地を広げているって言ってました！」
「……ふむ。それで、我々の世界と同じ構造物があるわけか……」
と、クラースが納得した顔でつぶやいたときである。
「な〜んだ！　んじゃあ、道に迷わないですむじゃ〜ん！」

アーチェが気軽そうに言った。
「おいおい、そういうお前は覚えてんのかよ？」
すかさずチェスターがツッコミを入れる。すると、ホウキにまたがって宙に浮かぼうとしていたアーチェは、バランスを崩してつんのめってしまった。
「……ぐっ。あ、あによー、そういうアンタはどうなのさ！」
「へへーっ、一度通った道を忘れるようじゃ、森で狩りはできねえぜ。なあ、クレス！」
自信満々な顔で、チェスターはクレスのほうを見る。
「ん？　ああ……でも、油断はできないよ。この世界にはわからないことがまだたくさんあるからね」
そのクレスの慎重な答えに、アーチェは満足そうにうなずく。
「さっすがはクレス！　どっかの『誰かさん』みたいに、いい気になんなくて冷静だよね～」
「っんだとぉ！　もしかして、俺のこと言ってるのか!?」
「あら、わかっちゃった？」
「こ、このぉ！」
チェスターが熱くなって、アーチェに飛びかかろうとしたときだった。
「ウンディーネッ！」
いきなりクラースが真顔で叫んだ。みんなは突然のことにびっくりして固まった。

「ク、クラースさん……」
「すまない……あまりに熱くて、水の精霊を呼びたくなった。まあなんだ、みんなこれ以上は熱くならずに先を急ごう」
と、クラースは『試練の塔』の薄暗い回廊（かいろう）を歩みだした。ほかのみんなが、あとに続く。
冗談を交わしていられるのは、最初のうちだけだった。
階段を登り、上の階へと向かうにつれ、壁から噴（ふ）き出る炎の勢いは容赦（ようしゃ）なく増してくる。
「もぉ〜、なんでこんなに熱いのよぉ〜」
ホウキにまたがって飛行するアーチェが、額（ひたい）の汗（あせ）を拭（ぬぐ）って今にも死にそうな声をあげる。
「ねぇ、チェスター。道案内してよ〜、一度通った道は覚えてんでしょ〜？」
たまらずアーチェが、後ろのチェスターに訊（き）いた。
「う、うるせえ！　この熱さで思い出せるかよ！」
「なんだぁ〜、あんだけ自信たっぷりだったくせにィ〜」
アーチェはガッカリした。みんな、熱さで頭がぼんやりしてきていた。
「頑張ろう！　頂上まで、あともう少しだ！」
クレスだけが気を吐く。気力だけが、全員を後押ししていた。火の海と化した部屋や通路を避（さ）け、入り組んだ回廊を縫（ぬ）うように上の階をめざす。
だが、ほかの部屋で燃え立つ炎の熱気は、どの通路を通ってもあまり変わりはしなかった。

尋常(じんじょう)ではない熱さのおかげで、額からとめどもなく汗が流れ、意識が朦朧(もうろう)としてくる。歩む足取りも、もつれて倒れそうになる。あのときと同じだ。フレイランドの『炎の塔』と、まったく同じ環境がここにはある。
よろめきつつも歩むクラースは、とうとう音(ね)をあげるように言った。
「ダ、ダオスはともかくとして……メンデルという騎士は、本当にこんなところを通り抜けていったのか？」
すると、先頭を歩むクレスが答える。
「今まで通ってきた場所にはいなかったから、たぶんこの先にいると思うけど……」
「たいした根性だな、と誉(ほ)めてあげたいところだが――できれば途中であきらめて、引き返してもらいたかったぞ……」
クラースがため息をもらす。それだけ、この『試練』は過酷(かこく)だった。そんな滅入(めい)る気持ちに希望をもたらすかのように、やがて通路の先に階段が見えてくる。
「……やった、とうとう最上階だ！」
クレスはそれを見て、ほっとしたようにみんなに伝えた。
目的の場所が近い――全員、言葉にする余裕はなかったが、それでも辛そうだった表情に、いくぶん笑みが戻った。足取りも軽くなった。すると、
「あの上に、ダオスさんが――」

はやる気持ちを抑えきれなくなり、真っ白い忍者の装いをしたフリオが列から飛び出す。
「あ、待ってよ！　フリオ――」
続いて、ホウキにまたがったウィンドメイジのキャロも、宙を飛んで追いかけた。
「おい、勝手に先走るな！」
チェスターが列の中から、ふたりを呼び止める。しかし、フリオたちにはその声が聞こえなかったのか、最上階に続く階段を勢いよく登り始めてしまう。
そして、ふたりの姿が見えなくなった直後だった。
「うわぁーっ！」
フリオの悲鳴が聞こえてきた。残されたクレスたちに緊張が走る。
「――フ、フリオっ！」
慌てて一同が、階段をめざした。

＊＊＊

クレスたちが最上階にたどり着くと、目の前には大広間があった。床は一段低くなっており、そこは一面〝火の海〟であった。
燃え盛る地獄のような床の上を、一本の細い橋が渡されてある。その先は向こう岸の大きな

扉がある部屋の前まで続いていた。フリオとキャロはその橋を渡った途中で、宙を舞う二匹の魔物にねらわれていたのだ。
ひとつは全身が燃え立つ鳥――ファイアバード。そしてもうひとつは、全身が青黒い体色をし、巨翼(きよよく)を羽ばたかせる竜――ドレイクであった。その二頭は橋の中央で立ち止まったフリオのまわりを旋回(せんかい)し、攻撃の隙(すき)をうかがっている。
「待ってろ、フリオ！　いま行くぞっ！」
クレスが剣を構え、橋の上を駆けだす。その後ろからチェスターが弓を構えた。
「凍牙(とうが)っ！」
チェスターが叫んだと同時に、凍気(とうき)を帯びた矢が放たれる。しかし、宙を旋回していたドレイクが身をひるがえしてよけた。
「くそっ！」
と、唇(くちびる)をかみしめるチェスターの横で、ホウキにまたがったアーチェが呪文を唱(とな)え上げる。
「メテオスォーム！」
それは、アーチェの取得した強力魔法のひとつだった。時空の壁を突き破って、飛び出してきたかのように隕石(いんせき)が大広間へ次々に落下する。それらは宙を舞うドレイクやファイアバードを標的にしていた。衝撃音が響き、隕石がドレイクの巨翼や背中を打つ。グアァッと、ドレイクが苦しそうな咆哮(ほうこう)を上げる。

「す、すげえ……」

橋の上からアーチェの強力魔法を目撃するフリオは、胸の高まりを覚えた。そして、

「フリオ！　下がってろ！」

橋の上を一直線に駆けてきたクレスが、剣を振り上げて跳躍する。

「次元斬っ！」

技の名を叫んだ直後、宙に浮かぶドレイクの巨体は、半円をした光の膜に覆われた。それはクレスがくり出した剣から放たれた〝闘気〟のなせる技であった。

光の膜に囚われたドレイクはその中から逃れられず、クレスの剣から伸びた〝闘気の刃〟によって斬りつけられる。続いて、

「ヴォルト！」

クラースが、召喚魔法を唱え終わった。

高電流を帯びた黒い球体のヴォルトが出現し、ダメージを受けたばかりのドレイクとファイアバードに、閃光の激しい雷を放った。

光の炸裂と轟音が、大広間を揺るがす。ドレイクは苦しみもがきながら、橋の上にズズーンと落下する。一方のファイアバードは、橋の下の〝火の海〟に呑まれるように墜落していった。

「くっ……」

息を呑んで見守っていたフリオは、またしても自分が戦力として役に立てなかったことを後悔した。『狩人の森』に続いて、ここでも傍観者のような状態に終始してしまっている。

「ち、ちきしょう……す、すげえよな……」

　真っ白い忍者の装いをしたフリオは、自然と拳に力をみなぎらせる。悔しい。自分に対して。力と経験の差を前にして、どうしようもない悔しさがみなぎる。当たり前のことだとわかっているが、超えられない壁を実感し、どこにぶつけたらいいのかわからない苛立ちが募ってくる。

「大丈夫か――」

　やがてクレスが、フリオのほうに歩み寄ってきた。その後ろには橋を渡ってきたクラースやミントたちの姿が見える。

　勝利した彼らに、悪い気がした。自分は何の役にも立てなかったという後ろめたさがあったからだ。しかしクレスたちは近づいたとたん、意外な言葉を口にした。

「クラースさん――」

　神妙な口調で、クレスは後ろに近づいてきたクラースのほうに振り返った。

「このレベルの魔物になると、さすがに僕たちの力じゃ、もう無理かも――」

「ああ、昨日の『狩人の森』とは違って、なかなか手強かったな……やはり私たちではなく、この世界の勇者であるフリオたちでないと、本当の意味で倒すのは困難なようだ」

近づいてきたクラースが、クレスの言葉に答える。
「——？」
フリオはきょとんとする。
「な、何を言ってるんだよ、ふたりとも？　今さっき自分たちが倒したばかりなのに、俺たちじゃないと倒せないって、よくわかんないぜ？」
フリオは、もしかしたら何もできずにいた自分のことをクレスたちがかばおうとして、わざとそんなことを言っているのかと思った。
「まさか、俺に同情して……」
「いや、そうじゃない」
フリオの問いかけを、クレスがすぐさま否定した。
「今、僕たちが言ってることは事実だよ」
「事実？　どういうことなんだ？」
フリオは、ますますわからないといった顔をする。
すると、クラースが目の前に歩み寄ってきた。
「いいかい？　私たちは、別の世界から来ている……だから、いくら技を使おうとも、この世界の魔物に与える影響には、おのずと限界があるということなんだよ」
「限界？　嘘（うそ）だろ」

からかうなよ、と言いたげにフリオが答える。だが、
「いや本当だ。下級の魔物なら、長い時間その活動を封じ込めていられるが、もし今のように強い魔物だったら――私たちはとどめを刺すことができない」
「とどめを刺すことができない？　ちょ、ちょっと待ってくれよ！」
フリオの横に降下してきたウィンドメイジ姿のキャロが、宙を飛ぶホウキから降りて訊ねる。
「じゃあ、今まで戦っていたのは――私たちに技の見本を見せるため？」
キャロの問いに、クラースはうなずく。
「ああ、そういうことになるかな……この世界は、君たち自身の力で守らなければならない」
「だから、僕たちは……そのお手伝いをしてるだけなんだよ」
クレスが自分たちこそ、力及ばずだと言わんばかりの苦渋に満ちた表情で言った。
「う～ん、どういうことなんだ……俺にはワケがわかんないよ～」
頭を抱えそうになったフリオに、キャロが横から言った。
「つまり、さっきの魔物は――まだ倒れたわけじゃないのよ」
「おい、嘘言うなよ！　現に、いま倒されたばっかりじゃないか？」
「嘘だと思うなら、自分の目で確かめてみるといい――」
興奮したフリオにクラースは低い声で伝えた。

そしてクラースは、前方の橋の上でうつ伏せに倒れているドレイクの巨体のほうに目を向けた。その視線を追って、フリオも振り返る。そのとたん、

「！」

フリオは、目を見開いた。信じられないものを見た。クレスたちの大技によって、絶命したはずのドレイクの瞼や顎が、ぴくぴくと動き出しているのだ。

「ど、どういうことだ!?　あれは！」

「言っただろ。強い魔物は、私たちでは倒せないと――」

「そ、それって……」

フリオは振り返って、クラースの顔を見る。鍔広の帽子をかぶった召喚術士は、半分あきらめたような顔でつぶやいた。

「つまり、強い魔物だと――すぐに蘇ってしまうということなんだ」

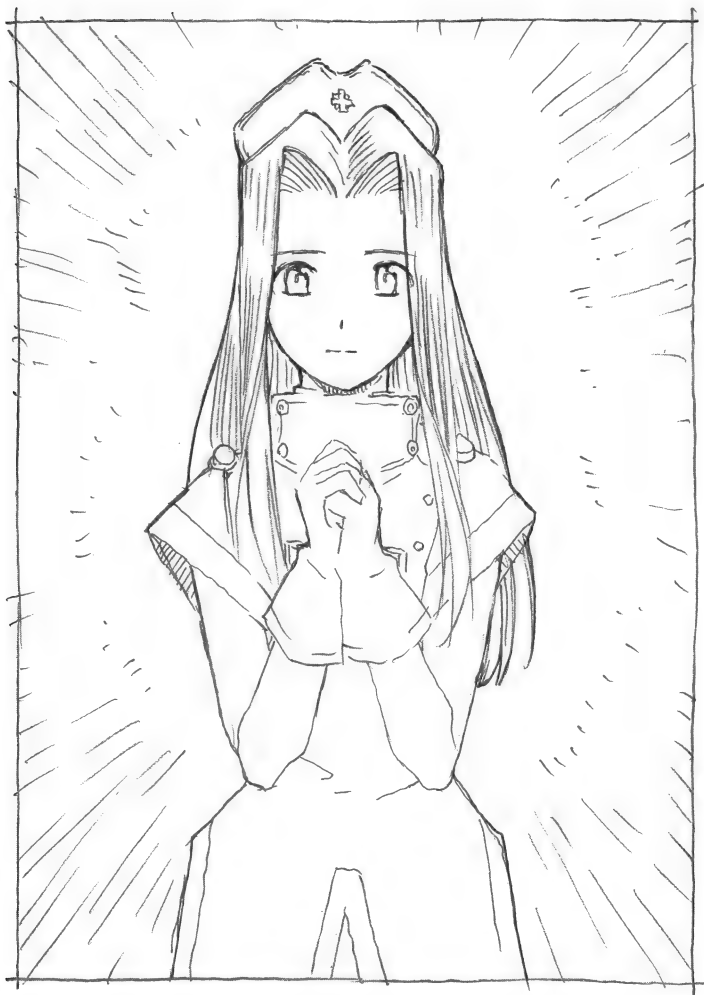
「！」

フリオは信じられない顔で、再びドレイクのほうに視線を戻した。

――ぴくっ。

ドレイクの前脚の指が動いた。続いて腹が膨らみ、膨張と収縮をくり返す呼吸が、再開された。まさにそれは蘇生へのプロセスである。

「そ、そんな……」

今まで、強くて無敵だと思っていたクレスたちに限界があった――それはフリオにとって、衝撃的な事実であった。
「フリオ、君たちの出番だ」
「えっ」
クラースが、ふたりに『試練』を与える厳しいまなざしで言った。
「キャロとともに、魔物にとどめを刺せ――」
「……………」
フリオは、隣に立つキャロを見た。彼女もいつになく、こわばった表情をしていた。
「大丈夫だ！　君たちならできる――」
クレスが励ましてきた。
「お前たちの腕を見せてみろよ。危なくなったら援護してやるから！」
チェスターが荒っぽい口調ながら、どことなくやさしい笑みを浮かべて言う。
「あたしたちに遠慮せず、パパッとやっちゃいなよ！」
アーチェが笑顔でけしかける。
「頑張ってくださいね……あなた方のことを、きっと女神さまも見守ってくださってるはずですから……」
まるで彼女自身が聖母であるかのように、ミントは微笑んだ。

「すずも、信じております……おふたりがこの試練を乗り越え、またさらなる試練に挑まれることを――」
忍びの世界に生きるすずは、あくまでも表情ひとつ変えずに静かに言った。
フリオとキャロは、勇者六人から託された――それは、この世界を守るべき勇者としての誇りと、そして彼らふたりが、これから切り開いていく《未来》である――。
「わ、わかったよ――やるよ！」
フリオは、勇気百倍になった顔で答える。
「私も一生懸命、頑張ってみます！」
隣のキャロはさっそくホウキにまたがって、力強く答えた。それを聞いて六人の勇者がうなずき返す。そのときである。ドレイクの咆哮が大広間に轟いた。
「行くぞ、キャロ！」
「うん！」
真っ白い忍び装束のフリオは踵を返し、ホウキにまたがったキャロは宙高く舞い上がった。
〝なりきり師〟ふたりの、戦いが始まる。
迎え撃つドレイクも、身構えて高らかに吠える。
「負けるかぁぁぁぁーっ！」
「覚悟なさぁぁぁーいっ！」

ふたりは、ドレイクにとどめを刺そうとめざしていた。だが、その青黒い巨体を起こした竜は、顎を開き、喉をごくりと動かしたのち、口から火球を吐きだした。
「！」
フリオが、はっとする。橋の上を走っていると、火球が迫る。よけられない！　あっという間に、全身が炎に包まれた。火球がフリオに命中したのだ。
「うわぁ！」
「フ、フリオっ！」
宙に舞い上がったウィンドメイジのキャロが悲鳴を上げる。
フリオの身に、激突の衝撃と、火球を浴びた高熱が一気に襲いかかる。
「ぐあっ！」
吹っ飛ばされ、橋の上に背中を打ちつけた。危うく橋の上から、真下の〝火の海〟に転がり落ちるところだった。フリオは命拾いした。
「ち、ちきしょう……」
「フリオっ、大丈夫っ⁉」
頭上で、キャロの声がする。
「あ、ああ……なんとかな……」
なりきり師の服が持つ〝防御力〟に助けられたおかげだ。もし普通の服をまとっていただけ

だったなら、今ごろは――。

――服？

そうだ、服だ！

フリオは心の中で叫んだ。自分は〝なりきり師〟なのだ。熱さに耐えられる服に着替えればいいだけの話じゃないか！　なぜ、そのことに今まで気がつかなかったんだ！

「よし、変身ステッキを使おう！」

フリオは立ち上がるなり、腰のポーチを開く。その中にある水色をした〝衣装の玉〟をつかみ取り、そして宙に放り投げた。同時に変身ステッキを掲げる。不可視の力によって魔力の影響を防ぐ結界が、瞬時にして生まれた。

「フ、フリオ……」

ホウキにまたがったキャロが息を呑んで見守る。

光のカーテンに包まれたフリオは、その中で『ひさめ剣士』の鎧をまとった姿へと変化した。

一瞬にして着替えが完了する。

「……おっ？」

光のカーテンが解かれると、ひさめ剣士のフリオはびっくりした。さっきまでの熱さが感じられない。それは、ひさめ剣士の服が持つ『水』の属性が周囲の高温を遮断し、フリオへの影

響を軽減していたからである。
「へへっ、これなら戦いやすいぜ！」
高温の悪影響が収まったのは、ありがたい話だった。フリオはすぐさま腰の剣を抜き、橋の上から飛び立ったドレイクめがけてジャンプする。お返しをする番だ！
「――虎牙破斬(こがはざん)っ！」
剣を振り上げ、跳躍したフリオが宙を突き進む。ドレイクの真横から斬(き)りつけた。
グサッ！　バシュッ！
上段から斬りつけ、そして下から斬り上げる。宙に舞い上がった状態で、その二段技を見事に決めていた。
《グオォーン！》
悲鳴のような咆哮を上げたドレイクが、逃げるように方向転換した。
「へっ、どんなもんだ！」
すとんと、フリオが橋の上に再び足をつけたとき、
「きゃあ！」
今度はキャロの悲鳴が聞こえた。ハッとして振り返ると、巨大鳥の姿となった火の塊(かたまり)のファイアバードが同じく蘇生し、ホウキにまたがったキャロを空中で追いまわしている！
「フリオ、助けて！」

「キャロっ！」
見上げたフリオは、反射的に剣をさっと垂直(すいちょく)に構える。そして一心に念じた。
「アクアエッジ！」
垂直にかざした剣から〝闘気〟が放たれる。それは宙を舞う〝水の塊〟へと変化していく。
ゼリー状のそれがフワフワと浮かんだかと思うと、瞬(また)く間に手裏剣(しゅりけん)のように高速回転を始めた。
「行け、キャロを守れっ！」
フリオが声を出したとたん、まるで命じられたかのごとく——〝水の手裏剣〟は、勢いよく飛び立った。キャロを追いまわすファイアバードめがけて急接近し、そして、
——ズザザザザアーッ！
一瞬のことだった。実態のない火の塊のファイアバードの中に、水の手裏剣は飛び込んだ。
《キエエエエーッ！》
ファイアバードは、自分の中に飛び込んだ〝異物〟にびっくりしたかのように空中でもがく。
内側で高速回転を始めたのだ。たまらず、ファイアバードは逃げようとしたが——もうすでに遅かった。
内部をかきまわす水の手裏剣が、ファイアバードを形づくる炎の塊を粉砕(ふんさい)してしまった。

「おおっ！」
離れた場所で見守るクラースたちが歓声を上げた。
たちまち炎の巨大鳥は、破裂（はれつ）したかのように飛び散り、大広間の中を火の粉（こ）が、ぱらぱらと舞い落ちていく。
「フ、フリオ、ありがとう！」
空中を逃げ回っていたキャロが、ホウキを方向転換させて笑顔を見せた。
「へへっ、いいってことよ！」
フリオが親指を立てて、勝利のポーズを決める——そのときだった。
「危ない！　フリオ！」
離れた場所で見守っていたクレスが叫んだ。
「えっ」
その声に気づいたフリオが振り返る。背後に忍び寄っていたのは、なんとドレイクの巨体であった。竜の鋭い双眸（そうぼう）が、ぎょろりとフリオを見下ろしている。
「!!」
不意を衝（つ）かれて、フリオは身動きできなかった。
——グワァッ！
目の前の巨大竜が、顎を大きく開いた。まさに、フリオを呑み込まんとするかの勢いだ。

「うわぁっ！」
フリオはのけ反(ぞ)った。逃げようにも、橋の縁(ふち)に立ってしまっている。その後ろは火の海だ。
逃げられない！　そう思ったフリオが、やぶれかぶれで手にした剣を振り上げた。すると、
「ダメージ注射っ！」
横から、いきなりナースの服を着たキャロが飛び出し、手に抱えていた大きな注射器の針をドレイクの口の中めがけて、突っ込んでいた。
《グホッ！》
ドレイクの舌に、注射針が深く突き刺さったらしい。竜の双眸が大きく見開かれた。
「——ここまでよ！」
ナースのキャロが、怒った顔で叫ぶ。大きな注射器の針をドレイクの舌に刺したまま、太い筒の中に満たされた毒薬をぐぐーっと押し込むように注入していった。
みるみるドレイクの貌(かお)つきが、青白く変化していく。キャロは容赦(ようしゃ)なく、液体を丸ごと全部注ぎ込んでしまった。すると、
「ほっ！」
キャロが気合いを入れて、注射針を引き抜く。
《グアアアアアァーッ！》
ドレイクは痛さのあまり、飛び上がるように身を反(そ)らして天井を仰(あお)ぐ。そのときの咆哮は、

絶叫に近かった。

ズドォーンと地響きが起こり、ひっくり返るようにドレイクは背中から倒れた。

「やったか!?」

見守るクラースが目を見張る。橋の上でバタバタともがき苦しみ、やがて脚をぴくっぴくっと痙攣させたのち、ドレイクは橋の上から転がり落ちた。眼下の火の海に落下したとたん、

――ゴオオォッ！

ドレイクの巨体を喰らうかのように火柱が高く立ち昇った。

「やったわ……」

ドレイクの最期を、橋の縁から見下ろしていたナースのキャロがつぶやく。その後ろから、ひさめ剣士のフリオが歩み寄った。

「キャロ……」

「ん？」

ナースの格好したキャロが振り返る。キャロも変身ステッキを使って、着替えたのだろう。フリオを助けるために――ウィンドメイジの呪文を唱えていては、間に合わないと考えて。

「あ、ありがとな……その、助けてくれて……」

フリオは照れくさそうに礼を言った。

すると、キャロはいつもの笑顔に戻って答えた。

「何言ってるの？　ふたりで助け合っていきなさいって、女神さまから言われてたでしょ？」

「あ、ああ……そっか……へへっ」

フリオは苦笑いして、頭をかく。キャロはそれを見て、ちょっぴりうつむいてつけ加えた。

「でも……」

「ん？」

「うれしいよ、フリオがそう言ってくれるの……」

「……っ！」

とたんに、フリオの体じゅうが熱くなった気がした。

「あ、あれ？　変だな、ひさめ剣士の服で、すずしくなったはずなのに……どうしちゃったんだろ？　ふぅー、あちぃー、あちぃー」

「フリオなんて、まだいいほうよ……私なんて、水の属性の服をまだ育ててないから……このナースの服に着替えてもまだ熱くって……な、なんだろ？　この熱さ。ふぅー」

と、キャロは手を団扇（うちわ）のように振って、自分に風を送るような仕草（しぐさ）をする。その表情は熱さのせいではなくて、何だか照れて顔を赤らめているかのようだった。

「やったな、見事だったよ——」

クレスが、そう声をかけて近づいてきた。ふたりの活躍を見届け、その能力を確認し合うかのように、勇者たちはうなずき合っている。彼らは、フリオたちが本当のピンチになるまでは

手を出さないつもりでいたらしい。
「これで、もう充分に戦えるな――この世界の勇者として」
クラースのその言葉に、フリオは拳をかざして応えた。
「ああ、まかせてくれよ！」
自信満々のポーズだった。それを見て、クラースは頼もしそうに笑みを浮かべる。そして橋を渡った先の、部屋の扉へと目を向けた。
おそらくダオスは、あの部屋の中にいるに違いない――あの扉の内側からは、今まで以上に強い魔力が漂ってきている。
こんなにも強い〝魔力〟を感じさせるのは――やはり、あの〝魔人ダオス〟しかいない――と、クラースは心の中でつぶやいた。
ふと横を見ると、クレスとミントが同じようなことを言ってくる。
「クラースさんも気づいてたんですか？　この邪悪な魔力を――」
「私も……さっきから……」
クレスとミントが、自分たちの感じる異様な〝気配〟に警戒心を強めていた。その後ろを見ると、チェスターやアーチェ、すずも神妙な顔を浮かべている。
おそらくみんな、感じ取っているのだろう。
あの〝ダオス〟と同じ波動を――。

「……そうか。みんなもか……これは、いよいよ覚悟しないといけないかもしれないな」
「えっ、覚悟？」
事情がわからないフリオは、クラースのつぶやきに首をかしげる。どうしたことか、そのまわりに立つクレスやミントたちにも、同様の半ばあきらめたような表情になっている。
「ど、どうしたんですか、みなさん……」
ただならぬ雰囲気を察したキャロが、心配そうに訊ねた。そんな中で真顔になったクラースが、フリオにゆっくりと歩み寄った。
「フリオ……」
「えっ？」
「これからどんなことがあっても驚かず、冷静に、君たちの持てる力を発揮してくれ――」
「……な、なんだよ、それ？」
クラースの言う意味がわからず、またもやフリオは戸惑う。
「つまり……」
そこで、クラースはいったん言葉を切った。しばし迷ったような表情を浮かべたが、やはり伝えることに決めたのか、ゆっくりと口を開いた。
「もし、ダオスと戦うことになっても――」
「！」

フリオとキャロが、その言葉にどきりとする。
「ダオスにとどめを刺せるのは――君たちしかいない」
クラースは覚悟を決めて、この世界の勇者たちに伝えた。
それはふたりにとって、最も『過酷な試練』であった――。

＊＊＊

やがてクレスたちは火の海の上に架けられた一本の橋を渡り、向こう岸にある部屋の扉前にたどり着いた。不思議なことに、固く閉ざされていたはずの扉が勝手に開き始める。
ギイッ……。
不気味な音を立てて、重々しい扉が開かれていく。それは『運命の扉』のように、フリオやキャロ、そしてクレスたちを〝別の空間〟へと招き入れた。
「！」
足を踏み入れた瞬間、フリオは息を呑んだ。その空間は、今までの『炎』による熱さは微塵も感じられず、代わってひんやりとした冷気が部屋全体を覆っていたからである。
薄暗く縦に長い部屋の奥には、祭壇のように高くなった場所があり、その上には人の身の丈ほどの六角柱となった、黒くて大きな水晶が二つ並んでいた。

そしてそのひとつずつの前には、まるで眠ったかのようにたたずむ、ふたりの人影があった。

ひとりは、蒼い鎧に身を包んだ騎士メンデル。

そして、もうひとりは——。

「ダオスさん!!」

フリオは叫んだ。この異様な光景にためらいつつも、黒い水晶の前で眠ったまま立ち尽くすダオスへと、とっさに駆け寄っていた。

「ど、どうしたんだい、ダオスさん!」

目の前まで近づき、必死に呼びかけてみたが、ダオスからの返事はない。その瞼をしっかりと閉じたまま、意識がここにないかのように眠っている。自らの意思で立っているというより、何者かの力によって仮死状態にさせられているといった感じだった。

「……どうしたんだよ、いったい……どうしちゃったんだ、本当にダオスさんは……」

フリオはわけがわからず、混乱する。

ダオスもメンデルも眠っている。クレスたちはフリオに近づいた。

「落ちつけ、フリオ」

クラースはなだめるように声をかけた。しかし、振り返ったフリオは今にも泣きだしそうな表情を浮かべている。

「だって、だってよ、ダオスさんが！　これは眠ってるのか？　死んだわけじゃないんだろ？」
「もちろんだ。何者かの魔力によって、そういう状態にさせられているだけだ――」
「じゃあ、助けようぜ！」
フリオが、クラースに叫んだ。
「残念だが、それは無理だな……」
クラースはうつむきかげんに首を振った。
「なんで!?」
「何者かが、強力な魔力を――そのダオスと、こっちのメンデルに対して放っているからだ。まず先にそれを断ち切らなければ、ふたりを救い出すことはできない」
「何者か？」
「ああ、おそらくそいつは……ダオスを、この世界に復活させた奴だと思う」
と言って、クラースはあたりに視線を向けた。
薄暗い部屋の中には、クレスたち勇者六人とフリオとキャロ、そして眠ったままのダオスとメンデルしかいない。それ以外の気配は感じられない。
てっきり、ここに潜んでいるものと思ったのに――クラースが落胆の息をついたときだ。
「だ、誰なんだ……そいつは！」

フリオが怒りをあらわにした。
「やい！　隠れてないで出て来い！　どこにいる⁉」
姿なき相手に向かって、フリオは叫び続ける。
「……フリオ」
ナース姿のキャロが心配そうに見つめた。
「姿を見せろよ！　隠れてるなんて卑怯だぞ！　おい、ダオスさんをこんなふうにして、何がおもしろいっていうんだ⁉」
フリオは、天井に、壁に——視線を向けて、何度も訴え続ける。しかし、どこからも返答はなかった。
どんなに呼びかけても無駄だろう——。
と、クレスたちがフリオを止めかけたときだった。
《アハハハハ！　何だ、つまんないな！　せっかく感動のご対面が見られるかって期待してたのに、涙のひとつも見せてくれないのかい⁉》
嘲笑うような、幼くて甲高い声が、どこからともなく響いてきた。
「だ、誰？」
キャロがあたりを見渡す。
「なんか、子供っぽい声だけど…」

アーチェが、みんなの思っていたことを口にした。
すると、次の瞬間――祭壇に二つ並んだ黒い水晶の間に異変が起こった。稲妻のごとき電流が走り、触手のように二つの黒水晶を結んで波打った。
やがて電流の走る黒水晶の間に、うっすらと人影が浮かび上がってくる。
「あ、あれは……!?」
フリオが声を上げた。電流が収まり、そいつの姿がはっきりと見えるようになった。
それは、銀灰色の髪を矢印のように、左右に二つずつ尖らせ、白粉を塗ったかのごとき真っ白い顔をしていた。小さな水晶を額につけ、その顔だちはどこかあどけなく、人間で言うならまだ十代半ばくらいといった幼さを残している。
身の丈は、一六五センチ。細身の体軀に、ぴったりと密着する特殊なスーツ――黒地に赤のラインがいくつも入ったものをまとっている。手足には、赤い手套と赤いブーツ。その形態はあえて言うなら、白皙の悪魔が〝戦闘服〟を着ている――といった、異様な姿だった。
「お前は、何者だ!?」
クレスがとっさに身構えて、叫ぶ。
二つの黒水晶の間に現れた異様な姿の少年は、大きく口を開いて笑いだした。
「アハハハハッ！　はじめまして。ボクの名前は、サナトス！　ダオスをこの世界に呼んだのは、このボクさ――」

まるで自慢するかのように、サナトスは名乗った。
「お、お前が!?」
フリオが眉をつり上げる。
「あなた……人間なの？」
続いて、キャロが問いかける。
そのとたん、サナトスの表情に怒りが灯った。
「人間だって？　おいおい、ボクを君たちと一緒にしないでくれよ！」
すると、
「何言ってんの？　あんた……ただの子供じゃん！」
――ずばり、アーチェが言い返した。
サナトスは、フッと余裕の笑みに戻った。
「ボクをバカにしないほうがいいと思うけどなぁ……君たちの知っているダオスを、この世界に連れて来れるほどの力を持ってるんだからさ！」
と、うぬぼれた表情で、祭壇の上からクレスたちを見下ろす。
「そのとおりだな、恐ろしい力だよ……」
クラースは無感動に言った。その横で、チェスターが呆れたように続ける。
「ああ、言えてるぜ……ガキに無駄な力を持たせると、ロクなことがないっていう証拠だな」

「……なんだと？」
　動じていない彼らの態度に、サナトスがムッとする。祭壇を仰ぐ勇者たちの中からクレスが叫んだ。
「サナトス！　お前の目的はなんだ⁉」
「答える必要なんてあるのかなぁ……女神に呼び出されて、のこのこやってきた使いっぱしりの連中なんかにさ！」
　お返しとばかりに、サナトスは彼らをバカにした。
「使いっぱしりだとぉ⁉」
　すぐさま反応したのはチェスターだった。その隣で、アーチェも顔を真っ赤にして怒りだす。
「悪かったわね！　パシリで！」
「おい、アーチェ！　認めてどうすんだ‼」
　横を向いたチェスターが、呆れ顔でツッコミを入れる。
「……へ？　違ったっけ？」
「あ、あのなぁ……」
　チェスターが頭を抱える。そんなふたりをよそに、クラースがサナトスの立つ祭壇へと歩み寄った。

「とにかく、お前の目的を教えてくれないか？　まさか、単なる気まぐれで、ここまでやっているとは思えないんだが……」
クラースは冷静な口調で、サナトスを見上げた。相手が子供のような性格なら、慌てることはない。とにかく、おだててやればいいだけだ——うまくいけば、手なずけられるかもしれない。そう考えたクラースの策をあっけなくぶち壊す、同じ子供レベルの勇者がいた。
「答えろ！　なぜダオスを利用する⁉」
クレスだった。普段はおとなしくてまじめなのに、ひとたび火がつくと一直線に熱血する。
「ダオスを、どうするつもりなんだっ⁉」
「ク、クレス……」
横目で見て、クラースはがくっと肩を落とした。
クレスが怒りにまかせてサナトスをどなりつけていては、おだてて大事なことを喋らせてしまおうとしたクラースの考えは、もはや無になったも同然だ。
「フフフ……いけなかったのかい？」
サナトスはいまだ余裕を保っていた。
「お、おのれ……サナトス！」
クレスは拳を震わせる。すると、クレスの様子を見かねたようにミントが前に出た。
「お願いです！　ダオスは、私たちとの戦いで傷つき——永遠の眠りについているのです！

もう、そっとしておいてあげてくれませんか……？」
嘘ではなかった。それが勇者六人の、いつわりなき本心だった。
だが、サナトスはその祈るようなミントの訴えを聞いて、ニヤリとした。
「おやおや、またずいぶんとダオスの肩を持つんだね？　君たちはダオスと戦ってたはずじゃないのかい？」
にやついた顔で、サナトスが問いかける。まるで、やっとこの話になったかと言わんばかりのしたり顔である。
――こいつは何が目的なんだ！
クラースはこみ上げる怒りを抑え、つとめて冷静に答えた。
「過去はそうだったかもしれん。だが、今はダオスが背負っていた使命――母星の多くの命を助けるという悲願を――その想いを、我々は理解している！」
事実である。クラースは、仲間たち全員の〝ダオスに対する想い〟をはっきりと口にした。
だが、それを聞いてサナトスは喜んだ。待ってましたと言わんばかりの笑みをこらえながら言った。
「ふーん、じゃあ……戦いづらいってことなんだ？　アハハハ！　やっぱり思ったとおりだ！」
「何っ？」

クラースが眉を寄せる。悪い予感がした。
「お前……俺たちをからかってるつもりか⁉」
たまらずチェスターが、祭壇の前に飛び出す。そしてサナトスをにらみ上げた。
「──だったら、どうだって言うんだい？」
「ふざけるな！」
チェスターは弓を引いた。祭壇の二つの黒水晶に挟まれて立つ、サナトスに狙いを定める。
ビュン！
矢が飛んだ。サナトスめざして──しかし、命中すると思われたそれは、まるでサナトスを避けるように彼の脇を通り過ぎていった。
「ちっ！」
チェスターが舌打ちする。
「アハハハ！　矢を向ける相手が違うんじゃないのかなぁ……君たちが戦う相手はこのふたりなんだよ？」
サナトスが、黒水晶の前で立ったまま眠る、ダオスとメンデルのふたりに目を配らせる。
「くそっ、もはや避けられんか……」
クラースの表情にけわしさが増す。
祭壇上のサナトスが、その変化を見て笑う。

「アハハハ！　戦ってもらうために、わざわざここまで呼んだんだ！　無事に帰れるなんて、考えちゃダメだよ！」
サナトスがはしゃぎ出したとたん、
「やだよ、今のダオスとは戦えないよ！　なんで、そんなことをあたしたちにさせるワケ⁉」
アーチェが叫んだ。
「そりゃ見たいからに決まってるだろ？　君たちは、ダオスをもう憎めない……その心をボクは知ってるから、戦うところを見せてもらうのさ！」
「お前！　やっぱり、俺たちで遊ぶ気だったんだな⁉」
チェスターが、再びどなった。
「うん、遊ばせてもらうよ！　フフッ……それでね、心を乱れさせて欲しいんだ」
その一言を、クラースは聞き逃さなかった。
「心を乱れさせる？」
「そうさ。そうすれば君たちの心が手に入る……ボクはね、人の心をいっぱい集めたいのさ！」
サナトスは、クラースの問いかけに答えた。
――心を手に入れる。それが、この悪魔のような顔をした少年の目的なのか。
「あたし、人間じゃないんだけど――」

アーチェがむくれたように言う。怒ったような態度をして、サナトスの本心を探り出そうとしていた。
「同じ扱いをされて、気に入らないって言うのかい？」
サナトスが、アーチェの誘いに乗ってきた。
「ハーフエルフだって、心があるから同じだよ」
「あんた、心を集めるってマニアなの？」
「はあ？　コレクターってちゃんと言って欲しいね。人の心をたくさんたくさんコレクションしようと思ってるんだから！」
「一緒じゃん！　マニアと、どこが違うっていうのさ——あんた、自分のやってることをさ、もういっぺん、よぉ〜く考え直してみたほうがいいんじゃないの？」
アーチェに説教っぽく言われた瞬間、サナトスが少年のようにキレた。
「呼び方なんて、どうでもいいよ！　とにかく、やるの？　やらないの？　せっかく心の準備をさせてあげてるのに、つまんないなー、やる気になってくれないと！」
怒りを爆発させそうなその態度は、手のつけられない駄々（だだ）っ子のようであった。
「ダ、ダオスさんを、ダオスさんを……よくも……」
サナトスと話をするクラースたちの脇で、フリオは怒りがこみ上げてきていた。
他人をぞんざいに扱い、自分中心の考えを押しつけてくるサナトスに対して、今まで感じた

とのない敵意がめばえてきていた。それは、隣にいるキャロも同じだった。
「許せない……人の心をもてあそぼうとするなんて！」
キャロも、サナトスをにらみ上げ、震える声でつぶやいている。
ダオスに、孤児である自分たちと同じような、寂しさがあるのを感じ取っていた。だからあの人を喜ばせたかった。あの人の笑顔を見たかった……純粋にそう思っていたことは叶わず、ダオスは力あるものに利用され、今や玩具のような扱いを受けている。
……許せなかった。今すぐサナトスに、このような悪ふざけを止めさせたかった。
「フン！　だから怒りは、ボクじゃなくて、ダオスとメンデルのほうにぶつけなよ！　さあ、もうそろそろいいかい？　君たちがぐずぐずしてるから、こっちのほうから行かせるよ――」
サナトスは一方的に、話を打ち切った。
パチン！
サナトスが指を鳴らした瞬間である。二つの黒水晶の前で、眠ったようにたたずんでいたふたりの男が動き出した。それを見た瞬間、クレスたちから戦慄の声がもれる。
「ダオスが……」
黒ずくめに黄金の髪をした長身のダオスが、ゆっくりと祭壇を下りてくる。続いて蒼い鎧の騎士メンデルがあとを追う。
虚ろな瞳をしたダオスは、クレスたちの前までやってくると、立ち止まってつぶやいた。

「私の目的を邪魔するのは、お前たちか……」
「ダオス、何を言ってる！」
みんなの前に立つクレスが言った。
「記憶だ！　私たちがダオス戦ったときの記憶が――頭の中で、再生されてるんだ！」
「何だって！」
クレスが、クラースに訊ね返す。
「ダオスは元に戻ったんですか!?」
「残念だが――そのようだ」
「！」
「私たちと戦わせるために、サナトスは――ダオスの憎しみが最も高まったときの感情を復活させたんだ！」
クラースがそう言った直後である。
「お前たちに邪魔はさせぬぞ！　我が愛する故郷〝デリス・カーラーン〟よ！　我の力を解放したまえ！」
ダオスはマントをバサッと広げ、そして天を仰いだ。今まで感じられなかったダオスの魔力がよみがえってくる。
「く、来るぞ！」

クラースが身構えて、叫ぶ。

「アハハハ！　始まった、始まった！　いいぞ！　心が壊れるまで、お互いに殺し合うんだ!!」

＊　＊　＊

「な、何だ――この強さは!?」

クレスはくり出される剣の勢いを、自分の剣で受け止めるのが精いっぱいだった。

「僕は、僕は……強くなるんだ……」

メンデルが兜（かぶと）の顎（あご）当てから、つぶやきをもらす。見開かれた瞳は、何かに取り憑（つ）かれたように焦点（しょうてん）が合っていない。

「どけ！　邪魔だ！　死にたいのか!?」

クレスの横から、チェスターがメンデルに弓を構えている。だが、忠告の言葉は届いてない。

「兄さんに……兄さんに……僕は強くなって……兄さんに、認めてもらうんだ……」

念仏（ねんぶつ）のようにつぶやきを繰（く）り返している。

「おい、クレス！　早くこいつを倒してしまえ！」

騎士メンデルと剣を打ち合うクレスに、チェスターはゲキを飛ばす。
「待ってください！　この人は、魔物じゃありません——」
慌ててミントが、クレスの脇に駆け寄る。
「わ、わかってるよ、ミント——で、でも！」
メンデルと剣をかち合わせるクレスが、薙ぎ払おうと力を込める。だがメンデルの動きのほうがわずかに早く、膝蹴りをクレスの腹にかましてきた。クレスは避けきれず、派手に吹っ飛ばされた。
「——ぐっ！」
床に仰向けたクレスにミントが近づき、回復魔法を与える。
「ヒール！」
その間に、メンデルは四人に歩み寄ってくる。
戦いは二手に分かれて繰り広げられていた。ダオスはクラースやフリオたちに向かい、残されたクレス、ミント、チェスター、アーチェの側には蒼い鎧の騎士メンデルが挑んできた。
早くこいつを気絶させて、クラースたちの援軍にまわろう。そう考えていたが、メンデルの強さに手こずる結果となっていた。騎士メンデルが壁となり、クラースたちのほうに向かわせなかったのである。
「兄さん、兄さん……見ててよ！　この魔物どもを倒してみせるから！」

じりっじりっと、クレスたちに歩み寄るメンデル——その瞳は、虚空を見つめていた。
「ダメだ、見えてない！　クレスを魔物と勘違いしてやがる！」
チェスターが、クレスを守るようにメンデルの前に出る。
クレスに回復魔法をかけ終えたミントは、すぐさま次の詠唱を始めた。
「……ピコピコハンマーッ！」
すると、宙空を割って出現した巨大なハンマーが——騎士メンデルの頭上に落ちる。
「ふがっ！」
兜で守られていたものの、法術の力で叩かれたメンデルは、短い悲鳴を上げて床にくずおれた。
「よし、今のうちに——」
ミントの回復魔法によって、復活したクレスが立ち上がった。しかし、
「……あっ⁉」
クラースのほうに向かいかけた足が止まる。気絶したかに見えたメンデルが、あっさり起き上がってしまったのだ。
「兄さん……負けないよ……僕は、負けないから……」
剣を振り回し、再びクレスたちを釘づけにしてくる。
「くそっ、急がないと——みんながダオスに！」

身構えたクレスが、焦りをにじませた。
「ダ、ダオスさん……どうしちゃったんだよ⁉」
クレスたちと反対側の位置で、フリオたちは迫ってくるダオスに震えていた。
「気安く我が名を呼ぶのは、誰だ……」
黄金の髪の下に覗くダオスの双眸が、じっと〝ひさめ剣士〟の装いをしたフリオを見下ろす。フリオの隣では〝ナース〟姿のキャロが、寄り添うようにおびえている。ダオスは訝しげな顔になった。
「貴様は、何者だ？」
「な、何を言ってるんだよ！　フリオだよ！　忘れたのかい⁉」
自分たちの知るダオスに呼びかけるかのように、フリオは叫ぶ。
「フリオ……？」
眉を寄せて、ダオスがその名をつぶやく。しかし反応は鈍い。
「ダメだわ、もう私たちのことを忘れちゃってるのかも！」
キャロがフリオの隣で、哀しそうに首を振る。
「そんな！　ダオスさん、ねえ！　思い出してくれよ！」
信じたくないという口調で、ダオスに歩み寄ろうとした——そのときである。横からさっと

誰かが、飛び出してきた。
「危険です、下がっていてください――」
忍者の装いをした、すずだった。フリオたちより小さな体が、盾になろうとしている。
「ここは、すずがお引き受けいたします。たとえこの身を犠牲にしてでも、あなた方をお守りします――」
そう言って、すずは忍刀を抜いて――ダオスに飛びかかっていった。
「ふん、おろかな！」
ダオスの細く長い腕が振り下ろされ、跳躍しかけた小柄のすずを叩き落とした。床に落ち、ごろんごろんと転がったすずは、素早く体勢を立て直し、再び床を蹴った。
「飯綱落としっ！」
すずはダオスの頭上に跳躍し、そこから回転しながら忍刀をくり出す。
「――うぐっ！」
肩を斬られたダオスがよろめいた。
「……ね、ねえ……フリオ……あんな小さい子が、私たちのために戦ってるわよ？」
キャロの震える声がする。隣のフリオは、すっかり困惑しきった表情だった。
「くそっ……どうすりゃいいんだ！」
そう声に出したとたん、

「ヴォルト！」
斜め後方からクラースの声がした。召喚魔法を唱えていたらしい。手にした魔術書を閉じ、ダオスめがけて片手を突き出す。
それが、ターゲットを示す合図なのか。宙空に突如現われた黒い球体のヴォルトは、ダオスめがけて電流を放つ。
「ぐおおぉっ！」
すずの忍刀をかわし続けていたダオスが、電流を浴びてのけ反る。
「フリオ、最期のとどめは——頼んだぞ！」
クラースはその言葉を残して、すずの援軍に向かった。
見送るフリオは呆然とした。
「クラースさん……」
その脳裏に、クラースの言葉がよみがえる。
——ダオスを倒せるのは、君たちだけだ……。
「クレス！　いつまで手間取ってるんだ!?」
ついに、チェスターが苛立ちをあらわにした。目の前のクレスは、メンデルの妨害をいまだ突破できずにいる。

「くそっ、もう我慢の限界だぜ！」
とうとうチェスターは、メンデルに弓を引いた。
「！」
後ろに控えるミントとアーチェが息を呑んだ。
「タアッ！」
チェスターが弓を放つ。それは狙いどおり、メンデルの肩を射抜こうとした。しかし、
——バシッ！
クレスに剣を振り回していたメンデルが、片手でチェスターの矢を受け止めた。
「……な、なんだ？」
チェスターが目をしばたたく。メンデルには『第三の目』があるというのだろうか。クレスとの剣戟に集中しているはずなのに、横から飛んできた矢も正確に見切っていたとは！
「兄さん、もう少しだよ……待っててね……きっと僕が勝つから！」
メンデルは同じつぶやきを繰り返しながら、クレスに剣を突きだしてくる。
「や、やめろ！　目を覚ますんだ！」
「兄さん、見ててよ！　僕は……僕は、強くなってみせる！」
剣のかち合う音が響く。しかし、人間を相手にクレスは防戦一方である。
「くっ……おい、アーチェ！　ぼさっとするな！」

チェスターが後ろに振り返り、傍観者のアーチェを叱った。
「だってェ～、戦いにくいよぉ～、人間相手に魔法を唱えるのなんてさ～」
アーチェは困ったように、ポニーテールにしたピンク色の髪をかく。
「つべこべ言ってる暇があったら、さっさと唱えろ！　お前、クレスがどうなってもいいって言うのかっ！」
チェスターの一喝に、アーチェはあたふたする。
「え!?　な、何もそういうワケじゃ――」
だが、もっと焦っていた人がいた。
「ク、クレスさん……　タイムストップ！」
ミントである。なんとか助けようと魔法を唱えた。――クレスに剣を打ち出していたメンデルの動きが、ぴたっと止まった。
――やったか!?
チェスターが、クレスに声を飛ばす。
「今だ、クレス！　そいつを気絶させろ！」
「あ、ああ、わかった！」
クレスが答えた瞬間。
――バキッ！

ふいに動きを再開させたメンデルの拳が、クレスの顔面を襲う。
「ぐはっ！」
意表を衝かれたクレスが、殴られて吹っ飛ぶ。
「ク、クレスさん!!」
ミントが悲鳴を上げる。
「あ、ああ……ダメ……お、お母さま……術が効かない！　このままじゃ、クレスさんが……」
両手を合わせ、ミントは神のご加護が訪れるよう、亡き母へ祈った。
「フリオ、どうするの？　本当にこのままだと、みんなが――」
混乱した状況に、キャロが泣きだしそうになっている。
「わ、わかってる！　わかってるって！」
首を振って、フリオが答える。普段は難しいことを考えるのが苦手なフリオだが、このときばかりは別だった。
「くそぉ……全部、あいつのせいだなっ！」
すべての元凶である存在を、にらみつけた。ダオスと格闘し続けるクラースとすずの前から離れ、フリオはめざす祭壇の上に駆け登った。
戦況を楽しんでいたサナトスは、近づいてきたフリオに見下したような笑みを向けた。

「やい、サナトスとか言ったなっ⁉　ダオスさんを元通りにしろ！」
「フッ……バカだなぁー。そんなこと『ハイ、そうですか』って、聞くとでも思ったのかい？　アハハハ！　人間って、やっぱりバカだったんだ！　話し合いで何でも解決するって？　戦いが止められるって？　そんな甘いこと、本気で思ってるんだもんなぁー」
「何言ってやがる！　こいつ——うわっ！」
飛びかかろうとしたフリオは、黒水晶からの放電を浴びた。そのときに、何かにぶつかったような気がした。
「なんだ、これ……見えない壁が⁉」
一歩後退したフリオが、不思議そうな顔をする。サナトスに近づけないのだ。
「アハハハハ！　ボクは別の次元から、君たちのことを見てるんだよ！」
「な、なんだって⁉」
「だから言ったろ。君たちの相手はボクじゃなくって、ダオスとメンデルだって——早くあのふたりをやっつけちゃいなよ。でないと君が死んじゃうよ？　アハハハハ！」
楽しそうにサナトスが笑う。
ひさめ剣士のフリオは身構えた。
「うるせえ！　俺は、お前のことが許せねえんだ！　こっちへ来い、俺が相手になってやる！」

「フン、ガキのくせにうるさいなぁー」
「何ィ!?　お前だって、ガキだろうが!!」
フリオが言い返したとたん、サナトスの表情が変わった。
「……君は、本気でボクを怒らせる気かい？　ダオス！　こいつ、やっちゃえ！」
「えっ？」
意外な言葉に、フリオは目を丸くした。まるでダオスを操っているかのような口調だ。
そう思った次の瞬間、背後に気配を感じた。振り返ると、いつの間にかダオスが後ろに来ていた。
「！」
さっきまでダオスがいた祭壇の下に目を向けると、そこにクラースとすずの倒れている姿があった。キャロがふたりに近寄って、抱き起こそうとしている。それを見たとたん、フリオの体に震えが走りだした。
「貴様か……世界樹ユグドラシルの枯渇を早める、ミッドガルズの者は……」
低い声で、ダオスが問いかけてきた。
「ダ、ダオスさん……何を言ってるんだよ？」
おそらくこれも、ダオスの〝元いた世界〟での記憶なのだろう。今のダオスは現実の光景ではなく、悪夢を見ているのだ。

「我が真の目的を邪魔するものは、消えるがよい――」
いきなりダオスが、フリオの首をつかんだ。
「うっく！　ぐぐっ……ダ、ダオス……さん……」
首を掴まれた手に力が込められ、フリオは息苦しさを覚える。
まさか、このまま死ぬのか――。
呼吸ができない苦しさの中で、フリオの意識が薄らいだときだった。
〝――フリオ、たたかえ！〟
(……えっ？)
突然、男の声がした。
幻聴のごとく、誰かの声が脳裏に響いたのだ。
フリオが失いかけた意識を取り戻す。
(今の声は、ダオスさん……？)
つぶやきのように問い返した。
その声は再び、願い出た。
〝フリオ、戦ってくれ……私を倒してくれ！〟
――なんだって⁉
フリオの意識がかなり戻ってきた。閉じかけた目を開けると、依然としてダオスは、フリオ

の首を絞めている。その表情は冷酷そのものだ。しかし――。

〝――頼む！　今の私は、自分を止められない！　記憶も暴走している。本当の自分が何者なのか、わからなくなってきているんだ――〟

ダオスの声は、あきらかに訴えかけてきた。

フリオの心に――。

フリオの知る、ダオスさんとして――。

（――ダ、ダオスさん……）

心の声で、それだけを応えるのが精いっぱいだった。そんなフリオに、ダオスの心の声が、さらに伝えてくる。

〝私は、もう嫌だ……こんな苦しみは今すぐ止めたい……頼む、フリオ……私を眠りにつかせてくれ……お前にならば、私は喜んで倒されるつもりだ！〟

受け入れがたい願いだった。

首を絞められて苦しむ肉体とは別に、フリオの心が揺れ動く。

――そ、そんな。やめてくれよ、ダオスさん！

嫌がった、拒否した、きっぱりと断った。

だが、ダオスの声は告げる。

決意したかのように告げる。

〝私を倒せるのは、お前だけだ……もう私の心は決まっている、お前だけに……信じているぞ。だからお前に、これを託す――〟

そのとき、ダオスの心の声と肉体が同調したかに思えた。フリオの首を絞める力が弱まったのだ。そして、わずかにダオスは向きを変えた。何かをしているような動きだった。しかし、フリオにはそれが、よく見えなかった。

〝待っているからな……お前が、私を倒しに来てくれることを……〟

「ン？　変だなぁ……黒水晶の力が弱まってきてる？」

サナトスは黒水晶の異変に気を取られて、ダオスの動きを見ていなかった。予定外の事態が訪れたからである。

「それほど、ダオスたちは力を使ってないのに――どうしてだ？　何か、別の要因が……」

訝しげにサナトスは、黒水晶を見つめる。

しかし原因はわからない。

黒水晶の波動に乱れが生じるのは、サナトスにとっても不都合である。

「仕方ない、戻るか――おい、ダオス！　そいつらはあとでいいや！」

サナトスが、ダオスに声をかけた。その瞬間、ダオスはフリオの首から完全に手を放した。

「フン！　運のいい奴らだ――」

去り際に、サナトスは祭壇の下に目を向ける。そのとき――ちらりと、メンデルの姿が視界

に入った。
「ふんっ、あいつはいらないや——ダオスさえいればいいんだから！」
吐き捨てるように言った。そしてサナトスは、黒水晶の間で姿を消した。続いてフリオから手を放したダオスも、姿が薄く消え始める。
「ま、待って！　ダオスさん！」
床に膝をついて喉をさすっていたフリオが顔を上げ、必死に声を出す。
こちらをじっと見下ろすダオスの表情は、どこか無念そうだった。そして、フリオの脳裏に最後の声が届く。
〝待っているぞ、フリオ——お前だぞ。お前に、私は頼んだからな——〟
念を押すような声だった。
「ダ、ダオスさん……」
呆然と見送るフリオの前で、ダオスは姿を消した。続いて、あの二つの黒水晶も消え去った。

しばらくして、騎士メンデルは意識を取り戻した——。
床にうずくまり、彼は泣いていた。自分が何をしていたのか、うっすらと記憶に残っていたらしい。そのことを後悔し、おびえていた。

「うっ、ううっ……こ、怖かったよ……」
普段は虫も殺せないような、おとなしいメンデルである。ゆえに凶暴になったときの自分を思い返し、かなりのショックを受けた様子だった。
「メンデルさん、もう忘れたほうがいいですよ――」
その蒼い鎧に覆われた肩を、ミントがやさしく癒すように撫でている。まわりにクレスたちがたたずみ、みんなは無言だった。
「うっ、うう、兄さん……僕は……僕は、やっぱり弱虫だ……」
「……」
メンデルの泣き声に、フリオはたまらず背を向けた。
そして心の中でつぶやいた。
――違うぜ。
本当の弱虫は、相手に頼まれたことに応えられないヤツのことを言うんだ！
それはつまり、自分のことだった。
フリオは、自分の手の中にあるものを見つめた。それは、ダオスが消え去る直前に、フリオに託した金の腕輪である。
――これはただの腕輪じゃない。
ダオスの気持ちを集約した象徴。フリオには、耐えがたいほどの重さに感じられてくる。

それは、言葉以上の重さだった。

(ダオスさん——俺は、俺は……)

フリオは、祭壇上のダオスが消えたあたりを見つめた。こみ上げてくるものがあった。

泣きたくないのに。泣きたくなんかないのに。

心の中で叫んでいた。

あんたの頼みなんか——聞けないよっ!

——そんなの知るもんか!

なんで、俺なんかに頼んだんだよ! どうしてだよ——。

気がつくと、フリオの目頭は熱くなっていた。

＊　＊　＊

事件はそれだけではなかった。

救出したメンデルを連れて、レグニアの町に戻ると、クレスたちは目を疑った。

驚きのあまり、声に出していた。

「町が……」

「誰もいない——」

人の歩く姿、隣人と挨拶する声、走り回る子供たちのはしゃぐ声――それらがきれいに消えている。音のない町、人の姿のない町――戻ってきたフリオたちを迎えたのは、人々の気配が消えた〝抜け殻〟も同然の光景だった。
やがて、みんなで手分けして人の姿を探し求めた。
「どうだ、誰かいたか？」
クラースが、中央広場に戻ってきたクレスたちに訊いた。
「いいえ――こちらの通りには、誰も！」
ミントを連れて戻ってきたクレスが、残念そうに答える。
「チェスター、そっちは？」
反対方向から、アーチェと駆け戻ってきたチェスターは、黙って首を振る。
どこを探しても人の姿は見当たらなかった。
「そうか……私たちがいない間に、何があったんだ……」
クラースはため息をついて、噴水の縁に腰を下ろした。
やがて別の場所を探していたフリオやメンデルたちも、中央広場へと戻ってきたが、結果は同じだった。
「長老の姿もないし、みんな本当にどこ行っちゃったんだ！」
気落ちした表情のフリオが、不安を払うように叫んだ。

ガタッ！
その叫びに、反応したかのような物音がした。
「！」
びっくりした顔で、一同がその物音がした方向に注目する。
ゴトッ、ゴトゴトッ……。
近くに、不自然に置かれてあった大きな酒樽（さかだる）が動いた。フリオたちはじっとそれを見つめた。すると、不意にその酒樽が宙に上昇した。
「ひっ！」
キャロが悲鳴を上げそうになる。しかし、宙に浮かんだはずの酒樽には、二本の足が生えていた。怪物だったのか。いや、違う。誰かが、酒樽の中に身をひそめているのだ。
酒樽を持ち上げ、中から顔を出したのは、赤い鎧に身を包んだレグニア騎士団の隊長――。
「レオニス！」
「兄さん！」
フリオとメンデルが、続けて声を上げた。なんと、メンデルの兄であった。
「おお、弟よ！　無事だったか――」
酒樽を脱いだレオニスは、驚いたように蒼い鎧のメンデルに駆け寄ってくる。喜びの再会であった。

「ごめんよ、兄さん——僕、心配かけちゃったね……」
「いや、いいんだ。お前さえ戻ってくれれば——これからは兄弟仲良く、力を合わせて、町の平和を守っていこうではないか！」
——って、ちょっと変だぞ。
これの、どこが平和なんだ⁉
町の人たちがいなくなってしまった状態に、クレスたちが一斉に首をかしげる。
そんな中で、
「レオニス！　教えてくれ、何があったんだ⁉」
フリオがすぐさま質問した。少し頼りないが、町の中に残っていた唯一の人間である。何かを知っているに違いない。みんなから期待のまなざしが集まった。
やがてフリオに向き直ったレオニスは、そのときの恐怖を思い出すかのように、震えた声で言った。
「ダオスだ——」
「えっ、ダオスさんが⁉」
レオニスはうなずいた。
「やはり、私がにらんだとおり、ダオスは魔物だったのだ！」
「どういうことなんだよ、レオニス！」

フリオは怒ったように問い返す。
「あの者は……町中の人間を、すべて連れ去ってしまった!」
「!」
それを聞いて、フリオは勢いを削がれた。
「町の人たちを……ダオスが!?」
後ろで聞いていたクレスが目を見開く。ほかの勇者たちも、それぞれに驚愕した。
「詳しく聞かせてもらえないか?」
クラースが、レオニスに歩み寄った。
「うむ、いいだろう――」
レオニスがうなずき、一同に事情を説明した。
それは、つい数刻前の出来事だった。
南西の方角に『幻の城』が出現し、それを見た町の人々に突如にして異変が起きた。
いきなり町の人々が「ダオス…」「ダオス…」とつぶやきを上げながら、我を忘れたかのように、『幻の城』に向かってしまったというのだ。
「私は、弟メンデルの救出をダオスに頼んでいたが――実はあいつのことは、まるで信じていなかった。『試練の塔』に出かけたダオスが本性を現したところで、弟のメンデルが片づければ良いと考えていたのだ」

「に、兄さん……」

「我が弟に、魔物を成敗する『名誉』を譲ったこの兄心——わかってくれるな、メンデル？」

「う、うん……」

仕方なくメンデルが答える

レオニスは弟の素直な態度に満足すると、クレスたちに振り返った。

「フフッ……これでわかったかね、諸君。私だけ、ダオスの術にかからなかったのは——私があいつを倒そうと、ひそかに考えていたからだ。そんな危険な奴を、わざわざ城に招こうなどとはダオスも思うまい！」

「……」

偶然に得したことを胸を張って自慢するレオニスに、フリオはため息をつく。

酒樽の中に隠れていたくせに、何がダオスさんを倒そうとしていた、だ——。

「あの、それで……その『幻の城』というのは……」

ミントがめげずにレオニスに訊いた。

「ん？　何だ、まだ見てないというのかね？」

「はい」

「うむ、きれいなお嬢さんに教えるとは光栄なことだな——」

「いいから、レオニス！　どこにそんな城が見えるって言うんだよ？」

フリオが遠くをきょろきょろ見回しながら、レオニスをせかした。
「フハハハ、ばか者！　どこを見ておる！　上だ、上！　地上ではなく雲の上だ！」
「えっ？」
レオニスが指さした南西の空を、一同が見上げた。
それは、一塊（ひとかたまり）になった暗雲の中に隠れるようにして存在していた。球体を半分に切ったような半円の土台の上に、いくつかの尖塔（せんとう）が立っている。遠くから見ると小さいように見えるが、実際にはこのレグニアの町よりも、いくぶん大きな城なのであろう。
「どこかで、見たことのある城だな……」
見上げていたクラースがつぶやいた。
「ええ、あの形……忘れはしません……」
隣でミントがうなずく。勇者六人にとって、記憶から消せない城――〝あの城〟と、同じ形をしている……。
みんなの中に、戦慄（せんりつ）がよみがえる。誰もそれを口にしなかった中で、あっけなくアーチェが言った。
「あれって――ダオスの城じゃん！」
そう、暗雲の中の『幻の城』は、クレスたちの世界にも出現した〝ダオスの城〟だったのだ。

第三章　ダオスの城

しばらくして、レオニス以外にも町に残っていた人を発見することができた。

――ステビア服飾店。

フリオたちが〝なりきり〟の服を作ってもらっている店だ。

ここでは服を買ったり、売ったり、また目的の服に関連した道具などを納めることで、特殊（とくしゅ）なコスチュームもオーダーメイドできる。

その店主のステビアは、町の騒ぎも知らず、のんきに営業していたのである。

「いや〜、びっくりしたです〜。町のみなさん、気がつくと誰もいらっしゃらないです〜」

ステビアは、相変わらず緊張感のない声で言った。

色とりどりの生地（きじ）が棚（たな）の上にあふれ、制作途中のコスチュームがマネキンに着せられて奥に並んでいる。工房と販売が一体となった店のカウンターに立つステビアは、牛乳瓶（びん）の底みたいに分厚いレンズの丸い眼鏡（めがね）をかけ、黒髪のおさげに緑の大きなリボンをしている。

年齢不詳（ふしょう）。もちろんフリオたちよりは年上だろうけど、ときどき年の差を忘れてしまうほど

フレンドリーで親しみやすい女性店主だった。
「でもさ、レオニスはダオスさんのことを信じていなかったからわかるけど、ステビアさんはどうして助かったんだ？」
店を訪れていたフリオは、素朴(そぼく)な疑問をぶつけた。
「それはですね〜、たぶん私が寝てたからですよ〜」
「寝てた？　昼間っから？」
「はい〜、服を作るのに熱中しすぎて、よく徹夜をしてしまうんですね〜。ほら言うじゃないですか、母さんが夜なべをして〜って……アレと似たようなものじゃないかと」
「に、似てるのか？」
「さあ……」
フリオに聞かれたキャロは、首をかしげる。
「でも、それよりステビアさんが無事だったのは、よかったですよ！」
キャロが笑顔で言う。
「あ、うん！　そうだな！　ほんと助かったよ」
「助かった？」
きょとんとしたステビアに、フリオはちょっぴり真剣な顔になってうなずいた。
「実は……大至急、作ってもらいたい服があるんだ」

そう言って、フリオは懐（ふところ）から腕輪をひとつ取り出す。
黄金に輝く〝ダオスの腕輪〟である。
「ふむふむ～、これはまた……かな～り美しい腕輪ですねえ～。これを付けていた人は、さぞかし位（くらい）の高いお方だったんじゃないですか――」
フリオから腕輪を受け取ったステビアは珍（めずら）しそうに掲（かか）げて、いろんな角度から眺（なが）める。
「それは、ダオスさんから受け取ったもんなんだ」
「ダオスさん？」
「えっ、知らないの？　あれ、ステビアさんは会ってなかったっけ？」
「う～ん……私は、店の外にはあまり出ませんからね～」
ステビアは平然と言った。店の中に、こもりっきりで外に出ないのは体にも良くないのにと思ったが、今は彼女に頑張ってもらわないといけない。フリオはその言葉を呑（の）み込んで頼んだ。
「頼むよ、それですぐに〝ダオスの服〟を作って欲しいんだ――」
「ダオスの服……」
「ああ、連れさられたみんなを助けるためには、その服がどうしても必要なんだ！」
フリオは力強く訴（うった）えていた。

＊＊＊

ステビア服飾店を出てから、フリオはふと息をついた。
「……どうしたの？」
先を歩いていたキャロが立ち止まって、フリオのほうに振り返る。
立ち止まったフリオは、キャロに訊ねた。
「なあ……いいんだよな、これで？」
「……………」
キャロは、ちょっと答えに困ったような顔になる。
「仕方ないよな……できれば、そうしたくないと思ってても、やらなきゃいけないときだってあるんだから」
まるで自分を納得させようとして、フリオは独り言をつぶやく。
「どうしたのよ、いきなり……らしくないわよ、フリオが悩むのって。あんたがそんな顔してたら、明日は大嵐になるかもね？」
キャロはいつものようにからかった。しかし、フリオはいつものようには乗って来なかった。
「みんなを、助けるためだもんな……」

「……」

やりきれないようなフリオの顔を見て、キャロも黙り込んだ。

やがて、ふたりして空を見上げる。南西の方角には、今もあの〝ダオスの城〟が浮かんでいる。あそこに町の人々は連れさられてしまった。

人の心を集めたいという、サナトスのわがままのために――。サナトスが人の心を集めて、どうするのかはわからない。しかし、その目的がなんであれ、放っておくわけにはいかない。

クレスたちは、ダオスと戦うことよりも、まず先に町の人たちの救出を優先して、あの城の中へと向かっていた。

フリオたちには、ダオスと戦う『覚悟を決めてから来い』と言い残していった。だからフリオは〝ダオスの服〟を作る決意をした。それが完成したら、クレスたちのあとを追って、ダオスの城に乗り込むつもりだった。そして、そこで――。

「やっぱり、戦わなくっちゃいけないんだよな……」

「……」

その一言を聞いて、キャロも辛（つら）そうになる。

できれば、そのことは考えないようにしていた。何が正しくて何が正しくないのか。考えれば考えるほど、わからなくなっていく。だから運命というものに身をまかせようと思っていた。フリオが行くのなら、自分も一緒についていく。それでいいと思っていた。

「フリオ……」
　キャロは、力なくたたずんで空を見上げるフリオに声をかけた。
「ダオスさんから頼まれたんでしょ、フリオは？」
「……」
「だったらそうするのが、ダオスさんのためにもなるんじゃない？」
　同じ孤児院で暮らしてきたフリオだからこそ、いいところも悪いところも全部わかっている。それだけにフリオひとりに辛い思いはさせたくないと思っていた。一緒に背負いたいと思っていた。フリオがダオスを倒しに行くのなら自分も一緒だ。一緒になって苦しみ、そして戦う。
「……キャロ」
　それが幼いころからの友情の証。
　さらに、ふたりで〝なりきり師〟に選ばれたことの証明だと思うから――。
「うん？」
「本当にそうなのかな……」
「何が？」
「ダオスさん……本当にそれで、感謝するのかな」
「……」

わからない、と言いかけてキャロは言葉を呑み込んだ。

答えを求めている今のフリオにとって『わからない』と答えるのは、冷たく突き放したような態度になりかねないと思ったからだ。しかしフリオは自分から言った。

「俺、わかんないよ……自分を倒した相手に感謝するのって、あり得るのか？」

そんな疑問をつぶやいたときだった。

「あり得る、と思います――」

ふいに、後ろから女の子の声がした。

「えっ」

フリオが驚いて振り返ると、背後に人の姿はなかった。ステビア服飾店の閉まった入り口のドアが見えるだけだ。きょろきょろしていると、

「ここです――」

その声につられて、フリオとキャロは店の屋根を見上げる。そこに赤い忍者の服をまとったすずが立っていた。

「高いところからのご挨拶(あいさつ)、失礼いたしました――」

すずはそう言って、ステビア服飾店の屋根の上から飛び下りる。そして、フリオたちのすぐ前に、空中回転して降り立った。

「す、すずちゃん、クレスさんたちと一緒に〝ダオス城〟へ行ったんじゃなかったの？」

びっくりした顔でキャロが訊ねる。

着地したすずはひざまずき、かしこまったまま返事する。

「はい。そのはずでありましたが、クレスさんたちがおふたりのことをご心配になり、私にそばについているように、と言われたのです」

「ク、クレスさんたちが？」

「はい。もしサナトスが、ふいにおふたりを狙ったりするようなことがあれば、誰かが助太刀をしなくてはなりません。それで、くじ引きですずが選ばれました。つきましては——」

丁寧ながら早口でまくしたてるすずに、とうとうキャロはたまらなくなってしまった。

「あ、あの、すずちゃん？」

「はい」

「私たちに、そんなかしこまらなくてもいいのよ——」

キャロは冷や汗をかきそうな顔で、すずに言った。横からフリオもうなずく。

「そうだよ。もっと普通に行こうぜ」

「普通に、ですか——」

「ああ、そういうポーズのままで挨拶されると、何だか堅苦しくて喋りづらいぜ」

「……そうでしたか。それは申し訳ありませんでした。私は幼いころから里でこうするようにしつけられましたので、つい癖で——では、失礼して」

ひざまずき、かしこまっていたすずが立ち上がる。まだ十歳くらいの、あどけない顔がフリオたちを見上げる。
「ところで――」
フリオが思い出したように切り出す。
「さっきの話、詳しく教えてくれよ。確か、あり得ると思う、って言ってたよな？　どういうことなんだ」
気になって話を引き戻した。すずはうなずき返すと、努めて普通に話そうと努力した。
「はい……実は、私にも……今のおふたりと、似たような試練があったのです――」
「似たような？」
「試練……？」
フリオとキャロがそろってつぶやき、顔を見合わせる。そしてキャロがすずに視線を戻して訊ねた。
「それって、もしかしてすずちゃんの親しい人が、敵になったということなの？」
考えられることはそれだった。すずは、神妙な顔になって答えた。
「はい。私の親がそうでした――」
「！」
フリオとキャロは言葉を詰まらせる。すずは構わず続けた。

「私の親も忍者でした。でもあの当時、ダオスの配下の者に洗脳され、以前の父上と母上ではなくなっていたのです……」
「そ、それで？」
フリオは、話に引き込まれるような顔で訊ね返す。
「それで……私は、親を斬りました……」
「えっ！」
「お、親を……」
フリオもキャロも、とたんに信じられない顔になった。こんな年端もいかない子が、忍者の世界だとはいえ、自分の両親を斬ったというのだろうか——。
すずはふたりから顔をそらし、ステビア服飾店の前に咲いた花を見つめていた。その幼さの残る可憐な横顔を見ていると、とてもそんな過酷な世界に生きてきた女の子には見えなかった。
「あ、あの……」
戸惑いながらも、キャロは声をかけた。すずが向き直る。
「なんでしょう？」
「すずちゃんは……それで、よかったの？」
「……」

ちょっとだけ、辛い表情がすずに浮かび上がった。その瞬間、キャロは残酷な質問をしてしまったと気づいて反省した。
「ご、ごめんなさい……」
「いえ、いいんです。今、なんて答えれば良いかと迷っただけですから……気になさらないでください」
すずは、深刻にならないよう気を遣った。彼女は、同情してもらいたくて喋っているのではない。フリオたちに何か大事なことを懸命に伝えようとしているのだ。
「正直いうと、忍びの掟に従えば——それは是とするものと、以前の私でしたら、ここできっぱり答えられたのでしょう……」
「………」
だが重い話だった。自分たちの知らない別の世界で、すずは忍者という過酷な世界に生き、そしてダオスは魔人として君臨し、その勢力のいくつかが争い続ける中で、すずの両親は犠牲となったのだ。実の娘に斬られて最期を遂げる、という悲惨な結果で——。
しかし気になる。
すずはその小さな体で、それだけの試練を背負ったというのか。もしそうだとしたら、この落ちつき払った様子は何なのだろうか。まるで両親を斬ったことに後悔があるというよりも、親孝行をしたと言いたげな満足感のある顔つきだった。

そんな中で、再びすずが口を開く。
「さっき、私がおふたりと似たような試練、と申し上げたのは、ただひとつだけ気になることがあったからです――」
「気になること？」
すずは、しっかりとうなずいた。
「はい。あのとき、父上と母上は……この私に感謝していました」
「！」
「両親が虫の息のとき、最期に礼を告げられました……自分たちが、ダオスに屈してしまった心の弱さを、娘の私に継いでもらいたくなかった、と……それを願っていたから、己の心の弱さを断って、よくぞ我らを断ってくれた……と」
「……」
「こんなこと言うのは忍びらしくない、ですね……」
しかしすずは、呆然とするふたりに続けた。
「ですが、私は思うのです。斬られた相手に感謝することは、場合によってはあり得るのではないか、と……」
そしてすずは真顔になって、呆然とするフリオたちに言った。
「今、ダオスと向き合っているのが、おふたりの〝さだめ〟とするならば――」

「さ、さだめ……」

「フリオさん、キャロさん、逃げないでください。人は生きているうちに、かならず何度か、そのような〝さだめのとき〟がくるものです。そして選ばれた者の運命は、かように厳しくもあるのです」

「……」

圧倒(あっとう)されて言葉が出なかった。自分たちと似た試練。それをすずは、すでに乗り越えてきたのだ――。

＊＊＊

そして、いよいよその日はやってきた。覚悟を決めた『決戦の日』である。

暗雲をまとい、ダオスの城は流されることなく南西の空に存在している。その真下の大地にたどり着くと、自然と上空の城の中に吸い込まれるという……。

今、その場所に向かいつつある、三人の勇者がいた。

完成したばかりの『ダオスの服』をまとったフリオ、そして調理器具のおたまを手にして、エプロンをつけたキャロ。さらに赤い忍者の装いをしたすずであった。

なぜかキャロだけ、普通の女の子っぽい格好(かっこう)をしていた。

それは、ステビア服飾店にダオスの服を受け取りに行ったときのことだった。
ステビアが「フリオさんだけではかわいそうですから、この服をキャロさんに」と、渡してきたのである——。
「……この服を、私に？」
「ええ、女神エイダさまからの贈り物ですよ～」
「エイダさまから！」
「ど、どうやって——ステビアさんは、女神さまから受け取ってきたの⁉」
「えっ？」
フリオの急なツッコミに、ステビアはやや慌てた様子であったが、
「実は、先日……こっそりいらしたんですよ～」
と、フリオとキャロのふたりしか店にないのに、ステビアはささやくように答えた。
「えっ⁉　女神さまって、人間の町に入って来れるの？」
「あ、いや……だから内緒ですよ、内緒！」
「そうだったんだ……知らなかった。女神さまは『大樹の神殿』の中から外に出られないんだって、ずっと思ってたよ」
「あ、あのですね、あんまり深く追求すると……こういう素晴らしい贈り物とかって、今後はもらえなくなっちゃいますよ？」

「そ、そうなの？」
「はい～。女神さまとはいえ、プライベートというものはありますから～。もしもバレたら、さぞかし気分を害されるでしょうね～」
「……な、なるほど……そうか……」
なんだかよくわからないが、フリオは納得してしまった。そうやって、すっかりステビアの忠告にしたがおうとしたが、やはり気になる。
「……でもさ、これって……」
と、キャロの手にする赤いワンピースとエプロン、それになぜか調理道具のおたまがセットになった服を眺めて首をかしげる。
「どこから見ても、普通の女の子の服にしか見えないんだけど？」
すると、そのときのステビアは、牛乳瓶の底のようなレンズの丸眼鏡を指でかるく押し上げ、まるで学者になったみたいな熱っぽい口調で語りだした。
「これは見た目と違い、非常に『戦闘能力』の高い服なのです——噂では、この服を着たものは、超無敵になるとまで言われています！」
「ちょ、超無敵!?」
キャロが目を丸くさせる。
「そうなんです～。女神エイダさまのお話によりますと、この服は女神さまがこの世界に召喚

した、勇者スタンという剣士から『ぜひ使ってくれ』と渡された、あるものから造られたのですよ～」
「あるものって？」
フリオが何気に聞く。
「銀のおた……あっ、いえ！　何でもないです！」
「……………」
怪しい……。女神エイダが町にこっそりやって来たという話も、それから、服作りの名人であるステビアを差しおいて、なんで女神エイダがスタンという剣士から渡された『品』で服を作ったのかも、よくわからない。謎が謎を呼ぶ話である……。
しかし、キャロはその服をとても気に入ったらしい。ステビアに感謝すると、ダオスの城に突入するときは、その服にしようとあっさり決めてしまっていたのだ。

「……いよいよだね」
エプロン付きの服を着て、おたまを手にしたキャロが空を見上げながら言った。
隣で、黒ずくめの服にマントを羽織ったフリオもうなずく。
「俺たちは、みんなを助けに来た――町の人たちを、ダオスさんを！」
天空に浮かぶ巨大な城の底面を見上げ、フリオは自らを奮い立たせるように叫ぶ。

その圧倒的存在感に、体は自然と震えていた。ついに突入のときだ。震えるような緊張感は、そう簡単には消えてくれない。すると、

「……あの『大樹の神殿』から、すべてが始まったんだよね……アナスイの花を咲かせてくださいって、女神さまにお祈(いの)りしに行った、あの日から……」

　ふいに緊張感を払うように、キャロはおだやかな表情で話しかけてきた。ダオス城を見上げるフリオも、次第に思い出すような顔になってうなずいた。

「ああ、あそこで俺たちは女神に出会って、そして〝なりきり師〟に選ばれた……」

「うん……そしてクレスさん、すずちゃんたちに会えた……」

　そう言って、キャロは隣に立つすずに目を向けた。普段はあまり喋らず、感情を表に出そうとしないすずも、ふたりに同意するかのようにうなずき返す。

「そして、ダオスさんとも会えた――」

　フリオが言った。

「魔人だったみたいだけど、本当は悪い人じゃないって――俺は信じたい！」

「私も！」

　キャロも大きな声で続く。

「そんなダオスさんを、サナトスに操(あやつ)られたままなんかにさせられない！」

「私も、ダオスさんが二度と利用されないよう、安心できる眠りにつかせてあげたい――」

三人の頭上には、巨大なダオス城が静かに浮かんでいる。丸い鉄の塊のようなそれは、勇者の到着を待ち受けているかのようだ。

「行こう、キャロ！」

「うん！」

キャロが力強い笑みを輝かせる。

やがてフリオとキャロは握手するように手をつないだ。そしてキャロは、隣のすずとも手をつないだ。三人が並び、ダオス城の真下で目を閉じて祈りだす。

今すぐダオス城の中に向かいたい――と。

しばらくして、静かに浮かぶ巨大な城の球体状の底面に、小さな穴が開き、そこから吸引の力が一筋の光となって地上に降り注ぐ。それは三人を覆い尽くすように照らしたあと、彼らの体をふわりと上昇させていった。

＊　＊　＊

ダオスの居城、それは魔人の支配する浮遊都市。

おそらく七百を数えるであろう部屋のひとつに、フリオたちは降り立った。鉄の冷たい壁が四方を覆い、天井も高い。どこからともなく機械の作動する重厚な音が、絶え間なくグォン、

グォンと響いてくる。大地に足をつけて暮らしているフリオたちには、まったく未知の世界の光景と言ってよかった。
「ここが、ダオス城の中……」
見渡すと、その床の一角は完全に透明で真下の景色が丸見えだった。レグニアの町や『狩人(かりゅうど)の森』がそこから小さく見えている。うかつに近づくと、落ちるんじゃないかとさえ思った。
「フ、フリオ……」
「大丈夫だ。透明じゃない床を歩こう」
フリオは、キャロとすずを連れて、鉄の床の上を歩いた。ふと見上げると、天井の一部分も透明で、そこから星々の並ぶ夜空が眺められた。今はまだ昼間だというのに、なぜ星空が見えるのか、フリオは理解に苦しんだ。
しかし、この巨大な鉄の塊が空に浮かんでることさえ、不思議なことなのだ。ひょっとしたらこの城は大きさなどに関係なく、どこにでも行けるのかもしれない。それこそ、満点の星空の世界にだって、簡単に旅することができるのかもしれない。
そんなことを考えながらフリオたちは、鉄の壁に囲まれた部屋の外に伸びる通路へと出た。
その通路は長く、どこまでも伸びていた。赤や黄色のラインが壁とともに走り、天井の細長い窓が光って通路を明るく照らしている。
「よし、行こう」

深呼吸をしたのち、フリオは先頭をきって歩きだす。
ダオス城の内部は広大な迷宮だった。あまたの分岐を探り、あまたの行き止まりに阻まれながら、フリオたちは戻ったり進んだりを繰り返す。
「何だか、同じところをぐるぐる回ってるみたいね……これは、もしかして魔物の幻術なのかしら？」
キャロの不安そうな声に、
「くそっ、どこだ！　どこにいるんだ、みんなは!?」
フリオはあせった。幾何学的模様の装飾が施された、回廊の先に向かって叫んでいた。
すずは無言で歩き続けていた。彼女はさっきから疑っていた。
鍵のかかった扉と、勝手に開く扉の違いがある。罠かもしれない。フリオたちは気がついていない様子だが、何者かがわざと導いているような気もする。そう疑ったすずは、鉄の扉に耳を当ててたり、床を叩いてみたりして、罠の仕掛けが隠されてないか確かめてみたが、そのような気配は何度確認しても感じられなかった。
三人で、再び通路を歩み、角を曲がったときだった。たちまち奇怪な敵が襲ってきた。
空中を泳ぐ巨大魚の群れだ。彼らは水中にいるかのように大きな尾鰭を振って、フリオたちに向かってくる。
――やはり罠か！

すずは忍刀を抜いて、フリオたちを守るように前に躍り出た。その直後、先頭を泳いでいた巨大魚と接触した。すぐさま戦闘状態に突入する。
「行くぜ、キャロ！　すずだけに、まかせてられないぞっ！」
「わかってるわ、えーいっ！」
続いて、フリオとキャロも巨大魚との戦いに参加してくる。
「……」
すずは予想外だった。ダオスの服を着たフリオ。それと、以前に――ユークリッドの闘技場あたりで見かけたような記憶のある、めちゃくちゃに強い女の子と一緒の格好をしたキャロ。そのふたりは、すずが助太刀するまでもないほどに強かったのだ。
勝負はあっけなくついていた。巨大魚の群れは回廊の床に落ち、その骸を散乱させている。
「キャロ……」
戦いを終えたフリオが、真顔で訊いた。
「いつからお前、そんなに強くなったんだ……？」
服の汚れを払い落としていたキャロが顔を上げて、不思議そうな表情をする。
「フリオったら……ステビアさんの話を覚えてないの？」
「へ？　何だっけ？」
「もう、この服を着たら〝超無敵〟になるって話よ！」

「あ……」
そうだった、すっかり忘れていた。
キャロの見た目は、まるで普通の女の子のエプロンをしただけの格好なのに、ダオスの服に引けをとらないほどに強かった。いや、むちゃくちゃに強かった。いったいどこからそんな力が出てくるのか——フリオには、まったくもって謎だった。
と、そのときだった。
回廊の壁にしつらえられた重々しい扉のひとつが、シュッと勝手に開いた。それも〝お前たちのめざす先は、こちらのほうだ〟と言わんばかりに——。

＊　＊　＊

いくつかの扉を抜けると、驚いたことに、床一面に砂が敷かれた部屋に入った。
そこは部屋というより『外に出た』というほうが、正しい表現のような空間だった。薄暗い夜の荒野。夜空に星が輝き、地平線まで見えているのだ。
「な、なんだ……これは？」
思わずフリオは声を上げた。おそるおそる、鉄の床からその地面へと足を踏み入れ、あたりの様子を探った。

静かな空間だった。しかし現実の外の世界というより、夢の中といった、どこかウソくさい風景であった。夜なのに、灯り（あか）がなくても肉眼でよく見える。だだっ広い荒野。草木はなく、風もなく、山もない。地平線の彼方（かなた）には沈んだ太陽の光がわずかに残って、大地と空の境界線をうっすらと浮かび上がらせるように照らしている。現実にはあり得ない光景だった。
「外に出たなんて、違うよね？　だってこの城、空に浮かんでいたんだし……」
キャロが入り口の手前で、踏みとどまっておびえている。
「大丈夫です。おそらく、ダオスの幻術か何かでしょう……」
すずは安心させるかのようにそう言って、フリオに続いて大地らしき砂の床に足を踏み入れる。それを見て、ごくっと息を呑んだキャロも覚悟を決め、その世界の中に入ってくる。
と同時に、開いたままの扉がいきなり、シュッと閉じた。
「!?」
フリオが振り返ると、扉は消えて、夜の荒野の世界に溶け込んでしまった。
「なっ!?　まさか、閉じ込められたのか――」
フリオがそう叫んだときである。
《アハハハ！　来た来た、ボクの遊び道具がやってきてくれたよ！》
夜の荒野に、少年の声が響く。
「サナトス！」

フリオは声の主を探そうとした。あいつがいる！　近くにいる。
「どこだ！　姿を見せやがれ！」
夜の荒野に、フリオの叫びが反響していく。それは不自然な響き方だった。
「ここだよ――」
ふいに、サナトスの声がはっきり聞こえた。
「！」
振り返ると、夜の荒野の先のほうに――あの六角柱となった〝黒い水晶〟と、ふたりの人影が見えた。黒水晶の前に立つふたり。そのひとりは、黒ずくめにマントを着たダオス。さらに悪魔のような真っ白い顔に、体にぴったり密着した赤と黒のスーツをまとったサナトスだ。
「ん……なんだ、その服は？」
腕を組んでフリオたちを眺めるサナトスは、いきなり眉を寄せた。ダオスの服とエプロン姿のふたりの格好に、一瞬驚いたような顔を見せたが、
「女神どもめ！　余計なお世話をしてくれたようだね――」
と、迷惑そうに言った。
「まあいいや。どうせ、お前たちには使いこなせないだろうし――それより、ここまでよく来てくれたね？」
気を取り直し、サナトスはご機嫌な顔で言った。

「君たちの勇気を褒めたたえて、いいものを見せてあげるよ――」
パチン！
サナトスが指を鳴らした。すると、地平線が見渡せる大地に、いきなりたくさんの人の姿が現れた。
「!!」
フリオもキャロも、その光景に目を見開いた。さらに後ろで、すずが戦慄の声をもらす。
「そ、そんな……」
突如にして出現した人々は、動かぬ石像と化していた。
「ロ、ローズさん、ルッツ、ガメル……」
「……エ、エレイン、長老さま……ミル姉さん、ルシア、ジャン……」
ふたりが声を震わせる。レグニアの町の人たちがそこに並んでいる。
「みんな、どうしたんだ!?」
「う、動かない……石になっちゃってる！」
石像の集団に駆け寄り、その異常な状態にふたりは右往左往する。
「アハハハ！　みんなダオスに心を奪われちゃった人々だよ。ボクの狙いはね、ダオスのことを好きになった人をみんな呼び寄せて、その心を独り占めすることだったんだ。何しろダオスは故郷の星で、多くの民に愛された存在だからね。それと同じようにみんな、ダオスが持って

る魅力に、あっさり負けちゃったってワケだよ！　アハハハハハッ！」
勝ち誇ったようなサナトスの笑い声が響く。
フリオとキャロは、呆然として石像の間をさまよう。そして、すずが立ち尽くす前で、信じられないものを目撃した。
「こ、これは……」
「クレスさん……」
すずの後ろで、フリオとキャロも息を呑んで立ち尽くす。それは、クレスたち勇者五人の変わり果てた姿だったのだ。
魔術書を片手に、召喚魔法を唱え続ける格好で石になったクラース。
剣を構え、大地を蹴ろうとしている姿勢のクレス。
弓を構えたチェスター。
ホウキにまたがった格好のまま、地面に横倒しになっているアーチェ。
両手を握り、祈るようなポーズのミント。
——まるで戦ってる最中に、みんな石にされたかのようだった。
「よくも、クレスたちまで！」
怒りの表情でフリオは振り返り、サナトスをにらみつける。
「アハハハ！　そいつら、何だかんだ言ってダオスに心を奪われてたからね！　あっけなく石

になってくれたよ。フフフ……安心しなよ、お前たちもすぐに仲間入りだ！」
「ならない！　俺たちは覚悟を決めてきた！」
　マントをひるがえし、フリオは身構える。
「さあ、そいつはどうかな？　ダオス！　君のお友達が遊びにきたよ！」
と、サナトスは隣に立つダオスに話しかける。ダオスは『試練の塔』のときと同じく、虚ろな表情でたたずんだままである。
「ダ、ダオスさん……」
　フリオの怒りが緩む。
「アハハハ！　どうしちゃったの？　もう体が震えてるみたいだけど？　覚悟を決めてきたんじゃないのかなァ？」
「うるせえ！　お前さえ倒せば、ダオスさんも助かるんだ！」
　再び怒りを滾らせた。フリオはサナトスめがけて魔法を使った。それは、ダオスの服がもたらす魔法である。
「テトラスペル！」
　闇夜を切り裂いて、四大魔法の力が結集される。火球のファイアボールが、氷の矢のアイスニードルが、稲妻のライトニングが、大地を突き破る岩槍のグレイブが——一気にサナトスを襲う！

しかし、不発に終わった。サナトスは平然と腕を組み、無傷のままで立っていたのである。
「アハハハ、だから言ったろ？　ボクは、別の次元から君たちのことを見てるって。ダオス、この三人もクレスたちのときみたいに、石にしちゃいな！」
サナトスが、ダオスに命じた。まるで操り人形のごとく、ダオスがゆっくりと歩みだす。
「！」
身構えるフリオ――その背後に、空間を破って、魔物の集団が出現した。とっさにクレスの石像前で立ち尽くしていたすずが踵を返し、フリオの背後に駆け寄ってくる。
「雑魚どもは、お任せください――」
そう言って、すずは魔物の群れに向かっていった。
「キャロ！　すずを助けに行け！」
「フリオ!?」
「ここは、俺が何とかする！　とにかく、まわりの魔物を先に片づけちゃってくれ！」
「うん、わかった！」
おたまを持ったエプロン姿のキャロが、すずのあとを追いかける。
フリオは、あらためて前方に視線を戻す。サナトスの隣から、ダオスがこちらに歩み寄ってくる。いよいよ一対一の勝負が始まる。フリオは息を呑んだ。
ダオスの服を着ていることで、おそらく能力は互角だ。――となると、あとは精神力の問題

になる。どちらが隙を見せずに戦えるか。おそらく勝敗はそこで決まるだろう。そのためには本気になるしかない。心の迷いも、ためらいも、一切消し去らなくてはならない。
（ダオスさん……俺に、俺に力を貸してくれ！）
フリオは心の中でつぶやき、そして腕輪を手で覆った。
それはダオスの心が託したもの。ダオスの腕輪があったおかげで、この服も作ることができたのである。いわばダオスの心を、フリオは身にまとっているも当然なのだ。
その力、その精神力、それを身にまといたかった。人の常識を超えるような、生きとし生けるものの生死を操れるような、超然とした神のごとき次元に、フリオはたどり着きたいと強く願った。すると、そのときである。
《貴様が、私の力を使うというのか――？》
（えっ？）
服が喋った？　いきなり、もうひとりの〝ダオスの声〟が脳裏に聞こえてきたのだ。
願いが通じたのか？
ダオスの服とともに、フリオは心までも身にまとえたというのか。
《我が力を利用する、不届き者め――貴様が、私を倒すのではない。私が自ら決着をつけるのだ！》
荒々しくも凜と張りつめた声が、フリオの頭の中に響く。

（決着って……？）
突然のことに、フリオは戸惑いをあらわにする。しかし、そのダオスの声は、自分が知らぬ間に起こった出来事に対する〝怒り〟を伝えてきた。
《貴様の目の前にいるのが、私の分身であるのならば——私自身がケリをつけるということだ。よって、今から貴様の体を——私が借りるぞ！》
どきりとした。
ダオスの意思が、そう伝えてきた。あきらかに要求であり、命令だった。その瞬間、フリオの体は宙を跳んだ。
「うわぁーっ！」
目前のダオスめがけて飛んでいく。いや、これは襲いかかっているのだ。
前方に身構えたダオスはいきなり火球を放った。フリオの身の丈を超えるような、巨大な炎の塊が迫ってくる。だが、フリオのまとう服は、力強くそれを防ぎ、後方に受け流していく。
そして火球の中を突き破って、外に抜け出たかと思うと、
「メテオスォーム！」
フリオの唇が、勝手に術の名を喋った。動かされている。自分は操られている！　強力な、もうひとりのダオスの意思によって！
星の闇を切り裂いて、隕石がダオスめがけて舞い落ちる。防ぐ術を忘れてしまっているの

か、サナトスに操られたダオスの体が吹っ飛ばされる。起き上がろうとしたところに、次の隕石が降り注ぐ。

「ぐおおおぉっ！」

ダオスの絶叫が響いた。

(──ダオスさん！)

フリオは、心の中で謝(あやま)った。

〝いいぞ、フリオ……強くなったな、これで私は眠りにつける……この眠りとともにお前たちと過ごした私も消える……〟

フリオの知る、ダオスの声が返ってきた。

〝楽しかったぞ、お前たちと『狩人の森』にぬいぐるみを探しに行ったこと──できれば私も、こんな形でお前たちと出会いたくはなかった。もっと別の、普通の人間としてお前たちの世界で生きてみたかった……〟

途方(とほう)もなく虚(うつ)ろな、途方もなく暗い世界に、たったひとり……彼がいる。そこから〝心〟を伝えてきている。

フリオはマントを広げ、闇夜を舞う。

(やめろ、やめてくれ！)

フリオの片手が、夜空に振り上げられる。

「タイダルウェーブ！」

またもや唇が操られた。倒したくないのに、殺したくないのに——服に宿ったもうひとりのダオスの心は、容赦なく攻撃を浴びせていく。

轟音とともに大きな津波が出現したかと思うと、地上のダオスを呑み込むように渦を巻く。

彼は、またもや防ぐこともせずに全身で、その荒れ狂う津波の渦を受け止める。そして絶叫が、再び耳に届いた。

〝唯一の心残りと言えば、それだけだ……それだけ………〟

ひどく孤独で、ひどく不安だった。

だけれども。それも、もうすぐ終わる。

（も、もうやめろ、やめてくれ！）

フリオは心の中で、身にまとった魔人の服に対して叫んでいた。しかし、その衣装に宿った冷徹な主——〝魔人ダオス〟は、それを突っぱねる。

《貴様に、私を止める権利などはない——私は、別の世界で、もうひとりの自分が惨めな姿をさらすことが、我慢ならぬのだ！》

魔人ダオスの意思は、この世界で生まれた〝もうひとりのダオス〟の存在そのものを、否定していた。まるで認めていなかった。そのことに、フリオの心に怒りがめばえる。弁護したい意志が生まれる。

（惨めなもんか、ダオスさんは……ダオスさんは、みんなと仲良くしたかっただけだ！）
心の中で、思いっきり言い返していた。すると、
《戯言を……》
魔人ダオスの意思は笑った。嘲りの笑いだった。
（何を！　あんただって、故郷の星の人たちを救うために、魔人になったんじゃないのか⁉
本当はそこまでして、戦いたくはなかったんだろ⁉）
あまりにも巨大な意思に、ちっぽけな意思が刃向かう。
心の隅に恐れがかすめ、自分がまとう服にすべてを奪われるのではないかという〝恐怖〟が込み上げた。やがて、哀れみと怒りの錯綜する魔人の声が、反撃を開始した。
《ならば問う！　貴様には、守るべきものがあるのか⁉》
（えっ……）
《答えてみろ、貴様が命に代えても守りたいものとは、なんだ？》
（……守りたいもの）
魔人ダオスからの問いかけに、フリオの心は揺らいだ。
そのとき戦慄していた。心を読まれているのだ。嘘などつけない。言葉で応えるのではなく心で応えなくてはならないのだ。もちろん言い逃れなどはできない。嘘のつけない恐怖。それはかつて体験したことのない恐怖であった。

《答えられぬか。幼いな……それがないのなら、見つけてみろ。そのときにわかるはずだ》
魔人ダオスは寂しげに伝える。
その瞬間に、フリオの心は知った。心を読まれたときに、相手の心ともつながった。その心の扉が開いた瞬間、向こう側も見渡すことができたのだ。
（あ、あんたは……自分を守るために……）
返事はなかった。
しかし、フリオは感じ取ることができた。魔人ダオスの本心を——。
ダオスは、自分の『誇り』を守るために、自分の〝分身〟と戦っているのか——⁉
確信に近かった。
フリオが見たものは、闇の彼方に浮かび上がった、ひとつの光だった。
それは、彼を支えるものであった。彼は己の目的を達成させるために、他の命を奪うこともいとわずに、そして罪の意識を振り払おうとし、その光を唯一の支えとしたのだ。それは自分を厳しく見つめる、もうひとりの自分——ダオスの『誇り』なのだ。
〝フリオ……私も、その男の声に同じ考えだ——〟
魔人ダオスの服からの攻撃を受け続ける、もうひとりの〝彼〟が応えた。
（ダ、ダオスさん……）
フリオは痛ましく眼下のダオスを見つめた。容赦なく降り注ぐ魔法の嵐に耐えながら、彼は

懸命に伝えてくる。フリオと魔人ダオスの、心の会話を聞いていたものとして――。
〝私はその彼であって、彼ではない……しかし、この世界でよみがえってしまった以上、別の記憶が生まれ、違う人生が始まっている。サナトスに操られてしまうような別の人生が……〟
（ダ、ダオスさん――）
〝私の原点である《ダオス》というものが、私の人生によって、その誇りを傷つけるというのなら――私も、その考えに賛成だ。わずかだが、この世界で生きた『私』という存在が、サナトスに操られた私の人生そのものを否定する、望んでいないと言っている……だからフリオ、とどめを刺せ――私は今から、全身全霊をかけてサナトスからの命令を遮断する。お前への攻撃を止めてみせる、その隙を狙うんだ！〟
彼は、あくまでも友人の手によって散ることを望んでいた。
フリオのまとう服から光が放たれる。その光は、地上でよろめくダオスの頭上で爆発した。
（お、俺は……俺は……）
神の行為ともいえる領域に近づき、フリオの心はおびえる。
しかし、魔人ダオスの意思は高鳴った。
《行くぞ、ためらうな――いや、ためらわさぬぞ！　貴様の体に力を与えているのは、この私なのだからな！》
あきらめなくてはならなかった。いや、心を無にせねばならなかった。

兄のような友を失う悲しさを越え、突入せねばならなかった。未知の領域に。
すべてを凌駕した、神の領域に――。
（わ、わかったよ……ダオスさん……俺は、ダオスさんの『誇り』を守るために、今から自分の弱い心を捨てるよ！）
それは胸の内にめばえた、すべての〝わだかまり〟との決別であった。
すると、その瞬間。フリオの体に自由が戻った。
魔人ダオスの意思は、フリオにすべてを任せたのか。服の力がフリオの支配下に戻ってくる。手も、足も、唇も、フリオの思うがままに動く。
「キャロ！」
上空から、ほかの魔物を撃滅し終えた、エプロン姿のキャロに声をかける。
すずの隣に立つキャロが、勝利の微笑みで見上げる。まだだ、キャロの服の力も借りたい。
「フリオ！」
そう思ったフリオは、彼女のそばに着地し、すぐさま話しかけた。
「一緒に攻撃だ！　一緒に、とどめを刺すぞ！」
「フ、フリオ……」
キャロの瞳が見開かれ、驚きの表情となる。しかし、フリオに戸惑いはもうなかった。
「ためらうなよ、このチャンスを逃すと――次は、ないんだからなっ！」

その意思が伝わった。
「う、うん……私も、フリオと一緒に倒す！」
キャロも覚悟を決めて、うなずき返す。ふたりが並んでダオスに向き直る。
「電撃十連撃！」
「ダオスコレダー！」
星空が歪み、荒野を模した世界全体がつぶれるような、凄まじい衝撃が走る。
「サンダーソード！」
「ブラックホール！」
術が連続する。星の雪崩が、闇の津波が、ダオスを弾き飛ばし、翻弄し、やがって凍てつく死の幕が、その彼の全身を呑み込んでいく。
ダオスは声も出さず、静かに微笑んだ。閃光と雷鳴が轟き、光と闇が交錯する中でそのときを待つかのように、ゆっくりと——死の訪れを受け入れていった。
〝あ……あ……り……が……と……〟
かすかに声が聞こえた。しかし何と言ったのかは、ふたりにはわからなかった。
気がついたときにはダオスの姿は消滅し、その彼を操っていたと思われる黒水晶も、連鎖的に砕け散っていた。残されたのは、静寂の夜の荒野にたたずむサナトスだけだった。
「ダ、ダオスが……く、黒水晶が……砕けた⁉　ウ、ウソだよね……あいつら、クレスたちも

できなかったことを……な、なんでやれてしまうんだ⁉」
　悪魔のような顔をした少年が、とたんにうろたえる。
「サナトス！　知りたいか？　だったら、お前もこっちの世界に来て、俺と戦え！　いつでも相手してやるぞ！」
　フリオは叫んだ。その瞳には涙があふれている。防波堤となっていたダオスはいなくなった。これで、怒りを惜しみなくぶつけられる。
「ボ、ボクを怒らせたな……」
　サナトスがひとり、わなわなと震えている。フリオは泣きながらどなりつけた。
「どうした、来ないのか⁉　怖いのかよ、別の次元からじゃないと、何もできないっていうのかよっ！」
「――黙れ！　お前なんか、怖くないぞ！」
　焦りが滲みだしている。追いつめられたどす黒い心が、見透かされるのを恐れ、怯んだように後退っていく。
「み、見てろよ！　次こそは、お前の心もいただくからな‼」
　堪えがたいほどの屈辱に満ちた白皙の形相が、叫ぶ。
「へっ、そうはさせるかってんだ！　俺は逃げも隠れもしないぞ――お前を倒すまで！」
　そう叫んだと同時に、サナトスの姿は消えていた。

静かな大地……。そこに並んでいた石像の数々が、しばらくして息吹きを取り戻していた。
たくさんの声が、一気によみがえってくる。
「ふーむ、どこまで話したかのぉ～」
「あ、あの……私のお弁当って、とっても評判いいんですよ？　ウフフ……」
「ふぅー、忙しい忙しい！　あっ、いけない！　お花に水をやるの忘れてたわ！」
「待ちなさい、ジャン！　あなた、またルシアを泣かせたわね⁉」
「うひ～、ミル姉ちゃんが怒ったぁ～、逃げろ～」
「わぁ～ん！　ジャンのバカぁ～」
レグニアの町の人たちは、石になっていたことの記憶もないらしい。
それぞれに術をかけられる直前の生活に戻って、騒がしくしていたが、やがてまわりの情景に気づき「ここはどこだ？」と目を丸くさせて、あたりを見回していく。
そんな様子を、フリオたちが微笑ましく眺めていた。
「フリオ……」
キャロが安心した顔で、隣のフリオに声をかける。
「よかった、みんな元通りだ――」
「………」

ふたりの前で、すずがある方向を見つめてうなずく。その視線の先にいたのは、技をくり出そうとして、急にいなくなってしまった敵に驚き、きょろきょろしているクレスの姿だった。

＊　＊　＊

フリオとキャロのふたりの前には、クレスたち六人の勇者たちが並び、それぞれに言葉をかけてきた。

ダオス城から、草原の大地に降り立ったクラースがねぎらいの言葉をかける。

「ご苦労だったな――」

「すばらしい活躍だったそうじゃないか！」

「まさか、お前たちに助けられるとはな……まいったぜ」

「うんうん、あたしが見込んだだけはあるよ！」

「きっと、あなた方が来てくださると信じていました……本当に、ありがとう――」

「おめでとうございます、試練のひとつを乗り越えられましたね……お見事でした」

照れながらフリオは答えた。

「いや、まだまだこれからだよ」

「そう――サナトスが、まだあきらめたわけじゃないもんね」

「ああ、そうだよ！　この次に会ったときは、必ず俺たちが！」
「頼もしいな……」
　クラースが、フリオとキャロをまぶしそうに見つめて言った。
　彼らはやり遂げた。闇の心に惑わされず、ダオスを打ち倒した。辛い選択であっただろう。心の弱い部分に狙いを定めてきたサナトスの謀略に嵌まらず、心を寄せた、あのダオスを倒すことは、微塵の隙も許されぬことなのだから――。
　と、その微塵の隙を見せてしまって石にされたクラースは、自分を恥じるように鍔広の帽子を深くかぶろうとした。そのときだ。
「なあ、クラースさん……」
　フリオが声をかけてきた。
「うん？　何かな」
「サナトスは、なんで人の心を欲しがったんだろう……」
　答えを求める問いかけだった。クラースは、深く息をついてから口を開いた。
「さあな、はっきりとはわからん……しかし」
「しかし？」
「サナトスは、多くの心を集めたかった……それは、注目されたい『願望』がそうさせてるのかもしれんな」

「注目されたい願望……」
クラースは、この世界の勇者にうなずいた。
「ダオスは、利用されて不幸だったが……私は、あのサナトスに、ダオスと同じ匂いを感じた」
「同じ……ダオスさんと？」
フリオはちょっと驚いたような顔を向けてくる。どんな経験を乗り越えても、まだ失われていない純粋な好奇心だった。クラースは静かに答えた。
「そう、サナトスも……本当は孤独だったのではないかな。ダオスの場合は、それを内に秘め、決して表に出さなかったが、サナトスは違う。あいつは外に対して求めようとしていた。自分が感じる、どうしようもない寂しさを埋めようとして――」
「どうしようもない寂しさ……サナトスが……」
フリオが探るようにつぶやく。
「つまり、愛されたいの裏返しだろう。誰かに愛されたいくせに、自分はどうすればいいのかわからない。だから苛立って、暴力を使う……暴力によって人の心を集めたくなるんだ。深いところまでは私もわからないが、サナトスの今までの行動から推測すると、私にはそのように思える――」
そこまで言ったとき、黙って聞いていたみんなの中から、キャロが口を開いた。

「……本当にサナトスは〝寂しい悪魔〟なのかもしれないわね……」
ぽつりとつぶやいたその言葉に、真実への手がかりがあるような気がした。
「へっ！　俺が教えてやるよ、サナトスに！」
フリオはそう言って、頭上に浮かぶダオス城を見上げた。
「暴力を使って、人の心をもてあそぶような奴(やつ)は、最後にどうなるかってことをなっ！」
誓いを立ててるような叫びだった。
そう、サナトスがくり出す心の暴力に、これからも挑(いど)まなくてはならない。
まだ終わったわけではないのだから——。
やがて主のいなくなったダオス城は、その姿を平和な空の中に消していった。

おわり

あとがき

僕には『兄』のように慕(した)った、とても仲のいい先輩がいました。
十代だったころに、いろんな意味で、僕に影響を与えた思い出深い人……。
たぶん一生忘れられない人ですね。
いつもその人の後ろにくっついて、遊びに連れて行ってもらったり、人生の先輩としても、いろいろと良いことも悪いこと（笑）も教えてもらったり……その人といると楽しくて、時間さえも忘れていました。
先輩は、僕のことを一人前の大人として扱(あつか)ってくれました。たとえば、僕が同い年の友達と一緒にいると、先輩が僕のことをその友達の前で誉(ほ)めてくれたりして。そういう見守ってくれているような、おおらかな優しさもありました。
もう二度と会うことができない、憧(あこが)れの人……。
その先輩への気持ちを、主人公のフリオに重ねてみたらどうだろう――と思った瞬間、今回のストーリーが浮かび上がって、一気に本編まで書き上げられました。

出来上がった原稿は、編集部とナムコさんでチェック。
みなさんにはプロットの段階から本文に至るまで、ここはこうしてみたらどうですかという ありがたいアイデアをたくさんいただきました。さすがクリエーターのみなさん、モノづくり に参加する姿勢が違う！　担当編集の丸宝さん、ナムコの笹原さん、そして開発部のみなさ ん。さらにイラストを描いてくださった松竹徳幸先生、ありがとうございました。
この小説は僕ひとりだけの力ではなく、多くの関係者の力とアイデアがたくさん盛り込まれ ています。
ですから、その読みごたえも違うはずです。読者のみなさんには、本文を読み終えたときに それを感じ取っていただけたらうれしいです。
いろいろ感想は出てくると思うんですが、短いページの中で「ファンタジア」だけでなく、 「エターニア」「デスティニー」などの歴代テイルズシリーズのキャラクターをすべて登場させ るのは大変でした――というか、それやってないやん⁉　というツッコミ、こわいのでやめま しょう（笑）。たしかに僕も、最初はそれができたら〝東映まんがまつり〟のヒーローたちの 夢の共演のような楽しさを、みなさんにお届けできると考えていました。
でも、とても入りきらないと思って、あきらめたのです。ごめんなさい。そのぶん「ファン タジア」のキャラクターで頑張ろうと思いました。
まず「ファンタジア」をプレイし直し、設定関係や各キャラクターの主なセリフをメモし

て、次に結城聖先生がお書きになった『ティルズ・オブ・ファンタジア　なりきりダンジョン』の上下巻を読んで、さらに設定関係のお勉強をしました。この小説はゲームの設定をより細かく繙いて書き込まれてあるので、読んでいてとても参考になりました。
何といってもメジャーな原作の小説化ですから、依頼があったときはプレッシャーでした。
でも、とにかく自分の力を信じて、がんばってみよう。
そう思って作業に取り組みました。
さて、『テイルズ　オブ　ザ　ワールド　なりきりダンジョン2』のノベライズ——ここに完成です！
全国のテイルズファンのみなさんのハートに、この物語への僕の想いが届けばと思います。
また、続きがあれば「ファンタジア」の外伝も書いてみたいです。
その日がくることを、今はこっそり楽しみにしましょう（笑）。
では、またお会いできる日まで！

2002年11月　工藤　治

この作品のご感想をお寄せください。

あて先　〒101-8050
東京都千代田区一ツ橋2-5-10
集英社　スーパーダッシュ編集部気付

工藤　治先生

松竹徳幸先生

著者紹介

工藤　治（くどうおさむ）

94年デビュー。ノベライズを中心に『ハーメルンのバイオリン弾き』『マリーのアトリエ』などの人気作を手がける。その実績を買われて、今回テイルズシリーズの小説にも抜擢された。趣味はぼぉ〜っとすることと、仕事以外の考え事。使えないストーリーを空想しては遊んでいる。本当は怠け者。一緒に暮らすネコたちを食わせるためだけに働いている、らしい……。

松竹徳幸（まつたけとくゆき）

本業はアニメーター、他にイラストなど。体長は170㎝くらい。じめじめした所や隅っこを好む。普段は休まないが、正月は長崎に帰り、ゲームなどをして過ごす。

9784086301077

ISBN4-08-630107-5

C0193 ¥495E

1920193004953

定価 本体495円＋税

異世界ユグドラースに魔人ダオスが復活した。だが、この世界の勇者で、女神に選ばれた〝なりきり師〟のフリオとキャロは経験も浅く未熟であった。そこで女神は、歴代の勇者たちを召集し、フリオたちの成長の手助けとダオスの調査を命じる。しかし、唯一人間の住む町『レグニア』を勇者たちが訪ねた時、何も知らないフリオたちはすでにダオスと接触したあとで…!? 大人気シリーズのノベライズ!!